

悠々爺

河原で遊んでいると、悠々爺ゆうゆうじいが手招きをした。手招きをする悠々爺の顔は地面を見ている。全然こつちを見ていない。けれど、私はそれが私に向けられた手招きだとわかる。

悠々爺はきつと背が高いのに、腰がヘアピンカーブみたいにくつと曲がっているせいで少なくとも三十センチくらいは損をしている。いつも地面と対話しているみたいで、前なんてまったく見えていないはずなのに周りのことをちゃんとわかっている。私たちが遠くに悠々爺を見つけると、まだ十数メートルも離れているのにこつちにひらひらと手を振る。頭頂部なごさか（カーブがキマってる日は後頭部）に目が付いているんじゃないかって、長坂の人は噂している。

「医学つちゆうのは日々進歩してるらしいでね。頭の先に目ん玉つけるくらい、朝飯前になつとるのよ」

「またまたあ。ゲンちゃんは冗談なんか本気なんかわからんことを言うでねえ」

「けども、進歩つちゆうのはすごいんだねえ」

「ほうよ。だってほら、持ち運べる電話ができたって話じゃろ？」

「わしたち、年寄りはとつと置いてけぼって、死ぬしかないんかねえ」

「いやいや、そう簡単には死なせちゃくれなくなつとるようだよ。もすこししたら、人生百年時代到来よ」

「百歳言うたら、生きるつたつて化石みたいなもんだらうに。百歳の年寄りつてもんはちゃんと動くんかい？」

悠々爺の噂話をきっかけに、長坂の人たちの話題は次へ次へと移っていく。縁側に座った長坂の人たちのお茶は進み、お漬物の乗ったお皿がどんどんと空になっていく。

悠々爺の本当の名前を知っている人は、たぶんいない。きつとユウジとかユウジロウとかそんな名前なのだと思うのだけれど、直接名前を聞く人はいなかった。いつの間にか、みんなとても自然に悠々爺と呼んでいた。

悠々爺は、気づくと長坂のそばに住み着いていた。長坂というのは、私が暮らす小さな集落だ。悠々爺の家はおんぼろの車だ。車が動いているところを見た人はいないし、その車が悠々爺の運転してきたものなのか、悠々爺が来る前からそこにあったものなのか、確かなことはわからない。とにかく、悠々爺の家はおんぼろ車で、おんぼろ車は長坂と里をつなぐ一本道の途中にあった。

山をぐるぐると削ぐようにして作られた道の中腹あたりに緩いカーブがあって、そこだけ道がせり出すように開けている。広場のようなその空き地の入り口辺りに、悠々爺のおんぼろ車は停まっている。おんぼろ車を通り過ぎてそのまま奥に進むと、巨大な穴がある。人が掘ったにしてはずいぶんと巨大なその穴は、きつと自然にできた穴だ。二十五メートルのプールが悠に入りそうなくらい広くて谷底のように深い。そう聞いた。見たことがないからわからない。子供たちは危ないからという理由で近づくことを禁止されていた。

長坂の人たちは家で採れた野菜や果物やお米を悠々爺に渡して、代わりにゴミを捨ててもらおう。新聞紙、空きカン、電子レンジ、洗濯機、犬小屋。長坂の人の持ち込むごみは多岐に渡った。悠々爺は燃えるゴミと燃えないゴミとに分けて（厳密な分別ではなく悠々爺の基準があるようだった）、燃えるものは焚き火にくべて燃えないものは穴に放った。巨大な穴は、長坂の人のゴミ箱だった。

穴には、空きカンや空き瓶や乾電池など小さなゴミに始まって、冷蔵庫や耕耘機など粗大ゴミも放られた。腰の曲がった悠々爺がどんな風にそんな大きなものを放っているのか、誰も知らない。長坂の人がゴミを持ち込むと、車の前の大きな椅子に座った悠々爺は、空き地の真ん中（穴まで十数メートルはある場所だ）を指差して「ん」とひとつ頷く。長坂の人は、指差された場所にゴミを置いて、「ほじゃ、お願いねえ」と声をかけ、野菜やお米の袋を車の横に置いて帰る。

悠々爺がゴミを穴へ放るところを見た人はいないし、悠々爺の手助けをしたという人も聞かない。悠々爺は分厚くてがっしりとしたからだをしていたから、もしかしたら、腰が曲がっているのはただ単に恥ずかしがり屋だからで、私たちが見ていないところ（たとえば、夜中に長坂の人が寝静まったあとだ）では背筋をびんと伸ばしてサクサクと動いているのかもしれない。ひとりでそんなことを想像していた。

悠々爺はとても無口で、「ん」とか「ああ」しか言わない。そのせいか、なんだかとても深いことを考えているように見える。

「こんな山んなかの田舎で浮浪者みたいな生活をしているのは、なにか考えがあつてのこ

となんだわ、きつと」とか、「本当は大学のお偉い先生様で、世の中を変えるような発見をしたども、ほれ、核兵器みたいに悪用されたら困るで田舎に身を寄せているだ」とか、長坂の人は気が向くと悠々爺の謎とを始める。

悠々爺は謎の人物だったけれどまったく害のない人だったし、ゴミ処理はとても助かっていたから、悪く言う人はいなかった。むしろ、悠々爺の車の前に溢れかえる食料（秋の終わりになると、毛布やカイロや薪が加わった）は、人々に愛されている証拠のようにみえた。手招きをする悠々爺の方へ歩み寄り、互いに手を伸ばせば握手できるくらいの距離まで近づくと、悠々爺は「ん」と頷き、のっそりとかからだを回して背を向けた。それから、一步地面の感触を確かめるようにゆっくりと歩き始めた。私も悠々爺の真似をして、地面を確かめるようにしてあとに続いた。

悠々爺の大きな背中を眺めながら石だらけの道を歩いていくと、木々がこんもりと生い茂る場所に着いた。河原の森だ。

悠々爺は、河原の森でぴんと背を伸ばしたところを見せてくれるのかな。

そんな想像をすると、心臓がとくとくと高鳴ってきて、お腹のあたりがきゅうつと締め付けられるように甘く痛んだ。

河原の森に入っていくと太陽の光が薄くなり、木陰の作る涼しさが火照ったからだを包んだ。近くに水が流れている様子はないのにせせらぎのような音がして、さっきまで聞こえていた鳥の音がしなくなった。ちよろちよろというせせらぎの音が、悠々爺と私の、ごりごりと石を押す足音とハーモニーを奏でる。

ちよろちよろり　ごりごり

ちよろちよろり　ごりごり

ちよろちよろごりごり

ちよろちよろごりごり

音は、私のなかで次第にリズムを刻みだし、気づくと私は歌を口ずさんでいた。

あらくまさん　ありがとう

おれいに　うたいましょう

ラララ　ラララララ

ラララ ラララララ

歌い終わると、それを待っていたように悠々爺は歩くのをやめた。私も足を止めた。悠々爺と私との間には、私八人分くらいの距離があった。

悠々爺はゆっくりと振り向くと、おいでおいでと手招きをした。私は途中で拾った小石を捨てて、再び森のくまさんをハミングしながら悠々爺へ向かいゆっくりと歩いた。近づくとつれて、悠々爺は大きくなっていった。じわりじわりと大きくなった。遠近法的な目の錯覚なんかではなくて、悠々爺は実際に背を伸ばしていた。ぐにやりと曲がったヘアピンカーブがゆっくりと緩やかな曲線へと変わっていく。

「やっぱり！」

私は嬉しくなって立ち止まり、悠々爺が少しずつ伸びていく様子を見上げた。背中に木洩れ日をまとった悠々爺は神々しくて、ドレッドのような長い髪の毛に隠れていつまでも顔が見えないのも神秘的だった。悠々爺は、機関車がゆっくりと発車していくときのように、ゆったりと、でも着実に大きくなっていった。悠々爺は内側から発光しているようだった。眩しくて、まっすぐに見続けていると目を痛めそうなくらいキラキラと輝いていた。

最後に残ったカーブ、うなだれた首をゆっくりと起こした。束になった長い髪がわさわさとして後ろに流れて、悠々爺の顔の全部が現れた。ずっとおじいさんだと思っていた悠々爺は、とても若く見えた。お父さんと同じか、ちょっと年上くらい。お父さんは私が四歳のとき、田んぼのあぜを乗り越えようとトラクターで乗り上げたならひっくり返って、トラクターの下敷きになって死んだ。もしお父さんが生きていたら、悠々爺とお父さんは同じ年だったかもしれない。肌は浅黒くて、髭は生えていない。唇は細い絵筆ですつと引いたように薄くて、少し黒ずんだような色をしている。骨ばった顎と突き出た頬は精悍そうで、それとは対照的に鼻はぼつてりとしていてお団子のようなだった。おでこが出っぱっているせい、瞳はずっと奥の方に引っ込んでみえた。白目が少ないのか影になっているせいなのか、悠々爺の瞳は真っ暗だった。真っ暗だけれど、悠々爺が私をまっすぐ見つめているのはわかった。悠々爺のふたつの暗がりに、私はにこりと笑顔を向けた。

「ゆうゆうじじいって、おとうさんみたい」

悠々爺は、「ん」と頷くと、とんとんと二歩こちらに歩み寄って静かにしゃがんだ。そして、右手を伸ばして私の髪の毛を梳くように撫でた。悠々爺の手はごつごつしていて、同時にふわふわしていた。私の細い髪の毛に指を入れて、ゆっくりと何度も撫でた。耳に当たる

悠々爺の指がくすぐったくて、背筋がぶるぶると震えた。

「くすぐりたいよ。ゆうゆうじじい」

笑って言うと、悠々爺は「ん」と言って、髪を梳くのをやめた。悠々爺はなにも言わずにのっそりと立ち上がると、さっきまで私の髪の毛に触れていた手でズボンのベルトを外してファスナーを開けた。それから、表情を変えることなく、するとズボンを下ろしていった。悠々爺の下半身がむき出しになった。悠々爺は恥ずかしがる様子もなく、下半身を露わにして堂々と立っていた。悠々爺の足元で、ズボンとパンツがかぼちゃのようにたわんでいる。不思議と、怖さを感じなかった。筋肉質で引き締まった悠々爺の脚は薄い光を浴びてシルエツトが浮かび上がって、それはなんだかとても美しく、見惚れた。せせらぎの音はいつの間にか消えていて、代わりに風に揺れる木の葉がわさわさと囁くように鳴っていた。現実感が乏しくて、白昼の夢のなかに迷い込んでしまったようだった。

悠々爺のそれは、私がいつもお風呂で見っていたお父さんのそれとはまったく違って見えた。お父さんのそれがしょぼくれたおじいさんだとしたら、悠々爺のそれはなにかに怒っている若い男の人のようだった。お父さんのそれがいつも下を向いていたのに、悠々爺のそれは胸を張るように上を向いていた。まるで、いつもピンと背筋を伸ばしていたお父さんと常にヘアピンカーブで下を向いている悠々爺が入れ替わったようだった。

「ゆうゆうじじい、どうしたの？」

尋ねると、悠々爺はペンギンが歩くみたいにして、さらに私に近づいた。悠々爺のそれが私の目の前にぐっと寄って、ほとんどくつききそうだった。それはとても強い匂いがした。胃のなかのものがものすごい勢いでせり上がってきた。顔を背けたのに金縛りにかかったみたいに動けなかった。心臓がどくどくと速く鳴っていて、それはさっきまでの朗らかな心音とはまったく違った、怖くてたまらない音だった。息をするのが苦しくて、声を出したいのには胸のところで声の塊が詰まったようにうんともすんとも言えなかった。悠々爺は私の背中に片手を当てて抱き寄せた。悠々爺のそれが、「しっ」と人差し指を立てるように私の前にそびえた。湿り気を帯びたそれは鼻と口を塞ぎ、目の高さにもまで及んだ。

「お口、開けて」

悠々爺の声が上の方から聞こえた。いやだ、と断ることのできないような声だった。怖い声、というのとは少し違う。悠々爺の低い声は、むしろとても優しい音をしていた。それはたとえば、アニメの大量殺戮のシーンで少年少女合唱団の歌う『翼をください』が流れるようなバランスを欠いた不気味さに似ていた。

私は口を開けた。開けた途端、胃のなかのものが吹き出した。たぶんお昼に食べた焼きそばだと思う。悠々爺の股の間にかかったけれど、悠々爺は怒らなかつた。怒らないで、私のゲロにまみれた口にそれをゆっくりと差し入れた。吐き気は治おさまらないしまだ吐きたいのに、口いっぱいに広がるそれはほとんど完璧な蓋のようで、ゲロどころか息をするのも苦しかつた。喉の脇から酸っぱい液体が出て口のなかにじわじわと満ちていった。顔はほとんど悠々爺のお腹にくっついていて、真っ暗で、吐いたものが焼きそばなのかどうかわからなかつた。もしかしたら、朝の卵焼きも入っていたかもしれない。せっかく作ってくれたのに吐いちちゃってごめんなさい、お母さん。ごめんなさい、ごめんなさい。お母さん、ごめんなさい。私はずつとお母さんに謝っていて、けれど、そのうちになにに謝っているのかわからなくなつた。

顎がとても痛くて喉が苦しくて、涙なのか鼻水なのかよく分からない液体が流れてきて、ただ鼻が詰まっているからしょっぱいのか酸っぱいのか、その両方なのかわからなかつた。私の顔はゲロや鼻水にまみれていて、きつともものすごく不潔だつたと思う。悠々爺は全然気にならないみたいに、私の後頭部を優しく抱いたまま腰をゆっくりと振っていた。動きに合わせて悠々爺の喉が突き、えづいた。けれど、私の口のなかには一分の隙もなくてどうすることもできなかつた。

どのくらいの時間が経つたのかわからない。口のなかのそれがぐんと大きくなつたと思つたら、決壊したダムのような勢いでなにかが口のなかに広がつた。

「んっ……」

悠々爺は、ほんの一瞬、苦しそうな声を漏らした。

それはお母さんが捌く魚とか腐る寸前の鶏肉とか皮を剥いだ蛇とか、そういった私の知っているどの動物たちよりも生々しくて凶暴な匂いがした。相変わらず鼻は詰まっていたけれど、その匂いは口の内側からからだ全体に、からだの隅から隅まで広がっていくように私のなかをめぐっていった。

悠々爺は、私のなかにそれを入れたまましばらく私の頭を撫でていた。私の頭をすっぽり覆ってしまうくらい大きな手は、とても優しく私を撫でた。ゆつたりとしたリズムで撫でられてみると、とろとろとした眠気がやってきた。悠々爺のそれを含んだまま悠々爺にからだを預けるようにして眠る私のなかにもう恐怖はなくて、思い返しても不思議なだけけれど安堵のような温かさを覚えていた。悠々爺のそれは口のなかでだらりと脱力していて、その

無防備が私をほっとさせたのかもしれない。気づくと私は眠っていた。

意識を取り戻したとき悠々爺はどこにもいなくて、視界の端に蝉の死骸がひとつ、見えた。蝉は木の根元に仰向けに転がっていた。仲間の死を悼むように、森じゅうの蝉がじいじいと鳴いていた。

どうやって家に帰ったのか覚えていない。帰宅した私の洋服はびしょ濡れだった。

「川にでも落っこちたの？ やだ！ 紗南子<sup>きなこ</sup>、お前、もしかして吐いたの？ すっかり汚れてるじゃない。まったく、洗濯するほうの気……」

お母さんがぶつぶつ言っているところから、記憶が再開している。お母さんに知られてしまうのが怖くて、私はなるべく黙っていた。口を開いたら悠々爺の匂いが漏れ出るのではないかと不安だった。私は口を閉じたまま頭を下げて気持ちを伝えた。

『ゴメンナサイ』

お母さんは悠々爺の匂いに気づかないまま、ぶつぶつ言いながら洗面所へと消えていった。部屋の隅の方で、その日臨海学校から帰ったお兄ちゃんたちが難しそうな顔でこそそとなにかを話していた。

私は、誰にも悠々爺のことを話さなかった。どうして話さなかったのかわからない。ただ、みんな悠々爺のことを好きだったし、いい人だと思っていた。実際、私自身、それが起こるまでそう思っていた。私が話したところで誰も信じなかったと思う。夢でも見たんじゃないかと相手にされなかったと思う。それを経験した私ですら、悪い夢のなかを彷徨っていたような気持ちでいた。頭のなかにぼんやりと佇むその出来事は、けれど、私のなかからいつまでも消えなかった。

夏が終わり木々の葉が落ち、雪が積もり、積もった雪が長坂から音を奪い、静寂の季節となった。長坂の人たちは、黙々と、淡々と、いつものように静寂の冬を送り春を待った。

年が明けて間もなく、ちよつとした騒ぎが起きた。ゴミを捨てに行っても食料を差し入れに行っても、悠々爺が広場にいないのだ。そんな日が一週間ほど続いた。不審に思った長坂の人が、隣町の消防に通報して捜索してもらったところ、悠々爺は穴のなかで見つかった。

大きくて真っ赤な冷蔵庫の上に乗るようになって死んでいた。新しく降った雪が、悠々爺を隠していた。冷たくなった悠々爺のからだは腰がピンと伸びていたと消防の人が言っていた、と長坂の人が噂した。

「こないだ薄く積もった雪で、地面が凍ってんに気づかなかっただじゃねえか？ すってーんで転んでそのまんま穴ん中に行っちまっただ。ご愁傷様に」

悠々爺の遺体は里の施設で燃され、無縁仏として長坂のお寺の片隅に埋められた。ゴミ捨て場は、不法投棄として問題になり閉鎖された。

一ヶ月後、私は七歳の誕生日を迎えた。

## 牢やぶり

「長坂の人たちの血は、濃いんだ」

「正確に言えば、かつての長坂は血が濃かった。血は徐々に薄くなっているんだ」

小学二年の春休み、かずみ兄ちゃんの部屋に集まり三人で私の宿題に取り組んでいた。宿題は、自分の生い立ちや将来の夢について、絵を描いたり写真を集めたり文章にしたりして一冊の冊子を作るというものだった。道徳かなにかの課題だったと思う。お母さんに聞いてもきつとちゃんと話してくれないだろうと思って、お兄ちゃんたちを頼った。小さかった頃の私のことをインタビューしていると、ひろし兄ちゃんがい出したように長坂の人たちの血の話始めて、かずみ兄ちゃんがそれを補う言葉を継いだ。

お兄ちゃんたちが教えてくれた話は、布団に横たわるふたりの枕元で、小さな背中を丸めて正座をしたおばあちゃんが、寝しなに聞かせた話のうちのひとつだった。まだおばあちゃんが生きていた頃、つまりふたりが私より小さかったとき、お兄ちゃんたちはおばあちゃんからたくさんのことを教えてもらって、そのなかには長坂の言い伝えのようなものも少なくなかった。おばあちゃんは私が一歳のときに死んだから、私自身はおばあちゃんにまつわる記憶がほとんどない。

「血がこいって？」

「血のジュンドが高いことだよ」

「まじりけがないってことだよ」

「それって、いいこと？」

「競走馬やペットやチクサンの世界ではよしとされている」

「けれど、僕らは馬でないしアイガン動物でもないし、食用の肉でもない」

「ジュンケツは先天的なショウガイを引き起こすこともあると言われているんだ。人間に



とってはあまり好ましくないだろうね」

「どうやったら血がこくなるの？」

「ケツエンの近い人どうしの血がまざると濃くなるんだ」

「たとえば、ケツエンの近い人どうしで子供を作るとか」

「けつえん？」

「親や兄妹姉妹といった家族のことだよ」

「叔父さんやいとことか親戚のことだよ」

おばあちゃんが子供の頃まで、長坂では近親婚が普通に行われていた。兄弟姉妹同士の結婚というのはなかったものの、いとこ同士の結婚というのは珍しくなかった。外の血が入ってくることはあまりなくて、長坂の血は純度を増していった。誰かが誰かの親戚か遠縁にあたることは珍しくなくて、苗字も片手に収まるくらいの種類しかなかった。そのせいか、長坂の人はよその家を指すとき苗字ではなく名前で呼んだ。「聡子ちゃんち」とか「宗男さん」とか。

長坂の人は、同じような顔つきで同じような体型をしていた。生まれてくる子も、同じような顔をしていた。標準よりも小さめで、手足が赤ん坊にしては長くて、鼻が立派な子だ。

他の赤ん坊と見た目の違う子が生まれたりすると、長坂の人は茶々を入れた。

『こん子は、だあれとも似とらんねえ。お前、よそもんとやりおったね』

『あんときの祭りの子か？』

『ほしたら、名前はまつりでよかるうに』

赤ちゃんを抱く本人の前で、遠慮なく言った。

父親のわからない子の家はひとり親となるものの、長坂を出ない限り生きていくのに困ることはなかった。たいてい父親と母親が同居していたし、ひとり親の家には長坂の人たちからの野菜やお米の差し入れが絶えなかったからだ。父親も母親もいないまるっきりのひとり親には、夕飯のおすそ分けをする人までいた。子が成長して乳ばなれする年齢になると、母親は、農業の一線を退いたお年寄りたちに子を任せて畑に出た。

「時代がくだって、おばあちゃんの代の頃になると里や町に働きに出る人が出てきたりして、ようすが違ってきたんだ」

「民枝さんたちの頃になると、近親婚をする人はほとんどいなくなったと言われているよ」  
民枝さんというのは、おばあちゃんとお母さんの間のおばさんだ。おばあちゃんの子になるにはちよつと年がいついていて、お母さんの母親になるにはちよつと若い。

「今では、長坂の中でも、近親婚はすっかりタブーになっているんじゃないかな」

かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんはそう言ったけれど、民枝さんのお姉さんの旦那さんは民枝さんのいとこだから、風習の名残はきつとまだ少し残っている。

私のお父さんは長坂の人ではない。つまり、私のお母さんは外の人と結婚したということになる。

「だから、僕らは心配しなくていいんだ」

「そう。なにも不安に思うことはないよ」

お兄ちゃんたちは言ったけれど、小学生の私はなにに安心すればよいのかよくわからなかった。

その意味を知ったのは、それから数年後、友達の家に遊びに出かけたときのことだ。隣町の新興住宅街、緩い傾斜の中腹に友達の家はあった。白壁が印象的な洋風のその家は、長坂の家の標準である日本家屋とは似ても似つかなかった。おやつといえばお茶とお漬物だと疑わなかった私に出されたのは、紅茶とケーキだった。ケーキはショートケーキだったりシフォンケーキだったりチョコレートケーキだったり、いつも違うものが出た。

世界が違う。

私は高校一年にして初めて、長坂の外の世界をはっきりと知った。長坂の外には牢はないし、やみ人らしき人も見当たらない。苗字だってバラエティに富んでいる。

『牢はどこにあるの?』

そう聞くまでもなく、その家に牢などないと悟った。今まで世界だと思っていた長坂が一気に色褪せていくようなしぼんでいくような、そんな感覚に頭がくらくらとした。

「かつて、長坂にはやみ人がたくさんいたらしい」

かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんはしばらく経った別の日に、再びおばあちゃんから聞いたという話をした。私を真ん中にして川の字になって寝転んでいて、それぞれタオルケットをかけていた。豆電球を消した部屋は、開放された窓の網戸越しに入る月明かりでうつすらと明るかった。

「やみびと?」

「やみ人というのは精神を病んだ人のことだ」

「そう、やみ人。病みと闇をかけた言葉だよ」

かつて、長坂には精神病を患った人が多くいて、その人たちのことを長坂の人は「やみ人」と呼んだ。ごく限られた人たちではあるけれど、長坂のなかにも、血の濃さがやみ人を生んでいるのだと、近親婚に警鐘を鳴らす人たちもいた。今では常識のように語られているそうした言説が出てきたのは、けれど、おばあちゃんたちが大人になってしばらく経ってからのことだった。おばあちゃんが子供だった当時、近親婚の危険性を疑う人はいなかった。もしかしたら、勘づいてはいたものの、長坂の閉鎖的な気風に吞まれて外の血を入れるのを拒まざるをえなかったのかもしれない。

やみ人が多く出ていた頃、長坂では神隠しも多発していた。

『どこそこの誰それは最近見ないが、神隠しにでもあったじゃねえか』

そんな噂が流れるとき、その人はやみ人となり牢に閉じ込められていた。長坂の人たちはそれに気づいていた。気づいていたものそれを指摘する人はいなかった。まるで、「神隠しにあった」とわざわざ言葉にすることで、やみ人が出たことを隠そうとしているようでもあった。長坂の人たちは真相を知っているにも関わらず、神隠しが出たものとして振る舞った。男の人たちは五人ほどの班にわかれて長い棒を持ち鬱蒼とした山に入り、子供たちは母親たちと一緒に五、六人ほどの班にわかれて家々をつなぐ畑や田んぼのあぜ道を歩いて回った。長坂の人たちは無駄口を叩くことなく黙々と、真剣な顔で消えた人を探した。警察に届けることはなく、人の消えた家やその周辺を周到に避けながら人を探す振りをした。

「牢」というのは、やみ人を閉じ込める小部屋のことだ。どの家にも例外なくあった。牢には窓がないため暗かった（これが「闇」の由来だ）。やみ人をなかに入れると、家の人は鍵をかけた。鍵は南京錠だったり門だったりした。扉の木戸には悪魔払いのお札が貼られ、部屋にあるのは簡易トイレと万年床だけだった。

長坂の人は、家にやみ人が出るとどこからか祈祷の人を連れてきて祈りを捧げてもらった。祈祷の人といっても、たとえば白い装束のような特別な衣装を身につけているわけではないし、しゃんしゃんと鳴る杖や祈りの道具といった特別な装備を持つてくるわけでもなかった。呼ばれてくるのは、長坂の人と変わらない見た目の、どこにでもいそうな人たちだった。長坂の人は、遠い親戚でも呼んだように（あるいは、長らく会っていない人たちと再会したように）振る舞った。決して、祈祷の人が来ると教えることはなかった。長坂の人は、祈祷の人を呼ぶことを隠した。けれど、その日は、鶏たちの騒めくような鳴き声が長坂の山に轟いた。みんなは鶏のその声で、祈祷の人が来たことを知った。

家の人は、飼っている鶏を絞め殺し、祈祷の人に供えた。気絶させることなく、いきなり首の動脈を切った。首からはどくどくと血が流れ、地面を赤く染めていった。当の鶏は、じっとしていた。自分に起きたことがわからないのかそれとも諦めなのか、暴れもしなければ鳴きもしなかった。ただ、周囲の鶏は違った。死にゆく仲間の気配を察するのか、残された鶏たちは泣き喚いた。小屋のなかをコトコトと慌ただしく歩き回り、羽をばたばたと羽ばたかせながら、決して飛べない鶏たちは、くっくる、くっくると、悲しみの声を上げた。仲間たちのその声のなかで、首を切られた鶏は事切れていった。皿に乗せられた鶏の瞳は白く、もうなにも映さない。家の人が首を落とし羽をむしり内臓を取り出すと、独特な匂いが辺りを漂い始める。生きた家畜の糞尿の臭いとも死んだ家畜の内臓の血なまぐさい臭いとも違う臭いだ。それは、死んでいった鶏の残した恨みの匂いのようなだった。

雪深い集落だったから、祈祷の人が来るのは大抵夏だった。標高が高いせいで夏でも吹く風は涼しく、家の窓を全開にしていると自然の風が家を冷やした。夜、タオルケット一枚で眠っていると、肌寒さで目が覚めることもあった。エアコンなど贅沢な時代だったけれど、そもそも長坂には必要がなかった。

鶏を殺した日、開放された窓から殺された鶏の残した恨みの匂いが入り込み、家を巡った。恨みの匂いは風に乗って家の隅々まで広がった。その匂いは、木戸の隙間を通り牢のなかにも入っていった。窓のない牢に流れた恨みの匂いは、そこに留まった。やみ人は狭く暗い部屋で、健康な人でも精神を病みそうな匂いを吸いながら数日を過ごさなければならなかった。快復を願う祈祷してもらった結果、やみ人はさらに深く精神を病んだ。常識的に考えれば当然のようにわかる因果だけれど、当時を生きた長坂の人はそれに気づかなかった。次の夏、新たな祈祷の人を呼び、また次の年も新たな祈祷の人を探した。牢から出ることなく衰弱し、死んでいくやみ人が後を絶たなかった。

「もしかしたら、長坂の人が願っていたのはやみ人のカイクなんじゃなくて、やみ人が死ぬことだったんじゃないかな」

「うがった見方かもしれないけど、やみ人を殺すために祈祷の人を呼んだんじゃないかな」  
かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんは、そう推測した。

里まで下りれば精神科病院があったものの、やみ人がそこへ連れて行かれることは滅多になかった。やみ人は長坂の恥だった。長坂の人は恥を隠すのに精一杯だったし、長坂の人のなかですら自分の家にやみ人が出たことを隠した。やみ人が出たことを知られるのは恥だった。

「恥の文化」が何世代かにわたって流れた結果、長坂の人たちはやみ人について語ることをやめた。話題に挙げなければ知られることもないと学んだのだ。影でどこその家にはやみ人が出たと噂する人はいなかった。最寄りの家が祈祷の人を呼ぶと、その近所の家々の窓はピタリと閉じられた。その日、子供がその家に遊びに行こうとすると親に止められた。理由は教えてもらえなかった。みんなとても静かに、やみ人をさらなる闇へと葬った。ねじれたような奇妙な連帯が暗黙のうちに強固なものとなっていった。

「今では牢にやみ人を閉じ込める家はないらしい」

「やみ人自体ほとんど出なくなったし、やみ人が出ても里の病院へ連れて行くようになったからね」

「おばあちゃんがそう言っていたんだよ」

「あのおばあちゃんは眠そうだった」

ひろし兄ちゃんとかずみ兄ちゃんは言った。

「もう怖がる必要はないんだ」

「すっかり過去の話だからね」

今は牢の扉は開け放たれているか、仮に閉まっていたとしても鍵はかけられていない。閉じられた扉を開けると、やみ人ではなく洗剤とかトイレトペーパーといった日用品や子供が学校で作った作品が置かれている。かつての牢のほとんどは、物置や納戸となっていた。

「長坂の人は、どうして牢にとじこめるのをやめたの？」

「きつとジンケンの問題だね」

「シャカイツウネンはちやくじつに進歩してきているんだ」

「見かけ上はね」

ひろし兄ちゃんとかずみ兄ちゃんは、淡々と言った。

「見かけ上？」

「そう。ぱっと見た限りはね」

「そう。嘘がまじってるんだ」

かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんは声をひそめた。

お兄ちゃんたちの分析によると、長坂の人たちは開放的な心で温かくて距離感の近い人付き合いをしているように見えるけれど、それはおそらく表面的な姿だった。長坂の人たちは、依然として超えてはいけない一線を張り巡らせている。タブーと呼ばれるものだ。タブーは牢ややみ人の名残だったり、時代が下って新たにできたものもあるのだとお兄ちゃん

たちは言った。

それはどんなものなのかお兄ちゃんたちに聞くと、

「オレたちにもわからないだよ」

「これはカセットでしかないからね」

芝居がかったように首を振り、天を仰いでみせた。

頭のなかにある長坂の人たちの親切で人懐こい顔が、途端に仮面のような無表情なものになっていく。急に怖くなった。心臓がドキドキとして、からだが固まっていく。

「なんてね」

「冗談だよ」

お兄ちゃんたちは明るい声で言った。

「今の長坂はすっかりケンゼンだ」

「そう。完全にケンゼンな集落だ」

お兄ちゃんたちは、そう言って白い歯を見せて笑った。

小学三年の春。ある遊びが流行った。

牢やぶり。

たしかひろし兄ちゃんがそう呼んだのをきっかけに、私たちもその遊びを牢やぶりと呼ぶようになった。

「私たち」というのは、中二のひろし兄ちゃんに、中三のかずみ兄ちゃんと小五の大輔、大輔の妹の結芽ゆめ（六歳）と私を加えた五人だ。大輔にはあとふたり、三歳と二歳の弟がいた。

普段はおばあちゃんが面倒を見ていたから牢やぶりに参加することはなかったけれど、田植えが始まり慌ただしくなると、大輔と結芽が弟たちの手を引いてやってくることもあった。

牢やぶりというのは、留守の家に忍び込んでその家の牢を探すというものだ。大人たちは、日が暮れるまで仕事に出ているし、お年寄りたちが家にいるとしても縁側で茶飲み友達と一服しているのがほとんどだった。長坂の人に玄関の鍵をかけるという習慣はなくて、どの家も鍵を開けたまま留守にしていた。大人やお年寄りに見つからないようにその家の牢を破る（見つける）という遊びはとてスリルがあった。ひろしに兄ちゃんがどこかから古びた住宅地図を見つけてきて、牢を破った家には赤鉛筆でバッテンをつけた（空き家には青

鉛筆でバツテンをつけた。バツテンで消されていく地図の四角を眺めていると、自分たちがなにか重要なミッションを任されているような気分になった。

それは、二十軒目の牢やぶりだった。目の前で、黒瓦が敷かれた入母屋屋根いりもやの日本家屋が存在感を放っていた。

「でかいな」

「やぶり甲斐があるね」

私たちは、静かに格子門戸の引き戸を開けた。

侵入した私たちを迎える土間は広くて、私たちは思わず怯み、動きを止めて息を潜めた。

「行くよ」

かずみ兄ちゃんの一言で、みんなは再び動き出した。静かに靴を脱ぎ、音を立てないように慎重に上り框に足を踏み入れた。

広々とした板の間にはいくつもの深い傷が刻まれていて、薄暗い光を受けてつるりと照っている。黒々と光る太い柱が何本も伸びていて、見上げた先の梁はたくましい曲線を描いて天井を走っている。今まで忍び込んできた他の家とは一線を画す、格式のある家だった。

「今日の家、ずいぶんと立派だね」

「長坂は似たような家ばかりだけど、それにしても立派だね」

私と大輔が天井を見上げながら言うと、

「これがトウタという現象だよ」

かずみ兄ちゃんが教えた。

「とうた、って？」

結芽が聞くと、

「強いものが残って弱いものがほろびることだよ」

ひろし兄ちゃんが説明した。

「そしたら、とうたは長坂を強くするってこと？」

大輔が聞くと、

「いちがいにそうは言えないかな。トウタによって残ったものは、ある環境下では強さのシヨウチヨウだけど、別の環境下ではキョウリョウでしなやかさに欠けるせいでもろくもなりうるからね」

「トウタというのは、ようするに弱いもののハイジヨだからね」

「なんであれ、ハイジョの向こう側にはヘイガイがつきまとう」

「適度にまじりあったものの方がジュンノウセイがあるんだよ」

かずみ兄ちゃんもひろし兄ちゃんも、難しい顔をして言った。

板の間を抜けると、窓際に幅の広くて長い縁側が伸びていた。洗濯物が干されている。くたびれたパンツや肌着やズボンや靴下が、人の抜け殻のように宙に浮いている。どの家の縁側にも、豆だったり柿だったり季節の野菜や果物が干してあったけれど、その家の縁側には、薄く切られた芋が平たいザルに並べられていた。お茶を飲んでいるお年寄りたちがいるわけでも、日向ぼっこをしている猫がいるわけでもないその縁側に、ぽかぽかとした太陽の光が落ちていている。木の色の褪せた板の間が、なんだかとても寂しそうにみえた。こんな平和な陽だまりに誰もいないのはもったいない。そう思った。

縁側の左側には、何十畳もありそうな畳敷きの広間があった。広間には、田んぼの田の字を書くように十字に敷居が引かれていて、襖をすべて閉めると四つの部屋に区切れるようになっていている。夏だったせいか、襖は開け放たれていた。

「ひろいね、にいちゃん」

「うん。俺んちも広いけど、ここには負けるな」

結芽と大輔が驚いていると、

「しっ。人がいる」

かずみ兄ちゃんが人差し指を口の前に当てた。

これまでの牢やぶりで見つかったことはなかった。見つかってしまったら、そこで終了だ。私たちは息を飲んだ。

「大丈夫。見つかっていない」

ひろし兄ちゃんが囁いた。

「確かに。眠ってるみたいだ」

かずみ兄ちゃんが指差した先には、小さくて顔じゅうに皺を刻んだお年寄りが置物のように背を丸めていた。

その家は、「田」の字の右上の四角だけを居間として使っているようだった。縁側から離れたその一角だけ、生活感が溢れている。お茶菓子や急須や湯のみの置かれた大きな座卓。地名の書かれた三角形のワッペンが所狭しと貼られた壁。山盛りのご飯に箸が立てられ供えられたお仏壇。お年寄りは、お仏壇の隣の座卓で座椅子に座っていた。くすんだ色合いの洋服とくすんだ色の壁。くすんだ感じの装飾品や置物。お年寄りは景色にすっかり馴染んで



いた。じつと目をつむって動かないお年寄りは、おばあさんなのかおじいさんなのかわからない。

不意に、背中を丸めて固まったように眠るお年寄りが死んだ人のように見えた。あまりにじつとしたま動かないからだ。お仏壇に別のお年寄りの遺影が飾られていたのも関係していたかもしれない。

「あの人、死んでない？」

誰にともなくそう聞くと、

「かっつてに殺すなよ」

大輔に小突かれた。

けれど、どうしてもお年寄りは死んだ人に見えた。ピクリとも動かないし、白くて乾いた質感の肌もお年寄りから生命感を奪っていたし、なにより生きているにしてはサイズがとて小さかった。死んだ人間が縮んでみえるように、眠っているお年寄りは（通常のサイズがどのくらいかも知らないのに）からだが一と回り縮んでいるように見えた。死んだようなお年寄りを眺めていると、おじいちゃんが死んだ日のことが蘇った。

『死人がちぢむのは、からだからタマシイがぬけるせいなんだ。タマシイの重さの分だけ、人間はちぢむんだよ。だから、タマシイがデカかった人ほど、生きてるときと死んだときのギャップが大きいんだ』

おじいちゃんが死んだとき、私は五歳だった。棺のなかのおじいちゃんがあまりに小さいのが不思議で、隣と一緒に棺を覗いていたかずみ兄ちゃんに聞くとそんな風に教えてくれた。

『じいちゃんのタマシイは、デカかったってことだ。じいちゃんのタマシイ、どこ行ったんだろう。じいちゃん、聞こえてる？』

おじいちゃん子だったひろし兄ちゃんは、おじいちゃんの皺の寄った額を親指でずつと撫でていた。

私たちはお年寄りを起こさないように、牢の搜索を始めた。その家は、中二階のある変則的な二階建てで、とにかく階段がたくさんあった。それぞれの階の面積が広いせいか、二階へ繋がる階段は三つあったし、四、五段で終える短い階段もいくつもあった。階段は、子供の私が両手を広げても届かないくらい幅があつて、私の足三つ分以上の奥行きのある立派な板が使われていた。勾配が急で、平行に板を並べただけの段と段の間には隙間があつた。スカートをはいた人のパンツが見えないのか心配になるような階段だった。

窓がない納戸のような部屋や、廊下の窓の光が届かない部屋もたくさんあった。部屋は大  
小合わせて十以上はあった（あまりに多いから、途中から数えるのをやめた）。家は全体的  
に暗くて、その暗がりのせいか、長坂の家はどの家も似たような家のはずなのにまるで迷路  
のように全貌を知ることが難しく、牢もなかなか見つからなかった。

そろそろ家の大人が帰ってきてしまうかもしれないと諦めかけたそのときだった。

「オレ、見つけたかもしれない」

ひろし兄ちゃんが指をさした。ひろし兄ちゃんの指差す先には中二階へ伸びる五段の階  
段があった。

「暗くてよくわかんないよ」

「まっくらだよ」

首をひねる大輔と結芽に、

「よく見てみ。あの階段の下」

ひろし兄ちゃんは興奮を抑えるように低い声で言った。ただの板壁のように見えるそこ  
は、よく見ると細い隙間が空いていた。

「行ってみよう」

かずみ兄ちゃんが階段の下へと歩み寄ると、ひろし兄ちゃんと大輔と結芽、そして私がそ  
の後に続いた。

近づいてわかったのは、扉は二重になっているということだった。壁に見えた外側の木戸  
は、壁のなかに仕舞われるような仕組みになっていて、その内側には格子戸があった。木戸  
と格子戸との間には人がひとりくらい入れる隙間があつて、内側から扉を叩いて存在を知  
らせることができないように工夫されていた。格子戸の端には、南京錠がかけられた跡なの  
か、金具がはめてあつたような穴が開いていた。扉は、子どもの私たちでも屈まないといれ  
ないようなひどく狭いものだった。背中を丸めて戸をくぐり牢のなか入ると、思いの外、天  
井は高くて奥行きのある空間が広がっていた。そこには何も置かれていなくてがらんとし  
ていた。部屋の隅に畳一畳分くらいの四角い染みがあった。万年床の名残なのかもしれな  
い。牢全体に、からだに悪そうな湿っぽくて埃にまみれたような匂いが沈んでいた。

「本気の牢だ」

「うん。かなり気合が入ってる」

空っぽの部屋に、お兄ちゃんたちの声はハツとするほど良く響いた。お兄ちゃんたちは牢  
の様子に驚いていたようだけれど、このとき、お兄ちゃんたちが自分の家にも本気の牢があ

ると知っていたのか、私たちが見つけたあの牢はニセモノの牢だと知っていたのか、本当のところはわからない。けれど、私の家にある本気の牢の本当の姿をきつとふたりは知らない。そう思った。

九月の最後の土曜日、三十七の赤いバツテンをつけたところで牢やぶりは終わった。私たちは、長坂の牢をコンプリートした。

## 壁

学校は、長坂からスクールバスで三十分ほど下った里山にあった。小学校と中学校が同じ建物の、いわゆる分校と呼ばれるその校舎は木造の二階建てで、一階に小、中学生の教室と職員室、給食を作る調理場や主に食堂として使われている多目的ホールがあり、二階に美術室や音楽室や理科室といった特別教室があった。

里山とはいえ雪深い村だったから、冬になると体育の授業はスキー一色となった。校庭には青い塗装の剥げかけたスキーのジャンプ台があって（ジャンプ台は校庭の端にある小さい丘の上に据えられ、丘から校庭に伸びる傾斜に着地できるようにになっていた）、裏山は一部の木が綺麗に刈られて整備されアルペン競技用のコースとして使えるようになっていた（雪が積もると、新雪の中をスキーを履いた生徒たちが列をなして横向きにザクザクと降りるという方法で雪を固めてコースを作った）。校庭の周りには、クロスカントリースキー用の溝が引かれて、日課である毎朝のマラソンの代わりに、スキーを履いてこのコースを周回した。ジャンプとアルペンの授業は、私が三年生になる年に廃止された。ジャンプの授業で骨折をしたり、裏山のコースを外れて木にぶつかるとして毎年のようにけが人が出る事が問題となったのだ。少し前までおらかだった保護者が、時代とともに神経質になっていったという事情もあったようだ。ジャンプ台と裏山は封鎖され、学校で「スキー」と言えばクロスカントリースキーで校庭をぐるぐると回ることを指すようになった。

長坂の子たちは、朝七時半に公民館で待っているスクールバスに乗り込み、里まで行って授業を受けて、午後四時に中学生と一緒にスクールバスで長坂まで帰った。授業が早く終わる小学生組は、中学生が授業を終えるのを待つ。いったん帰宅して戻ってきた里山組の小学生たちと一緒に三角ベースやドッジボールをして遊んだ。盛り上がって騒ぎすぎると、先生が来てボールを没収される。鬼ごっこに切り替えて遊んでいても、騒ぎすぎると再び先生が

やってきて「お口にチャック。校庭十周」と宣告し、校庭を走らされる（里山組はここで帰る）。先生の監視付きだから、もう騒げない。

一、二年の合同クラスと、三、四年の合同クラス、五、六年の合同クラスで、中一から中三が同じクラスだった。片方の学年が授業を受けている間、残された方の学年は問題を解いた。問題を解いてわからないところを先生に聞く。先生が忙しそうなときは子供同士で教えあう。放課後は騒ぐけれど、授業中はみんな真面目に取り組んだ。

生徒の数は全校で二十三人。小学生が十八人で残りの五人が中学生だ。長坂の子が五人で残りは里の子たちだった。そのなかで、お兄ちゃんたちの頭の良さは群を抜いていた。中三のかずみ兄ちゃんと中二のひろし兄ちゃんは、先生たちからも一目置かれていたし、わからないところを丁寧に見えるから全校生徒たちからの信頼も厚かった。休み時間に小学四年の私の教室にやってきて、みんなに勉強を教えてくださいれることもあった。テストはほとんどいつも満点で、通知表の生活態度の評価もすべて二重丸だった。顔も整っているし、背も高い。お兄ちゃんたちは学校中の人気をふたりで分け合っていた。

かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんが物知りで賢いのはわけがある。

歎玄さんだ。

歎玄さんは生庵寺しょうあんじというお寺の住職さんだ。お父さんもおばあちゃんもおじいちゃんも生庵寺に眠っているし、お母さんもこのお寺に眠ることになる。歎玄さんは、長坂の子だったけれど、高校を卒業してからあまり長坂に帰ってこなくなった。親子の仲が悪いとか、お寺の後継ぎはどうなるのとか、長坂の人たちは好き勝手なことを憶測で噂していた。

「生庵寺はおしまいだわ。わしらの魂は放置されるだわ」

長坂の人たちはいろんなことを言っていたけれど、この一点で意見が一致していた。だから、先代の住職（歎玄さんのお父さんだ）がすい臓の病気であつという間にこの世を去ってから間もなく歎玄さんが長坂に戻ってきたときは、みんながざわついた。

「あの歎ちゃんかい？」

「変わらんねえ」

「あんな格好で坊さんなんて務まるんかい？」

「なにはともあれ、わしらの魂が放られなくてよかったわ」

長坂の人たちは、陰ではこそそそ言いながらも、歆玄さんを歓迎した。

歆玄さんが長坂に戻って来たのは、私のお父さんが事故で死ぬ数ヶ月前のことだった。うちには歆玄さんと一緒に撮った家族写真がある。その一枚の写真には、おじいちゃんがいる小学生のお兄ちゃんたちがいる。お母さんがいて、死ぬ間際のお父さんもいる。日に焼けてがっしりとしたお父さんの隣に写る歆玄さんは、ひよろりとした背の色白で、長坂にはあまりいないタイプの人だ。浄土真宗だから坊主じゃなくて、ふさふさとした黒髪が目にかかりそうで、まるで変装しているような眼鏡をかけているのもお坊さんに見えない。黒目がちの瞳は光の加減か潤んでいて、歆玄さんは不安げでひどく弱そうに頼りなげだ。歆玄さんは、若い。たぶん、お母さんより若い。写真を撮ったときの歆玄さんは、きっと二十代後半だ。写真を見ていると当時の様子が思い出される。日曜日のお昼時、一軒一軒挨拶に回っていた歆玄さんにお父さんが声をかけて、写真を撮ることになった。セルフタイマーをセットしたお父さんが慌てて駆けてきて私を抱っこした。私は、同じくらいの高さにある歆玄さんの横顔を眺めながら、子供ながらに、この人がお坊さんになるなんて大丈夫なのかなと心配に思った。家族写真のなかの私は、横を向いている。

お父さんが死んでから、お母さんにおつかいを頼まれたお兄ちゃんたちにくっついて生庵寺に行くことが何度かあった。お母さんから渡された籠を代わり番こで持って歩くかずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんと並んで、生庵寺に続く道を歩いた。籠にはアケビや柘榴ざくろや柿など季節の果物が入っていたり、畑で採れた野菜が入っていた。お母さんが作ったお惣菜を届けたこともあった。籠ではなくて生花を持たされることもあった。坂を下って、分岐の道を橋の方へ進み、車一台がようやく通れそうな狭い吊り橋を渡って、緩やかな上り坂を少し歩くと生庵寺に着く。子供の足で三十分くらいかかった。

「こんにちは、和巳くん、浩くん、紗南子ちゃん」

歆玄さんは私たちを出迎えるとき、必ず三人の名前を呼んだ。歆玄さんの声は、低くも高くもない、特徴のない平らかな声をしている。

「お経を読むのにあまり向いていない声だ」

「ありがたみに欠ける声だ」

「こんな声だと極楽に行けるものも行けなくなる」

歆玄さんの声について、長坂の人たちはいろんなことを言っていたけれど、それは歆玄さ

んが長坂に来たばかりの頃、挨拶回りをする歓玄さんの声を聞いてのことだった。

歓玄さんのデビューは、私のお父さんの葬儀だった。長坂の人はお父さんの死を悼むのは別の目的で、つまり歓玄さんの読経を聞くためにこぞって生庵寺に集まった。

「きつとお粗末なもんには違いねえぞ」

「美南子の旦那も気の毒なこったわ」

長坂の人たちは声には出さないと目と目を光らせて、歓玄さんがお経を読むときを待った。

歓玄さんの読経はみんなの期待を裏切った。この頼りないからだのどこから出てくるのかというような、低くて深みのある声に、集まった人たちは息を飲んだ。ひとりきりでお経を読んでいるはずなのに、声はとても重層的で、高い声と低い声が倍音となって本堂のなかをぐるぐると渦を巻くように轟いた。その渦は、気づくと私のからだの内側に入ってきて、お父さんの死によってからだの内側にぽっかりと空いてしまった空洞を満たしていくようだった。歓玄さんの声は、お父さんの去っていったこの世界とお父さんがこれから訪れる世界とをつなぐような安心感があった。お父さんが新たに住まう世界の扉をゆっくりと開けるように、歓玄さんは丁寧にお経を読んだ。

「ああ、きつとお父さんはこの声に乗っかって天国に行くんだ」

お父さんがいなくなったのはとても悲しかったけれど、歓玄さんの読経を聞きながら心が安らいでいくのを感じた。気づくと、かずみ兄ちゃんの腕のなかで眠っていた。

当時、私は四歳だった。だから、あの日の歓玄さんの声について、こんな風に論理立てて考えられただけではない。この記憶は後から作り上げた物語めいたものなのかもしれない。それでも、ときおり本堂から流れてくる歓玄さん読経を聞くと、お父さんはこの声に連れられてちゃんと極楽浄土（仏様が行くのは天国じゃないのだと後から知った）へたどり着いたのだと思うのだった。

「歓玄さん、本ありがとう。仏教ってキレイごとばかりなの？」

「学校の先生が代わりに書いたんじゃないかって疑っちゃったよ」

かずみ兄ちゃんが本を差し出すと、歓玄さんはそれを受け取りながら穏やかな笑みを浮かべた。

「それはとても面白い感想ですね。たとえば、どんなところが綺麗ごとでどんなところが学校の先生のようにでした？」

髪の毛は相変わらず長いけれど、前髪は来た頃よりは短く切られている。さらさらとした

前髪の下にある黒目がちの瞳が、本堂の窓格子から漏れる光を受けて輝いている。

「たとえば、『ただそしられるのみの人、またただほめられるのみの人は、過去にもなかったし、未来にもないであろう、現在にもいない。』ってところ」

「そんなこと、当たり前じゃないか。ほめる人もいれば、けなす人もいる。ほめられるだけの人とかけなされるだけの人がいないなんて当たり前のことなのに、なんだか言い方が大げさなんだ」

「そう。それを置いとくとしても、『だから、私たちは人の噂なんか気にしないで今を生きればいいのです』っていう結論。それってキョクタンすぎない?」

「キョクタンなゼンテイをしといて、『だから人の噂など聞き流しなさい』って言うのって、なんか気持ち悪いよ。気になるものは気にしないようにしたって気になるのに」

「そういう、コトバに対してザツなところが学校っぽいんだ」

「言いたいことはわかるけどさ、ぜんぜん現実的じゃないよ」

「オレたちが生きてるのはそういうキョクタンな世界じゃないんだからさ、もうちょっと現実によりそったギロンをするべきなんだ」

「ようするに、クレイごとなんだ」

「クレイごとって、ズバツと言われると目くらましにあつたみたいに、おおすげえ……、つてなるんだけどさ……」

「ちょっとおいてからちゃんと冷静になって聞きかえすと、実はゼンテイがものすごいへんだったりするんだ」

「クレイごとで生きていける人っていうのかもしれないけどさ……」

「そういう人って、一緒にいるとすぐつかれそうだ。オレは、人間はもつとだらしなくていいと思った」

「ああ。歎玄さんのことを悪く言ってるつもりはないんだ」

「そう。歎玄さんみたいにちゃんとしているのがラクな人はそれでいいんだ」

「ただ、オレたちにはムリだよってことさ」

「そう。オレたちはジダラクでありたいから」

歎玄さんは、お兄ちゃんたちが背伸びをして話す言葉を遮ることなく、楽しそうに相槌を打っている。

「なるほど。興味深い見解ですね。たしかに綺麗ごとかもしれませんね。小学生とは思えない分析力と語彙力です」

歆玄さんから褒められたお兄ちゃんたちは、

「歆玄さんのおかげだよ。だいたいぎたえてもらっているからね！」

「歆玄さんが来てからオレたちほとんどシンカしてる気がする！」

ふたりして嬉しそうに声を弾ませたと思ったら、さっそく本棚へと手を伸ばし始めた。

「和巳さんと浩くんの意見を否定するわけではありませんが、ときによっては綺麗ごとが必要となることもある、ということ、覚えておいて損はないかもしれませんよ」

歆玄さんは静かに言ったけれど、次の本を選ぶのに夢中になっているお兄ちゃんたちの耳には届いていないようだった。

お兄ちゃんたちは、もともと本を読むことが好きで、学校の図書館で行なわれている読書マラソン（私たちの学校では、図書カードを使って借りた本の数を競っていた）ではトップを並走していたのだけれど、小学三年生くらいになると学校の図書館に置いてある児童書が中心の本に物足りなさを感じるようになっていた。歆玄さんにそのことを漏らすと、「でしたら……」と、歆玄さんの本を貸してくれるようになった。歆玄さんは自分の部屋にそのままになっている本棚をお兄ちゃんたちに見せて、好きな本を貸しますよと声をかけた。本棚には、中学生の頃の歆玄さんが読んでいた本からつい最近買った本まで、ぎっしりと並べられていた。本棚に入り切らない本は床に積まれていて、部屋のいたるところに本の塔ができていた。仏教を始めとした宗教の本が多かったけれど、科学の本があつて数学の本があつた。小説や画集も置いてあつた。漫画もあつたし、風景の写真集もあつた。歆玄さんの本はバラエティに富んでいた。お兄ちゃんたちはおつかいに行ったときはもちろん、それ以外でも、本を読み終えると歆玄さんを訪れて新たな本を借りて帰った。そんな風にして、小学四、五年生の頃からお兄ちゃんたちの日常に歆玄さんの本が加わった。

お兄ちゃんたちにとって歆玄さんは年の離れたお兄ちゃんのようにでもあり、同時にお父さんのようでもあつたのだと思う。お兄ちゃんたちは、歆玄さんにとっても懐いていた。進路について、あるいは将来について相談に乗ってもらったりもしていたみたいだ。お兄ちゃんたちはきつと、歆玄さんのことを心から尊敬していた。私も歆玄さんが好きだった。けれど、お兄ちゃんたちのように親密さは抱けなかったし、心を開くこともできなかった。歆玄さんは、私にもちゃんと親切にしてくれたし優しくあつたけれど、なんとなく開いた距離が縮まることはなかった。そして、出会いから四年後のある日、私は歆玄さんに対してどう接したらいいのかすっかり混乱することになる。



どういふ経緯があつたのかわからないけれど、かずみ兄ちゃんが中学生に上がった頃から、歎玄さんはお兄ちゃんたちに勉強を教えるようになった。お兄ちゃんたちが生庵寺で勉強を教わるのは、ほとんどが土曜日か日曜日の昼下がりでだつた。

夕飯の仕込みを始めるお母さんと小学生の私を残して、お兄ちゃんたちは家を出て行く。私は玄関を出て、問題集や参考書をいっぱい詰め込んだリュックをゆさゆさと揺するお兄ちゃんたちが見えなくなるまで見送つた。小さくなっていく背中を見ながら、私も一緒に行けたらいいのと思つていた。歎玄さんに会いたいというのではなくて、お母さんとふたりきりでいたくなかつたからだ。

お母さんはこわい人。この世でいちばんこわい人。

いつしかそう思うようになっていた。それがいつからなのか正確には思い出せないけれど、とても小さな頃だつたと思う。まだ小学校に入る前で、悠々爺の一件の前だということのはつきりしている。あの日私は、お母さんが怖くて話せなかつたのだつた。もし、あのことを話していたら、お母さんはきつと、私を叱りつけたと思う。悠々爺を責めるのではなく、私を責めたと思う。そうわかつていたから、私はあの日のことをひたすら隠した。

お母さんはきつとやみ人なんだ。

やみ人という言葉を知つてからはそう思うようになった。やみ人がどんな人なのか知らないくせに、私はほとんど確信するようにそう信じ込んでいて、そう思うたびに不安と苦しさと怖さで心が潰れそうになつた。

お兄ちゃんたちに聞いてもきつと、

「田舎の女性はそのものだよ」

「民枝さんだつて喜久江さんだつて、長坂の女の人はみんなお母さんみたいじゃないか」  
そんな風に言われることが想像できた。だから、お母さんがやみ人である可能性についてお兄ちゃんたちに聞いたことはない。おそらく、お兄ちゃんたちの言い分もその通りだつたし、私はきつと「やみ人」というものを拡大解釈していた。人とは違つた極端ななにかを持つている人はみんなやみ人の範疇に入ると思つていた。私の基準を当てはめたら誰もがやみ人になってしまう。そうとわかつていてもなお、お母さんは私にとってやみ人だつた。

お母さんは、お兄ちゃんたちと私とで態度を変えた。お兄ちゃんたちに対して声を荒げることはなかつた一方、私に対する当たりは厳しかった。私がちよつとしたことで間違いを犯してしまつたとき（忘れ物をしたとか、頼まれた仕事をし忘れたとか、その程度のことだ）はもちろん、私自身に落ち度がなくても虫の居所が良くないとヒステリーを起こした。お母

さんの気持ちを乱すのは、生理痛や肩の痛みや頭痛といったからだの不調だったり、長坂の人たちとの人間関係だったりした。お母さんは佃煮にする前の生きたざぎ虫を誤って食べてしまったような顔で（眉間にしわを寄せ、目を吊り上げ、鼻の穴を大きく膨らませた迫力のある顔だ）、私を見下ろした。

「もうちょっと静かに歩いてくれないかい！ そんなにドカドカ歩かれると頭に響くんだよ！」

そう叫んだと思ったら、

「ああ、もういいから、目の前から消えてちょうだい。ちょっとはひとりで休ませてほしいんだよ」

しぼんだような声で私をしっしと追い払った。

「どこか痛いのか？」

「疲れてるのか？」

そうした声をかける気遣いをいつしか覚え、けれどそのほとんどは「ほっといてちょうだい！」の声にかき消された。それでも、弱体化が激しいときのお母さんは不機嫌の原因（からだの痛みだったり人間関係のストレスだ）を話して聞かせた。

大輔や結芽たちのように、私もお母さんに甘えたかった。お母さんに抱きつきたかったし、「大丈夫かい？」とか「大好きだよ」と優しい言葉をかけてほしかった。お母さんは私が甘える隙をまったく見せなかった。まるで、私を憎んでいるかのようにだった。お兄ちゃんたちはもう大きくなっていたからベタベタと甘えることはなかったけれど、小さな頃はどうかだったのだろうといつも不思議に思っていた。お母さんはお兄ちゃんたちには甘かった。それでも、たとえばお兄ちゃんたちを撫でたり抱きしめたりといった愛情表現をする姿は想像できなかった。

お母さんはまるでふたりの人間を心のなかに住まわせているように、日によって（もしくは時間によって）別人のようになった。もうひとりのお母さんは、決まってお兄ちゃんたちが留守のときに現れた。だから、私はなるべくお母さんとふたりきりになりたくなかった。歎玄さんに会うのも気乗りはしなかったけれど、お母さんというよりは気が楽だった。それに、歎玄さんはお兄ちゃんたちの相手をしているのだから、私はお寺のどこかでひとりで過ごせるはずだった。

「私も行きたいな……」

そう呟くと、

「なに言ってるのよ。お前が行っても邪魔になるだけでしょ。それに、お前の足だと近いものも遠くなるからね」

いつもそんな風に一蹴された。

もうひとつ、お母さんとふたりきりになりたくない理由があった。

それは小学二年の春休みに起きた。

その日、お兄ちゃんたちはいなかった。大輔と遊んでいたのかもしれないし、よその家におつかいに行っていたのかもしれない。外を駆け回っていたのかもしれない。よく覚えていない。

私は、探し物をしていた。どういうわけかハーモニカが見当たらなかった。居間もお仏壇の部屋もお兄ちゃんの部屋もお母さんの部屋もいくつもある納戸も全部探したけれど、見つからない。誰もいない家はしんと静まり返っていて、廊下の隅に転がっていないかと明かりのない廊下にじっと目を凝らしながらゆっくりと歩いていた。廊下の突き当たりまでたどり着いて引き返そうとしたとき、かすかな物音が聞こえた。物音は何かと何かがぶつかるような音だった。動きを止めてじっと聞き耳を立てていると、ぶつかる音に混じって人の吐く息のような音も聞こえた。物音がどこから聞こえるのか、耳を澄ました。

物音は、壁の向こうから聞こえてきた。最初は気のせいだと思った。目の前にあるのは砂壁なのだから。けれど、確かに音は聞こえてくるのだった。私は壁に耳をつけて息を殺した。すると、やはり壁の向こうから音がした。何かを叩くような音が規則的に繰り返されて、その合間に漏れるような不規則な声（高い声と低い声、ふたつの声だ）が聞こえた。なぜだか悠々爺の記憶が目の奥に訪れた閃光とともに脳裏に蘇った。私はそれを見ていないしその行為について知っているはずがないのに、そこで何が行われているのか理解した。高い声の主がお母さんであることも。

牢。

私は直感した。この壁の向こうに牢があるのだ、と。

牢があるということは、どこかに出入り口である扉があるはずだった。私は、慎重に壁をさすって扉を探した。扉を見つけてどうしようかなど、そのときはなにも考えていなかった。ただ、私は憑かれたように扉を探した。壁を丁寧にさすりながら横に移動したけれど、ざらりとした砂の感触以外にこれといった変化はなかった。二往復したところで、壁を調べると、壁をさすりながら横に移動した。

廊下の突き当たりまで移動したときだった。ハーモニカを探しているときは気づかなかつたけれど、手の先にしつかりとした違和感を覚えた。目をこらすと、それは小さくて細長い穴だった。細い棒が入るくらいの小さくて細長い穴だった。暗くてしつかりとは見えないものの、床板がわずかにずれて盛り上がっているようだった。音を立てないようにその場を離れ、急ぎ足で台所へ行き鉄箸を持って戻った。穴に刺し、てこのように少し動かしてみると板が動いた。みしりという音がして、それほど大きな音ではなかったけれど、壁の向こうにいるお母さんに気づかれるのではないかと心臓が縮んだ。一センチくらい持ち上げたその板は正方形に近い形をしていた。人がひとり通れるくらいのが大きさがあって、子供の私にはとても重たく感じた。じつとりとした汗にまみれた手のなかで鉄の箸が曲がってしまったような気がして、慎重に板を下ろした。

扉を見つけたものの、なかに入っていく勇氣はなかった。かといってそのまま立ち去ることもできなかった。台所へと続く廊下を移動して、角の柱に隠れて誰が出てくるのか確かめることにした。お母さんの相手は誰なのか知ったところで、私にとってなにも良いことはない。むしろ知らない方が心は乱れないのかもしれない。けれど、なにかが私をそこにとどまらせ続けた。お兄ちゃんたちが帰ってきたらどうしようという不安と相まって、心臓が激しく打った。

柱の陰に立って間もなく、廊下の穴が薄く開いた。隙間から辺りを窺っているのか、穴は薄く開いたまま動かなかった。しばらくすると、みしりと小さな音を立てながら穴が開いた。板につけられた取っ手を握り出てきたのはお母さんで、続いて出てきたのは歎さんだった。

お母さんも歎さんとも、普段となにも変わらないように見えた。お母さんは艶のある髪の毛を後ろでひとつに結っていて、歎さんは黒い瞳をいつものように潤ませていた。暗がりにつきかり慣れた私の目に映るお母さんは、見慣れたジーパンと無地のシャツを着ていて、歎さんは作務衣を着ていた。これも普段通りだった。ただ、ふたりの間に漂う雰囲気普段と違っていた。ふたりはぴったりとくっついていてはなくて、私が真ん中に入れるくらいの距離があるのだけれど、親密に見えた。うまく言えないけれど、ふたりがその距離を保ってそこにいることが、その空間にぴったりと収まるような、違和感なく馴染んでいるような、そんな風に見えた。他人同士がそんな風にぴったりと似合うようになるには、それなりの時間がかかるはずなのだった。最初から似合うふたりというのもあるのだろうけれど

ど、お母さんと歎玄さんは年が離れていたし、家族写真のふたりは、ふたりの間に写るお父さんと私を指で隠してみても、まるつきりちぐはぐなのだ。ふたりから違和感がなくなるには、きつとそれ相応の時間を要したはずだった。私がふたりの関係を知ったのは小二の春のことだったけれど、もしかしたら、お母さんと歎玄さんは私が気づくはるか前から、そういう関係にあったのかもしれない。

お兄ちゃんたちが帰ってきませんように。

それだけを願いながら、震える足で台所へと続く廊下を急いだ。私の鼓動がふたりの耳に届き見つかってしまうのではないかと不安になるくらい、心臓が激しく鳴っていた。

それから一ヶ月ほどが経った。お母さんがお兄ちゃんたちを連れて街に出かけた。参考書を買うとか、そんな用事だったと思う。

「お前も行くかい？」

お母さんは声をかけたけれど、「私はいいや。テレビでも見てるから」と言うと、「そうかい。そしたら、留守を頼んだよ」とお兄ちゃんたちと家を出た。

このときが来るのを私は待っていた。完全にひとりになれるまとまった時間を、私はじつと待っていた。車の音が遠くなるのを家のなかで聴き、エンジン音が聞こえなくなると裏庭に出て谷の方を眺めて赤色の車が山道を下っていくのを確認した。私は急いで家に戻って、牢へ向かった。

牢のなかは、とても簡素だった。床のふたを開けると木製の階段が五段下に伸びていて、降りていったところに空間があった。目が慣れるまでしばらく待つと、高くない天井に裸電球がぶら下がっているのが見えた。手探りで見つけた枕をふたつ重ねて乗っかって、ソケットの脇にあるつまみをひねるとぼんやりとした明かりがついた。現れたのは六畳ほどの小さな部屋だった。入り口の対角にある壁の脇に敷きっぱなしの布団があった。足元にタオルケットが無造作に畳まれている。敷布団は二枚重ねられていて、枕元にはティッシュの箱が置かれていた。当時、私は小学二年だった。それについて誰にも教わったこともなかったし、聞いたことすらないはずだった。にも関わらず、私は、お母さんと歎玄さんがそこでしていることをすでに知っていた。知っていたけれど、部屋に入った途端、私の頭は考えることを放棄したようだった。思考を絶った私は、驚くほど何も感じなかった。心になにも湧いてこなかった。とても静かだった。ただ、部屋の淀んだ空気が気持ち悪かった。息を吸っている

ことが堪え難かった。明かりを消して、枕を戻して部屋を出た。

私がお母さんと歆玄さんの関係を知った一年後、かずみ兄ちゃんが県内屈指の進学校であるF高校へ合格して家を出た。その翌年、ひろし兄ちゃんもF高校への進学を決めて家を出た。私は六年生へと進級し、広い家にお母さんふたりきりとなった。

お母さんはやみ人なんだ。

その思いは、お兄ちゃんたちが家を出てからより強いものとなった。

お兄ちゃんたちが家を出て、お母さんは自由を手に入れた。私を怒鳴り散らすのに時と場所を選ぶ必要がなくなり、牢の存在を隠すこともやめた。床の穴は開け放たれ、声や音が漏れてきた。そのうち、牢ではなく自分の寝室で行為に及ぶようになった。男の人は、歆玄さんの日もあるし別の男の人のこともあった。

私を知っているのは、平日の夕方と休日のお母さんだけだった。男の人の気配がすると家を出た。そのうち、男の人がいてもいなくても下校後、家で過ごすことをやめた。だから、男の人とお母さんがいつもそういう行為をしていたという確証はない。でも、常識的に考えると、そういう行為をしていたのだろうと思う。こういうときの常識はとても冷酷だ。常識に想像力をプラスすると、もしかしたら平日の日中にもそういう行為が行われているのかもしれないという可能性が浮上する。こうなるともう、常識も想像力もこの世から消えてしまえばよいのにという気持ちになる。学校ではどっちも大事だと習ったけれど、それはただ私を苦しめるだけだから。常識と想像力のせいで私は息をするのが苦しいくらいに、吸っても吸っても酸素が足りないくらいに苦しくなる。

お母さんは農家の手伝いとアンケートの集計作業の内職をしていて、その収入に遺族年金を加えたお金で家計のやりくりをしている。ずっとそう思っていた。長坂の人が差し入れてくれるお米や野菜にも助けられているのは知っていた。玄関に、野菜の箱が置かれているのは、小さな頃から見慣れていた。だけど、それだけでは、どう考えてもふたりの息子を全寮制の高校へ入れられるだけの収入になるとは思えなかった。本当のところはどうなっているのか、よくわからなかった。

汚い。

そう思った。男の人とからだを重ねるお母さんも、お母さんを貪りに訪れる男の人も、そ

の裏で起こっているであろう何もかもが、汚いと思った。歎玄さんみたいに一見ちゃんとして見える人がそういうことをするというのもひどく汚く感じたし、同時に、私の見ている顔とは別の顔をみんなが持っていることも、私を混乱させた。私が見ているものはいったい何なのか、得体の知れないものへの恐怖を覚えもした。この頃の私は、何もかもを汚くて気持ちの悪いもののように思っていて、それがもたらす恐怖に怯えていた。あのとき、もしモミオがいなかったら私はどうなっていたんだろう。今でもそんな風に考えることがある。

## モミオ

モミオの家に初めて連れて行かれたのは、確か、牢やぶりに夢中になる前の年、小学一年の冬のことだった。

初めてモミオの家を訪れた前日、大雪が降った。お昼過ぎから雪が降り出して、綿のようにふわふわとした大きな雪は、みるみる長坂を覆っていった。学校から帰ると、家の屋根はふんわりとした帽子のような雪をかぶっていて、玄関までの雪は掻かれて一本道ができていた。お兄ちゃんたちと裏庭へまわると、私の脛半分ほどまで雪が積もっていた。まっさらな雪だった。今にも遊びだしそうな雰囲気を察したのか、

「宿題が先だよ」

台所のお母さんが釘を刺した。

「宿題をしている間に、きっともっと積もるはずだよ」

「カホウは寝て待てというけど、オレたちは宿題でもしながらさらなるセキセツを待とう」  
私たちは、かずみ兄ちゃんの部屋に集まった。かずみ兄ちゃんは机に向かって宿題を解いて、私とひろし兄ちゃんは床に宿題を広げてうつ伏せになって宿題をした。煮物のいい匂いが漂ってきて、何かを刻む小気味のいい音が響いてきた。お母さんは鼻歌を歌っている。

「母さん、きげんがいいみたいだ」

「おいしいごはんが食べられるね」

お兄ちゃんたちは、お母さんの鼻歌を無邪気に聞いていたけれど、お母さんの鼻から漏れる声があのように響いた。本気の牢から漏れ出るあの声だ。すると、悠々爺のあの匂いの記憶も蘇ってきて胃のあたりに違和感がやってきた。

「ちよつとトイレ」

起き上がった部屋を出て、洗面所で口をゆすいだ。何度ゆすいでも唾液と一緒に悠々爺のあの香りが湧き出てくるようで、私は何度も何度も口をゆすぎ続けた。

部屋に戻るとお兄ちゃんたちは宿題を終え、寝転んで本を読んでいた。

「お兄ちゃんたち、先に行っていていいよ」

そう言うと、お兄ちゃんたちは、

「いっしょに片づけよう」

「残るは算数だけかな？」

と、宿題を見てくれた。お兄ちゃんたちは、頭のいい先生役とできの悪い生徒役に分かれて寸劇をするように教えてくれる。できの悪い生徒役の疑問はそのまま私の疑問で、それに答える頭のいい先生は無駄のない平易な言葉で順序立てて説明してくれるからとてもわかりやすい。

宿題の用紙には、「とけいのはりをかきいれなさい」という問題文と針のない時計の絵が描かれていて、その下に「9じ はん」とか「5じ」という指示がある。お兄ちゃんたちは教える人と質問する人にわかれて、短針と長針の関係や（追いかけてたたとえて教えてくれた）、時計に刻まれた数字について説明してくれた。苦手だったはずの時計の問題がすると解けて、この瞬間はいつも本当に気持ちが良い。こんな風に教えられるお兄ちゃんたちは私の自慢だった。

宿題を終えて台所へ行くと、お母さんはまだ夕飯を作っていた。

「裏庭で遊んでくるよ」

「行ってきます」

お母さんの背中に声をかけて、私たちは裏庭へ出た。裏庭に出ると、私の足跡の向こうにうさぎやリスの小さな足跡が残っていた。私たちは雪だるまを作ることにした。かずみ兄ちゃんが手のひらサイズの雪玉を作り、それを雪の上で転がす。雪の玉は次第に大きくなっていく。大きくなるにつれて重さも増して、転がすのが大変になっていく。雪の玉を転がすのに夢中になっていたら、いつの間にか雪は止んでいた。あたりが暗闇に包まれ始めると、かずみ兄ちゃんが裏庭の照明のスイッチを入れた。ぼんやりと光る照明の下で、私たちは黙々と雪を転がした。

かずみ兄ちゃんと私で作った胴体の丸の上にひろし兄ちゃんが作った頭の丸を乗せると、私の肩の高さの雪だるまができあがった。

「よし。ひとまずできあがりだな」



「残すは、顔だけどまずは休もう」

雪だるまの隣で、さっそく痛み出した腕や背中を互いに揉み合っていると、私の肩を揉むかずみ兄ちゃんが不意に聞いた。

「紗南子は崖の下の家を知ってる？」

崖の下の家？

そう思っていると、私に背中を揉まれているひろし兄ちゃんが、指差した。

「ほら、灯りのともっているあの家だよ」

崖の下に、黄色い灯りが見えた。屋根の雪と地面の雪が一緒になっていて、おまけにあたりはすっかり暗かったからどんな家なのかはわからなかったけれど、確かに家があるようだった。

「あかりは見える」

そう言うと、

「あれがモミオの家だよ」

かずみ兄ちゃんが言った。モミオという響きがおもしろくて、「モミオの家」と真似をした。

「モミオは盲目なんだ」

ひろし兄ちゃんがさらりと言った。

「もうもくって？」

「目が見えないことだよ」

私の問いにかずみ兄ちゃんが答えた。

目が見えないのに電気をつけるんだ。

不謹慎かもしれないけれど、そう思った。目が見えないということはきつといつも真っ暗な世界にいるということなのだから、わざわざ明かりをつける必要なんかないのに、と。

心のなかを読んだように、お兄ちゃんたちは言った。

「盲目でも光は必要なんだよ」

「光というのは温かさだから」

「見えなくても感じるものだから」

「温かさは肌で感じるものだから」

光は温かさで、温かさは肌で感じる。つまり、モミオという盲目の人は肌で光を感じているということなのか。

お兄ちゃんたちが何を伝えようとしているのか、よくわからなかった。

「なにを言っているのかわからないよ」

そう言うと、

「わからないことをわからないまま受け取るのは大事だ」

「そう。わからないことを無理してわかることはないよ」

お兄ちゃんたちはそう言った。私たちはもう、互いを揉み合っていないかった。

「そろそろ、紗南子にもモミオを紹介しよう」

「モミオは面白い人だからきつと気に入るよ」

「さっそく明日にでも行ってみよう」

「そうだね。そうしよう」

お兄ちゃんたちは私の頭をくしゃくしゃと撫でながら、頭の上で話していた。

モミオはあん摩師だった。誠というのが本名だ。お兄ちゃんたちが「モミオ」と呼ぶのは、

「あん摩師」から「揉む男」になって、「揉み男」に変化して、「モミオ」となったようだ。

モミオは、五十代の中肉中背のおじさんで、目が見えないという以外の特徴のない外見をしていた。モミオの目が見えないというのは、一目ではわからなかった。サングラスもメガネもかけていない瞳は開いていて、黒目はまっすぐに前を向いていた。ただ、その黒の瞳には光が宿っていないくて、お兄ちゃんたちみたいに大きくなったり小さくなったりすることはない。モミオは、私たちの声のする方を見ているけれど目が合うことはなくて、だから、なんとなく目が見えないのかもしれないなと思ったくらいだった。学校や村には、モミオみたいに、一緒に話してもこつちを見ないで別のなにかを見ている人もいるから、モミオが特別おかしいとは思わなかった。

「ほんとうに目が見えないの？」

私が聞くと、モミオはちよつと驚いたような顔をした。

「こら、紗南子。お行儀が悪いよ」

「ごめんなさい、モミオ。悪気はないんだ」

頭をさげるお兄ちゃんたちに、モミオは、笑った。

「違うんだ。誰もそんな風に聞かないから、ちよつと驚いただけなんだ。とても率直な疑問だと思うし、嫌な気分じゃないから気にしないで」

「なんで見えないの？」

そう聞くと、モミオは失明した経緯を話して聞かせてくれた。

モミオが失明したのは、小学二年生の秋だった。栗の木の近くで友達と鬼ごっこをして遊んでいた。栗の木の下では、モミオの祖母が木を棒で叩いて栗を落としては拾っていた。祖母が棒で叩いて栗が落ちてきたそのとき、鬼から逃げるモミオが栗の木の下に入った。

「危ない！」

祖母は叫び、モミオは反射的に上を向いた。モミオの視界にイガをまとった栗が落ちてきた。イガがぶつかったモミオの目からは血が流れ、慌てて駆け寄った祖母がモミオを抱きかかえて家へ走った。

里の病院へ連れて行くと、目の周りに刺さったイガを抜く処置を受けた。

「これで様子を見ましょう」

医者言葉信じて長坂に戻ったけれど、その夜、モミオは眼球を焼かれるような痛みで目が覚めた。翌日、街の総合病院へ行くと、顕微鏡を使って目を見られた。細かいイガが両目に八本ずつ刺さっていた。緊急手術となった。イガは一度では取りきれなくて、二度にわたって手術を受けた。イガは抜けたものの、モミオは視力を失った。光は感じるものの、二度と世界を見ることができなくなった。

モミオの祖母は取り返しのつかないことをしたと、来る日も来る日もモミオに謝った。モミオは視力を失ったことも辛かったけれど、おばあちゃんをこんな風にさせてしまったことに心を痛めた。祖母は、モミオが視力を失って二年後の冬の日、静かに息を引き取った。朝、起きてこないのを不審に思った母親が起こしに行ったところ、息をしていなかった。

盲目となったモミオは長坂を出て、盲学校の寄宿舎に入った。そこで、国語や算数といった教科を学び、日常生活が送れるよう訓練を受けた。中等部のカリキュラムを終えたモミオは盲学校の高等部理療科へ進み、あん摩とマッサージの勉強をした。高等部の卒業を間近に控えた冬、不幸が起こる。お正月の準備のために里へ買い物に出た両親が、長坂に帰る道すがら事故にあった。父親の運転する車のタイヤが凍った道でスリップしたのだ。ガードレールのない細い山道に、車の暴走を止めるものはなかった。車はするすると滑り、崖の下へ落ちた。ふたりとも即死だった。

「誠ちゃん、目が見えなくてよかったわ。あんふたりの姿は見せられんわ」

「目が見えないで一人きりってのは、大変なことだ」

資格を取って長坂に戻ってきたモミオは、家の一部を改修してあん摩の仕事始めた。長坂の人たちは、モミオを最大限に援助した。食べ物を届けるだけでなく、モミオの足とな

り、手となった。モミオにあん摩を頼むという名目で、長坂の人たちは代わる代わるモミオの家を訪れた。一年が経ち、モミオが一人暮らしに慣れると、長坂の人たちは純粹なお客としてモミオのもとを訪れるようになった。

「初めて聞いたよ」

「モミオ、大変だったね」

モミオは、暗くなった空気を変えるように明るい声で言った。

「最近あまりしなくなったけれど、自分の顔を思い浮かべようとすると、小二の自分を思い浮かべてしまうんだ。そんなわけはない、僕はおじさんなんだから、つてすぐに消し去ろうとしても、小二の僕は、残像のようにしばらく僕のまぶたの内側にとどまるんだ。僕はこんなおじさんなのに、おかしいよね」

目の見えない世界を想像しようとしたけれど、うまくいかなかった。いくら目を瞑ってみても、私の目の前には世界が現れた。お兄ちゃんがいて、お母さんがいて、お父さんがいた。家があつて学校があつて、川が流れていて山がそびえていた。目の見えないというのを想像するのは難しかった。

「紗南子ちゃん、良かったらまた遊びにおいで」

モミオの声に目を開けた。モミオの瞳に光は宿っていない。けれど、モミオは光を感じることができる。そのことは、私を少しだけ安堵させた。光を感じているということは温もりもすっかりと入っているはずだから。モミオの世界は、温かい。そう思うと、一筋の光のような希望が心に射した。

モミオの家に行くのはちょっと大変だった。見下ろす分には手が届きそうなくらい近いのだけれど、まっすぐ降りるには坂は急すぎた。お兄ちゃんたちは、何度か崖のような坂を滑り降りたことがあるらしいのだけれど、「尻がやばい」ことになるのだと言った。ヒリヒリしてお風呂が辛くて、学校の硬い椅子に座っているのも辛い。

「尻の皮は意外と薄いんだ」

「尻は口ほどにモノを言う」

中一のかずみ兄ちゃんと小六のひろし兄ちゃんは、私にお尻についての教訓を教えた。モミオの家に行くとき、だから私たちは、山の際に沿って作られたでこぼこ道を歩いた。モミオの家は、道を下っていくとゆうに五百メートルはあった。もっと遠かったかもしれない。行きは駆けおりにいくからあつという間に着くけれど、帰りはただらと続く坂をひた

すら登らなければならなかった。小学一年の私には大変だったけれど、モミオに会えると思  
うと、それもたいしたことではないような気持ちになった。モミオの家に行くのに大輔たち  
を誘ったことはなくて、いつも三人で行った。

私たちは、モミオがあん摩をするのを眺めたり、モミオの趣味であるオカリナの演奏を聴  
いたりして過ごした。

「シゲさんは肩が凝っているって言っているのに、モミオはどうしていつも肩じゃなくて  
鎖骨の下とか首をおすの？」

「それ、オレも気になっていたんだ。もしかして、モミオ、間違えてるんじゃないかって心  
配してたところ」

「それはひどいよ。モミオが間違えっこないじゃないか」

「けど、いつも鎖骨のあたりや首のあたりをぐりぐりしてるからさ」

常連さんであるシゲさんが帰ったあと、かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんが話している。  
マッサージ用の寝台（顔の部分に丸く穴が空いていて、うつ伏せになってもその穴から顔が  
出るから苦しくないように作られた台だ）をタオルで拭きながら、かずみ兄ちゃんとひろし  
兄ちゃんのやり取りを聞いていたモミオは、

「百聞は一見に如かずだ。ほら、ここに座ってごらん」

そう言って、寝台の横にある椅子を指した。

「じゃあ、オレが先ね」

ひろし兄ちゃんが椅子に座った。

「君たちはまだ若いから『凝る』というものがどういうことなのかわからないだろうけれ  
ど、まあ、やってみよう。まず、肩を上げ下げしてみてもらえるかな」

モミオは、ひろし兄ちゃんに肩を上下させると、

「この感覚、覚えておいて」

と言った。それから、人差し指と中指を揃えて、ゆっくりとひろし兄ちゃんの首筋を揉ん  
でいった。

「くすぐったいな」

ひろし兄ちゃんは身をよじらせていたけれど、モミオは何かを確かめるように真剣な表  
情で少しずつ場所を変えながらしばらく押し続けた。

ひとしきり施術をしたモミオは、

「あまりやりすぎると揉み返しがきちゃうから、この辺にしよう」

とひろし兄ちゃんのからだから指を離した。

「さあ、もう一度、肩を上下してごらん」

ひろし兄ちゃんは言われたように肩を上下させると、

「すごい。軽くなってる！ ふわふわになってるよ、オレの肩」

感動の声をあげた。

「さあ、君も試してみるかい？」

モミオはかずみ兄ちゃんにも同じことを繰り返し、かずみ兄ちゃんはひろし兄ちゃんと同じ反応を見せた。

「ふわふわだ！」

肩を上下させるふたりの方を、ぼんやりとした瞳で眺めながら言った。

「痛みを感じる部位に痛みを癒すツボがあるとは限らないんだ。手のひらや足の裏は、様々なツボが集まっているのが有名だけれど、こんな風に意外なところにそこを癒すツボが隠れているんだ」

小学五年になり、お兄ちゃんたちが高校の寮に入って家を出てからも、ひとりでモミオの家に通った。お母さんのいる家に帰るのを渋る私を無理に帰すことも理由を問うこともなく、モミオはいつまでも私のどうでもいいような話を聞いてくれた。お客さんが来ると、縁側にちゃぶ台を出して宿題をしたり二枚並べた座布団に寝転んで本を読んだ。夜眠れないせいか、ふいに眠気に襲われて居眠りしてしまうこともあった。起きると薄がけや毛布が掛けられていた。

モミオがあん摩に使っている部屋は、もともと和室だったのをフローリングに改修してあって、モミオはお客さんが帰ると床にモップをかけて寝台を丁寧に拭いた。掃除を終えると台所へ移りその日の夕食を作った。台所は、油汚れや水垢など細かな汚れがあって、目の見えないモミオが日頃から使っていることをうかがわせた。お米、根菜、葉物野菜、調味料、計量カップ、ボウル、包丁、まな板、皮むきなど、それぞれの食材や道具の置き場がきちんと決められていて、そのせいか、モミオはまるで目が見えているように手際よく動いた。田舎の人にしては薄味の煮物、チンジャオロース、香味スパゲッティ、白身魚のあんかけなど、モミオは様々な料理を作ることができた。

「もともと料理が得意だったの？」

そう聞くと、

「まさか。僕が失明したのは小学二年生だったから、料理なんて覚える間もなかったよ。盲学校で訓練はしたけれど、あまり褒められたことはなかったな。今でも大したものを作れている気はまったくないけれど、紗南ちゃんの目から見ると料理が得意そうに見えるとしたら、失敗を重ねた結果かな。それでも、どんなに練習してもできないことはあるんだよ。たとえば卵焼きといったひっくり返す料理は苦手だし、盛り付けもきれいにできている自信はないな」

そう教えてくれた。モミオの目は、私の頭上の虚空をさまよっていた。

モミオと一緒に台所に立つこともあった。私が学校であったことを話したり、小さかった頃のモミオの話を聞いたり、いろんな話をしながら料理を作った。

「モミオは、おばあちゃんのせいで目が見えなくなっちゃったんでしょ？　けど、モミオはずっとおばあちゃん子だったって言ってたよね？　憎んだり恨んだりしなかったの？」

ある日、そう聞いたことがある。

モミオは人參を刻む手を止めると、斜め上を向いてしばらく固まった。言葉を探しているときのモミオの癖だ。私は代わりに包丁を握って、人參を刻む。ゆっくりと、手を切らないように人參を千切りにしていく。

「憎んだり恨んだりっていう感情がまったく湧かなかったわけじゃないけれど、意識してそう思わないようにはしていたと思う」

「意識して？」

「うん。おばあちゃんを責めてもなにも変わらないと思ったんじゃないかな、きつと」

モミオは、私の方を見て言った。

「小学二年生のモミオが、そう思ったってこと？」

「そんな風にしっかりと言葉にしていたわけではないと思う。だけど、おばあちゃんを責めても僕の目が見えるようにはならない、そのくらいのことは分かっていたんだと思う。それに、僕はおばあちゃんが本当に好きだったから、悲しむおばあちゃんを感じることに辛かったんだ。もしかしたら、僕は無理をしていたのかもしれない。おばあちゃんのせいにしてしまった方が楽かもしれない、という気持ちと、おばあちゃんのせいにしたくない、という気持ちの間をゆらゆらと揺れていたのかもしれない」

そこまで話すと、モミオは再び宙に目をやり固まった。私は再び人參を刻んだ。

炊飯器の電子音ご飯が炊けたことを知らせた。

「僕が小学四年生の頃だった。年末に帰省していた夜、おばあちゃんと布団に横になってい

るとおばあちゃんが呟いたんだ。『この目を焼いた針で突いてしまおうか。そしたら、誠も赦してくれるだろうに』。おばあちゃんは僕が眠っていると思ったんだと思う。ひとりごとを言うように、そう呟いたんだ。僕は慌てて言ったんだ。『おばあちゃん、そんなことしちゃダメだよ。だって、おばあちゃんのせいじゃないんだから。きつと運命なんだよ。おばあちゃんのせいじゃない。目が見えなくなっていることだってあるんだよ。僕のなかでおばあちゃんは永遠にトシを取らない。これってすごくない？』。僕は一生懸命に励ましたんだ。おばあちゃんに元氣を取り戻して欲しかったから、必死だった。目が見えなくなっても良かったことを思いつくままに挙げていったんだ。音楽がとても好きになれたこと。気持ちの悪い蟻の大群を見なくてすむこと。声でその人の顔を想像することが楽しいこと。あることもないことも、次々に列挙しながら思ったんだ。人のせいにはしたくないな、って。おばあちゃんは自分の目を焼こうと思うくらいに追い詰められていて、人をこんな風に追い詰めてしまふくらいなら、いつそ自分のせいにした方がいいんじゃないかって思ったんだ。決しておばあちゃんのせいなんかじゃなくて、これが僕の運命なんだって。このときからかな。僕は人のせいにするをやめたんだ。自分に責任があると思っていた方が諦めもつくしね。ありがとう。続きは僕がやるよ。お釜のご飯をほぐしておいてもらおうかな」

そう言っただけから包丁を受け取ると、モミオはピーマンを刻み始めた。

お兄ちゃんたちにとって歓喜さんがお父さん代わりだったように、私にとってモミオはお父さんようだった。お兄ちゃんたちが家を出てから、私は多くの時間をモミオの家でモミオとともに過ごした。

モミオは、長坂の昔の話もしてくれた。やみ人のこと、牢のこと。モミオの語る過去の長坂は、牢やぶりをしていた頃の私を知る過去の長坂とはまったく別の世界だった。

「長坂は狭いから暮らしづらいところもあるだろう。みんないい人たちだけど、やっぱり集落特有の閉塞感はあるよね。だけどね、長坂の人にもいいところがあるんだよ。距離が近すぎるから見えにくくなっているだけなんだ、きつと」

モミオのものの見方はとても優しく、緩やかで余裕があった。それでいて、自分の責任のもとで生きていこうとする姿勢は毅然としていた。私もモミオみたいに、ゆったりとまっすぐと強さを兼ね備えた人間になりたいと思うようになっていった。

小学六年の冬。一ヶ月後に卒業式を控えたある日のことだった。

学校から戻った私は、ランドセルから宿題と筆記用具と本をリュックサックに入れてモ



ミオの家へ行った。

「ただいま。モミオ」

「おかえり、紗南ちゃん」

「あら、紗南ちゃん」

珍しく民枝さんがいた。民枝さんは寝台にうつ伏せになってモミオのあん摩を受けていたけれど、私の声を聞くと腕時計を確認した。

「ヤダ。もうこんな時間じゃないのよ。あん摩してもらっていると、時間があつという間に経ってしまうわ」

民枝さんは、「誠ちゃん、ありがとう」と言っておん摩を終えてもらおうと、寝台の脇のカゴのなかから鞆を取り出してなかをガサゴソと漁り始めた。

私は、マッサージ部屋とつながる縁側に折りたたみ式のちゃぶ台を出して、その上に宿題を広げながら横目で様子を見ていた。

「悠々爺が生きてたらねえ」

民枝さんのその声に、心臓がビクツと跳ねた。

「冷蔵庫と洗濯機が一气にお陀仏だなんて、お金がかかって仕方ないっていうのに、壊れたものを引き取ってもらうのにもお金がかかるだなんて、阿漕よねえ。はあ。悠々爺が生きてくれたらねえ」

鞆をガサゴソとしながら話す民枝さんに、

「悪いことをすると罰が当たるのですよ」

寝台の上を拭きながら、天気の話でもするような調子でモミオが言った。

「悪いことだったって、ゴミを捨てるくらいいいじゃないのさ。人さまのためになつていたんだしさあ。死ぬことはないだろうに」

「どんなことであれ、悪いことをした人間には罰が当たるのです」

そう言うと、モミオは縁側にいる私の方に目をやった。ほんの一瞬、モミオの目に鈍い光が宿ったように見えた。モミオはゴミの不法投棄のことを言っているのだとわかつてはいたけれど、それだけではないような気がした。モミオの声は、私の耳に重く響き続けた。

「ああ。ようやくと出てきたわあ。いつもと同じでいいの？」

民枝さんは鞆から黄色くて細長い財布を出すと、千円札を数えてモミオに渡した。

「漬けたお菜と作ったおはぎ、置いてくからよかったら夕飯にでも食べてねえ。ああ、からだが軽くなつてるわあ。誠ちゃん、本当に腕がいいのねえ。また頼んだわあ」

そう言うと、民枝さんは急いたように長靴を履いて出て行った。

モミオは民枝さんから手渡された買物袋を台所へ置きに行き、戻るとモップを手にして丁寧に床を拭き始めた。私はノートを握ったまま、モミオの姿を目で追っていた。モミオの目には、もう光はなかった。モミオはいつものように深淵な顔つきで、修行僧のようにモップを黙々と動かしている。

モミオになにか話しかけようと思いつながら言葉を探していると、モミオの方から沈黙を破った。

「目が見えないと鼻が利くんだ」

モミオは、床に目を落としたまま言った。あの夏のことを言っているのだとすぐにわかった。わかったけれど、なにを話せば良いのかわからなかった。私は黙っている他できなかった。こんな空気は初めてだった。

「僕は後天的な盲人だけれど、それでもやっぱり鼻は利くんだ」

モミオは顔を上げて私の方を見つめていた。ぼんやりとした瞳はモミオの顔の上で静かに佇むだけだったけれど、モミオの内側からいつもは感じることはないエネルギーのようなものがほとばしっていた。モミオは、細く震えていた。モミオはきっと、怒っていた。

モミオは知っている。

そう確信した。モミオの家と河原とは目と鼻の先だ。モミオはあの夏のすべてを見ていたのだ。

「悪いことをしたら、ちゃんと罰を受けることになっているんだ。それが世の常というもののなんだ」

モミオは静かに言った。

罰。

モミオはそう言った。悠々爺は罰を受けたのだと。悠々爺が死んだのは罰だったのだと。では、その罰を与えたのは誰なのか。罰を与えたのは神様だ。そう思ったかった。あれは、神様の与えた罰だったのだと。けれど、そう思うには悠々爺の死は、あまりにタイミングが良かった。

悠々爺が怖くて、会いたくなくて、けれど長坂にいる限り会うことは避けられなかった。また同じことが起きたらと思うとからだがかわばって呼吸が苦しくなった。誰にも相談できないのが苦しかった。悠々爺が死ねばいいのに。そしたらこんな思いしなくてすむのに。

いつしか私は、悠々爺の死を願うようになっていた。毎晩、眠る前に祈るように願った。その半年後、悠々爺は本当に死んだ。解放された喜びよりも、私の呪いが悠々爺を死なせてしまった思いの方が強かった。呪い殺してしまった罪悪感からか、しばらく悠々爺の夢を見た。夢のなかの悠々爺は変なことをしなかった。みんなの知っている、無口で腰の曲がったゴミ捨ての人だった。

罰を与えたのが神様ではないとしたら……。

背筋が凍りつくような気がした。モミオはもう私を見ていなかった。干してあったタオルをたたみ、次々に寝台に重ねている。

その手で、長坂の人を癒しているその手で、モミオは悠々爺を殺したのだろうか。

モミオは、哲学者のような顔つきでタオルをたたんだんでは、重ねていく。タオルはまっすぐに重ねられ、倒れることはない。五枚ずつ重ねられたタオルの塔ができていく。

『でも……』

私は思う。

『モミオは鼻は利くかもしれないけれど、目の見えない人が屈強な悠々爺を穴に突き落とすなんて、きつと無理だ。だったら、どういうことなの？』

私は混乱していた。

『モミオが悠々爺を殺したの？』

そう聞きたかった。けれど、聞くことはできなかった。

「モミオ、お茶にしようよ。民枝さんのおはぎ、食べたいな。お腹すいちゃった」

「そうだね。紗南ちゃん、お茶淹れてくれるかな。僕は漬物とおはぎを出すよ」

モミオはタオルをたたむ手を止めて私の方を向いた。柔らかな笑顔だった。

その後、悠々爺の話がふたりの話題にのぼることはなかった。まるで、あの日は夢でも見ていたんじゃないかと思うくらいに、モミオからあの夏の気配が消えた。中学生になった私は、下校後、四時半過ぎから七時を過ぎるまでモミオの家で過ごした。学校が休みの日は、ほとんど一日、モミオと過ごした。オカリナの吹き方を教えてもらって、「見上げてごらん夜の星を」と「なごり雪」を吹けるようになった(どちらもモミオの趣味だ)。あん摩に来たお客さんにお茶を淹れたり、モミオと料理をしたり、休日の昼下がりには散歩にも出かけた。お母さんは家で過ごすことが増えて、お母さんを求める男の人たちが訪れた。もちろん、敏玄さんも。お母さんの当たりがきついのは相変わらずだったけれど、私が出かけることに

ついて口を出してくることはなかった。むしろ、私が留守にすることが気を楽しめたのか、顔の陰が以前よりも和らいだようだった。

中学二年の春のある日、学校へ向うスクールバスの車内で参考書を広げていると結芽がやってきた。

「隣、いい？」

「うん。空いてるよ」

荷物をどかして膝の上に置くと、結芽はランドセルを通路に放って空いた席に腰を下ろした。結芽は、なにを話すでもなくしばらくポニーテールに結った長い髪を細い指でいじっている。私も、再び参考書に目を落とした。

「聞きたいことあるんだよね」

結芽の声がして、

「なにかな？」

参考書を閉じて結芽の方を向いた。

結芽は、小学四年にしては大人びてみえる潤んだ瞳で、私の目をまっすぐに見た。

「さなこ姉ちゃんはモミオと付き合ってるの？」

「え？ 私が、モミオと？」

不意の質問にすぐには言葉が出てこなくて、すると結芽は沈黙が答えだと思ったのか、得意げに言った。

「うん。ママが言ってた。お兄ちゃんも『怪しい』って言ってた。パパは『ありえない』って言ってたけど、さなこ姉ちゃんとモミオは絶対付き合ってるってあたしは思ってるんだ」  
重大な発見をしたかのように話す結芽の様子に笑いがこみ上げてきた。お腹の内側でふつふつと沸き起こった笑いは、どんどんと大きくなって声となって出た。

「なんで笑ってるの？」

不思議そうに眺める結芽は小学五年の女子にふさわしい、きよとんとした顔をしている。

「ありえないからだよ。結芽ちゃんのパパが正解」

「本当に？ いつもモミオの家にいるの？ まるで恋人同士みたいに」

「本当だよ。確かにモミオの家に行きが多いけれど、私とモミオは恋人じゃないよ」

「なあんだ。つまんないの」

結芽はすっかり興味を失ったように、通路に転がったランドセルを持って席を去っていった。

悠々爺の一件はあったものの、モミオといると家では感じることはない安らぎを感じた。モミオと話したり料理を作ったりオカリナを教わるのも楽しかった。けれど、そこにドキドキやときめきはなかった。私はモミオのことを好きだったけれど、それは恋愛としての好きとは別の感情だった。

受験の年を迎えても、変わらずにモミオの家に通い、縁側に出したちゃぶ台でモミオの気配を感じながら勉強をした。

「僕は、勉強ができないんだ。教えられなくて、ごめんね」

私が小学生の頃、モミオが申し訳なさそうに言ったことがあった。学校へは行っていたし点字で本を読むことはしていたけれど、勉強にはあまり興味が湧かなくて、苦手なまま卒業したのだと教えてくれた。

「気にしないで」

私はお兄ちゃんたちの部屋に置かれた参考書を携え、わからないところは自分で調べた。学校でのテストも、ほとんどで満点を取った。答案用紙をお母さんに見せても、お母さんは私を褒めなかった。答案用紙を受け取りはするものの、興味なさそうに点数を眺めるとすぐに私へ戻した。

高校受験の前日、モミオの家に行くと、モミオはひとりでマッサージ部屋の椅子に座ってなにやら真剣に考え事をしているようだった。家に入った私に気づかないまま、腕と足を組んで、斜め下を向いている。目元は陰になっていて、こんな風になっているとモミオはその辺にいるおじさんと変わらないように見える。

モミオを驚かさないように、ゆっくりと二度咳払いをすると、

「紗南ちゃん？」

モミオが顔を上げた。光の宿らない瞳が私を捉える。見えていないのはわかっているけれど、モミオはとても奥深い顔をしているから（奥まった目元、高い鼻、薄い唇は、モミオを哲学者のように見せる）、ときどき、本当は見えているのではないかという気持ちになることがある。

「ただいま、モミオ」

声をかけると、モミオは立ち上がって、居間とマッサージ部屋とをうろうろとし始めた。

「どうしたの？」

「いや。そうだな。どうしようか」

モミオは珍しくとてもそわそわしていたけれど、「よし」とつぶやくと、居間のタンスの引き出しからなにかを取り出した。

「紗南ちゃん、渡したいものがあるんだ。どこにいる？」

「ここ。縁側だよ」

答えると、モミオは縁側へやってきて腰を下ろした。

「これ。紗南ちゃん、明日、入試でしょう？」

モミオは白くて小さな袋を差し出した。

「紗南ちゃんならきつと大丈夫。応援してるよ」

神社の名前の書かれた袋を開けると、淡い水色のお守りが入っていた。

「きれい！」

思わず声を上げると、モミオは言い訳をするように早口で言った。

「少し前になるけれど、シゲさんの運転で街に連れて行ってもらったんだ。街にはいくつか神社があるけれど、天神さまの神社に行ったんだ」

「天神さまって、学問の神様？」

「そう。学問の神様、菅原道真」

モミオから手渡されたお守りには、金色の糸で「受験合格 御守」という文字と梅の模様が刺繍されていた。

「すごく嬉しい。モミオ、本当にありがとう」

「迷ったんだ。お守りがかえってプレッシャーになってしまったらと思ったら、なかなか渡せなかったんだ。喜んでくれて、僕の方こそ嬉しいよ。ありがとう」

「モミオ、優しいね。明日、頑張ってくる」

「うん。試験が終わったらおいで。もちろん、紗南ちゃんが疲れていたら無理しないで」「疲れてても、来るよ。絶対くるから待っててね」

三月。第二週の火曜日。入試の朝は、気持ちの良い青空が広がっていた。空気が澄んでいる証拠だ。季節は春に向かっていているのに、空気はキンキンに冷えていて寒さを通り越して刺すように痛かった。けれど、それは背筋がぴんと伸びるような、清々しい痛みだった。モミオからもらったお守りをポケットのなかで握りしめる。フロントガラスの霜を溶かすためにアイドリングしている車に乗り込んで、お母さんを待った。

翌週の金曜日。街に用事があるという喜久江さんの車に乗せてもらい高校へ行き、合格を

確認して帰った。お母さんは家にいなくて、「合格でした。出かけてきます」と書置きを残して、モミオの家へ向かった。

「合格したよ！」

玄関を開けてすぐに伝えると、モミオはあん摩をしているようで、遠くから、

「おめでとう。本当によく頑張ったね」

温かい声でした。

「誠ちゃん、お守り買った甲斐があったじゃねえか」

寝台の上ではシゲさんがうつ伏せになっていた。

「いいえ。紗南ちゃんの頑張りがあったからこそ合格ですよ」

シゲさんの肩甲骨のあたりを圧しながら、モミオが言う。

「ううん。お守りのおかげだよ。モミオがそばにいる感じがして、緊張しなかったから」

「そうだったんだね。それは良かった。そんな風に思ってもらえて、僕も嬉しいよ」

合格したのは行きたい高校ではなかった。私もできることなら全寮制の高校に入って家を出たかった。けれど、目の前でにこにこ頭を揺らすモミオを見ると、この長坂にモミオがいるならもう少しここにいてもいいかなと思った。

シゲさんが帰ると、モミオは寝台を拭きながら、

「お茶でも飲もうか」

のんびりと言った。

「私、淹れるね」

「じゃあ、お願いしようかな」

私は台所へ行ってモミオの漬けたたくあんと野沢菜を切って、お茶を淹れた。あと三年、モミオとたくさん話をして一緒に料理を作ってあん摩を教えてもらって、私もお兄ちゃんたちみたいに賢くて面白い人間になるんだ。そう思った。

モミオとふたり、縁側の陽だまりでお茶とお漬物で一服しながら、新たに始まる高校生活に心をときめかせた。そう遠くない未来、モミオとの別れがやってくるなど知る由もなかった。

けがれ

隣町の普通高校へは、バスと電車を乗り継ぎ片道で一時間半かかった。電車の時間があるから、平日はなるべく寄り道をしないで帰り、部活には入らなかった。帰宅部の友達からのカラオケやマツクの誘いも断った。お小遣いがあまりなくて、土日に街に遊びに出ることもほとんどできなかった。

「大変だね」

そんな風に同情してくれる人もいた。確かに、高校生になったのに土日も長坂で過ごす生活を物足りなく感じることはあった。それでも、往復三時間ほどの時間に安らぎを感じているのも事実だった。通学の時間は、唯一、お母さんの気配から解放されて完全にひとりになる時間だった。もちろん、私の他にも乗客はいる。けれど彼らは他人だったし、すれ違うだけの人だった。その日のその時間とその空間を共有するだけの、私の人生にとってものすごく薄い人たちだった。彼らは気配こそあるけれど、車窓を流れる景色と変わらなかった。窓の外側と内側で流れるスピードに差があるだけで、彼らは景色そのものだった。

入学式から数日ほど経つと、外見や雰囲気似た者同士が集まっていくつかのグループができていった。私もそのなかのひとつのグループに入った。くつきりとした顔立ちのせい、派手な女の子たちの集団に紛れ込んでしまった。女の子たちは、だいたい男の子の話をした。中学校のときの彼氏の話だったり、いま狙っている男の子の話だったり、新米の男性教師の話だったり。私は恋の話にうまく入ることができなかった。恋をしたことがないからできないということもあったけれど、単に興味が湧かなかった。私はただ相槌を打った。みんな自分の話を聞いてほしいだけなのか、これといった問題は起こらなかった。むしろ寡黙が功を奏したのか、聞き上手だねとか大人っぽいねとか、高い評価を受けた。

「サナコは誰が気になってるの？」

「ルイくんってかっこいいよね？」

たまにそんな風に話を振られると、困った。なんと言ったらいいのかわからなくて曖昧に笑うと、

「やっぱクールだわ」

さらりと流して、再び自分の話に戻った。私の内面を知ろうと踏み込んでくる人はいなくて、それはとても喜ばしいことだった。けれど、このグループに属していることにどこか居心地の悪さと後ろめたさを感じていた。

『サナコは閉じてる』

グループのみんながそんな風に私を評するようになったのは、夏休みに入ろうとする頃



だった。私がいかに自分のことを語らないから飽きられたのだと思う。あるいは、いつまでも自分を語らない私に、裏切りのようなものを感じたのかもしれない。裏切るつもりも騙すつもりもなかったのだけれど、そう感じてしまう気持ちはわからないでもなかった。

夏休みが明けると、私が入れる集団はもうなかった。クラスメイトもまた、景色となった。休み時間や昼休みをひとりで過ごし、教室間の移動もひとりだった。小学校にも中学校にも親友がいたわけではなく幼馴染もいなかったせい、ひとりでいることには慣れていた。むしろ、気の乗らない会話に合わせずにすむことに解放感を覚えてからだだが軽くなったようだった。

休み時間になるとイヤホンをして音楽を聴き、本を読んだ。イヤホン越しに教室の音が聞こえてくるけれど、ものの数分もすれば本の世界がその音を消してくれた。

声をかけてきてるのは、晴海からだだった。

「なに読んでるの？ 面白い？」

お昼休みにイヤホンをして文庫本を開いていると、晴海はいきなり私の右耳のイヤホンを抜いた。突然教室の音が入ってきたのには驚いたけれど、イヤホンをぶらぶらと揺らしながら笑顔を向ける晴海を見ても嫌な気持ちにはならなかった。

「ガープの世界。アーヴィング。最悪」

そう答えると、晴海はもう片方のイヤホンを引っ張りながら言った。

「そしたら、本置いて、屋上いかない？」

清水晴海。

入学してからずっとひとりで行動しているクラスメイトだ。黒髪のショートカットが似合っていて、授業中によく居眠りをして先生から怒られているのに成績は学年トップクラスで、誰とも寝ると噂されている女の子だ。私は、噂を鵜呑みにするほど短絡的ではなかったし、噂は本人に聞いて自分の耳で確かめるまでは信じないようにしていた。そもそも晴海に関するその噂について聞いたです気はなかった。晴海が誰と寝ていようが、私には関係がない。そう思っていた。

晴海に話しかけられた瞬間、すでに、この子とは友達になれそうな気がするし友達になりたいという思いが胸に膨らんでいた。晴海のなにがそう思わせたのか、ちゃんとした理由はわからない。ただ、サバサバとした雰囲気やどこまでもマイペースな性格、中性的な見た目など、晴海はこれまでに会ったことのないタイプの女の子だった。

「行く」

本を閉じて、立ち上がった。

その週末、晴海は私を家に招待した。晴海の家は坂の途中にあって、白い壁の洋風建築だった。

「ようこそ。晴海がお友達を連れてくるなんていつ以来かしら。とても嬉しいわ。どうぞゆっくりとして行ってね」

落ち着いた笑顔で迎えてくれた晴海のお母さんは、肩までの艶のある髪に上品なパーマをかけていて、ページュと紺のシックな服を着ていた。晴海が美少年のようであるのに対し、晴海のお母さんはしっとりとした女優さんのような優雅さを漂わせていた。醸し出す雰囲気も晴海とは対照的で、どこまでもふんわりとされていて大人の女性の余裕を感じた。話し方もゆったりとされていて早口の晴海とは似ても似つかない。このお母さんから晴海が生まれたことが不思議なくらいだったけれど、曲線的な柔らかな目鼻立ちが、ふたりを親子として結びつけた。

リビングの壁にはキルティングのタペストリーがかけられていて、飾り棚にはガラスケースに入ったプリザーブドフラワーが飾られていた。ダイニングテーブルの上には生花がセンス良く活けられた花瓶が置いてあった。タペストリーとプリザーブドフラワーは晴海のお母さんが作ったものだった。

「綺麗だなあ」

感嘆のため息を漏らすと、

「ありがとう。嬉しいわ。ケーキを作っているの。お飲み物は紅茶でいいかしら？」

晴海のお母さんは柔らかい笑顔で言った。

晴海の部屋でお互い最近ハマっている本や音楽の話をしていると、ノックの音がして晴海のお母さんが入ってきた。

「チョコレートのシフォンケーキ。よかったら、召し上がってね」

ベッド脇のテーブルにクリームの添えられたシフォンケーキと紅茶を置いて去っていった。

「晴海のお母さん、完璧じゃん」

褒めると、

「ああ。まあ、そうなんだろうね」

晴海は寂しそうな顔をして、ふわふわのケーキに乱暴にフォークを刺した。

三月の春休みには、晴海がうちに泊まりに来た。

晴海はお母さんを見るなり、

「やばい。超人さんだけけど。サナコより色気あるし」

臆する様子もなく言った。

お母さんは気を良くしたのか、乱暴な口調はいつもの通りなのだけれど、慌てて湿気た客用布団をベランダに干したり、お兄ちゃんたちが出て行ってから手を抜きがちだった夕飯もちゃんと作ってくれたり、甲斐甲斐しいくらいによく動いた。いつもみたいにキレられるのは困るけれど、なんだか少し不気味だった。

夕飯を食べてお風呂も終え、私の部屋に敷いた布団の上でチョコレートやポップコーンをつまみながらふたりで話していると、突然襖が開いてお母さんが現れた。何本も缶ビールを抱えている。

お母さんは晴海と私の間に腰を下ろすと、ビールを開けた。

「はるちゃんは、彼氏いないの？」

晴海のことを慣れ慣れしく呼んでいて、だけど晴海はちっとも気にならないようだった。「いますよ。つていうか、途切れたことがないですよ、彼氏。今の彼氏は大学生です」

友達に話すように喋っている。

「モテるのねえ、はるちゃんは。彼氏はお母さんに紹介したりするの？」

「しないですねえ。うちの母親、そういうところちょっと固いから。変に心配かけたくないっていうか」

「ああ、わかるかも。うちの紗南子がそうよ。男のことになるかと閉じるのよね。あたしだつて娘と男の子の話をしたいのにさあ」

お母さんの言っていることがどこまで本当なのかわからないけれど、確かに私はお母さんと男の子の話をしたくない。それが寂しいと言っているけれど、男の子の話に限らず、どんな話すら斬って捨てるような雰囲気を出しているのはお母さんなのに。でも、もしかしたら、お母さんは寂しいのかもしれない、とも思う。晴海と話しているお母さんは高校生の女子みたいに生き生きしているし、お酒の缶を次々に空けていくお母さんはとても気持ちが良いそうだった。晴海はシラフなのに酔っ払っているお母さん顔負けにテンションが高かった。盛り上がるふたりの話を聞いていると、そこに乗り切れない私が普通とは違うのであって、お母さんは案外まともなんじゃないかと思えてきた。

結局その夜は、ふた組の布団に三人で雑魚寝をした。最後にお母さんと同じ部屋で寝たの

は小学校に上がる前のことだから、こうして一緒の布団で寝るのはずいぶん久しぶりのことだった。お母さんの途切れるような寝息がなんだかいやらしくて、いつまでも眠りに就くことができなかった。

高校二年生のゴールデンウィークのことだ。牢やぶりを終えてからすっかり疎遠になっていた結芽と、ほぼ一日を一緒に過ごした日があった。どういう経緯でそうなったのかは忘れたけれど、結芽がひとり留守番しなければならない何かがあったのだと思う。

中学三年になった結芽は、すっかり大人びていた。薄くお化粧をしていたし、リップも塗っていた。髪の毛からだろうか、結芽が動くとき甘くていい香りが漂ってきた。

結芽の部屋で並んでベッドに寄り掛かり、お菓子をつまみながら漫画を読んでいると、結芽が唐突に聞いてきた。

「さなこ姉ちゃんは好きな人とかいないの？」

恋をしたことがないんだよね、なんて言っても信じてもらえないだろうなと思った。恋というものに興味を抱けずにいることも話したくなかった。

いつ頃からか、恋や性にまつわることにひどい嫌悪を覚えるようになっていた。晴海とはほとんど恋の話をしなかったし、テレビも見ないようにしていた。困ったのは、読書だった。淡い恋愛の描写くらいなら許容できたけれど、キスや性行為を思わせる描写が出てくると悠々爺の匂いやお母さんの声が脳裏に浮かんだ。いったん現れた匂いや声は、私のなかから消えなくて、本の世界に戻れなくなった。結局、本を放り出すことになる。川端、谷崎、徳田秋声。何人の作家を挫折してきただろう。

「そういえば、うちのママが、さなこ姉ちゃんママは幸せだって言ってたよ」

結芽の言葉が私を一気に現実に戻した。もしかして、結芽のママが話したのは、お母さんと男の人たちの関係のことではないだろうか。結芽は、お母さんが男の人たちとしていることを知っているのではないだろうか。結芽の口からお母さんのことを話されたら、せっかく目を背け続けてきた事柄が生々しい現実となって私に突きつけられるのではないか。そう思った途端、脇と背筋にじっとりとした汗が流れ、胸がどくどくと脈を打った。

「なんで？」

なるべく平坦な声を出したつもりだった。実際、私の喉からはいつにも増して乾いた声が出た。結芽は、私の声などまったく気にしないような気楽さで言った。

「若くしてミボージンになれたからだって。ミボージンってなんなのかよくわかんないけ

どき、あんなにオトコマエのダンナさんだったんだから、生きてたらオンナの一人でも作っ  
たんじゃないかってさ。さなこ姉ちゃんのパパは若くして死んじゃったから、さなこ姉ちゃ  
んのママはダンナのおいしいとこだけ吸い取って、浮気をされずに最後まで独り占めでき  
たんだって。それってオンナとしてすごい幸せなことなんだってさ」

「ああ」

脱力したのを覚えている。そのあとの記憶は曖昧で、気づくと私と結芽は居間にいて、戻  
ってきた結芽の家族とバウムクーヘンを食べていた。バウムクーヘンは街の有名店のもの  
だと言っていたのは覚えているけれど、それがどんな味だったのか覚えていない。結芽のお  
母さんとお父さんから何か聞かれたような気がしたけれど、それも覚えていない。

「そろそろお暇します」

そう言って結芽の家を出たとき、まだ太陽は山の上で黄色い光を放っていた。

寄る場所はなかったけれど、まっすぐに帰る気にもなれず、長坂をぶらぶらと歩いた。本  
家の近く（と言っても、三百メートルくらい離れている）には公民館があつて、その道を挟  
んだ向かいには空き地がある。空き地は土をならしただけで舗装はされていない。集まりが  
あるときは駐車場として使われて、平日の昼間はお年寄りが集まってゲートボールをして  
いる。土曜日や日曜日には、ボールやグローブを持った子供が父親とやってきて、サッカー  
やキャッチボールをする。その日は誰もいなかった。

空き地を通り過ぎて道を下っていくと、お墓に出る。おじいちゃんやおばあちゃんやお父  
さんの骨は生庵寺に埋められているのに、お盆やお彼岸になると生庵寺のお墓の他にこの  
お墓もお参りする。不思議に思ってお兄ちゃんたちに聞こうと思っていたのだけれど、聞き  
そびれたまま遠くに行ってしまった。

お墓の道からあぜ道に入って段々になった田んぼを登っていくと、モミオの家の前に出  
る。モミオの家の前には小川が流れていて、それは雪解け水だった。夏でも、十秒も足をつ  
けていると痺れるくらい冷たくて、大きなスイカもあつという間に冷えた。モミオはよく、  
この小川で冷やしたスイカを私たちに振舞ってくれた。モミオの切るスイカは大きさが不  
揃いで、お兄ちゃんたちは私に大きいものを譲ってくれた。種を遠くに飛ばすのを競った  
り、食べ過ぎてお腹を下したりした。モミオの家は、ひっそりと静まり返っている。

夕日に照らされて壁や屋根の傷みを露わにしたモミオの家をしばらく眺めて、後にする。  
枝道を歩いて車道（と言っても細い道だ）に出てしばらく歩くと、道は右と左に分岐する。  
左に曲がって坂を登る。五分ほど登ると家に着く。

玄関を開けようと取っ手に手をかけると、ちょうど玄関が開いた。現れたのは歎玄さんだった。

今日も歎玄さんはお母さんとしてたんだ。

そう思いながら歎玄さんに頭を下げた。歎玄さんは、「こんにちは。紗南子ちゃん」と声に出して挨拶をした。お母さんは見送りにも来ないようで、作務衣を着た歎玄さんひとりきりだった。いつも家に来た気配は感じているものの、部屋に籠っているか外に出るかしていたから、こうして顔を合わせるのは久しぶりのことだった。

『さなこ姉ちゃんは好きな人、いないの？』

結芽の声が頭のなかで鳴った。瞬間、歎玄さんに聞いていた。

「お母さんのこと、好きなの？」

歎玄さんの瞳は、長い前髪の向こうで、悲しそうに潤んでいた。悲しそう、というのは私の主観で、夕日に反射して潤んで見えているだけだったのかもしれない。

歎玄さんはほんの少しなにかを考えているようで、視線を私から外して斜め下を見ただけで、すぐに私をまっすぐに見つめて言った。

「はい。好きです。心から好きです」

その言い方も黒目がちな瞳も背筋もあまりにまっすぐなものだから、まるで私が告白されたような気分になってしまった。

「えっ……」

顔に熱が帯びていくのを感じた。きっと私の頬は赤らんでいた。これではまるで私が歎玄さんに恋心を抱いているみたいじゃないか。そんなことを思うと、ますます頬が赤くなっていくようだった。誤解されたらいやだと思った。かといって、別に好きじゃないかなどと弁明するのもおかしい気がした。

言葉を探していると、歎玄さんがぼそりと言った。

「小さい頃から、ずっと憧れていたんです」

歎玄さんはまるで私と同じくらいの年齢に戻ってしまったような、ひどく不安げで頼りなさそうな顔をしていた。歎玄さんの、今にも泣き出しそうなその顔は、歎玄さんが長坂にお坊さんとして戻って来た日のことを思い出させた。顔の熱が引いていくのを感じた。

「小さい頃？ それっていつから？ 歎玄さんとお母さん、どんな関係だったの？」

思いつくままに尋ねると、歎玄さんはひとつずつ丁寧に答えを返してくれた。

歎玄さんとお母さんとの間には八つの年の差があった。その頃、長坂には今よりたくさん

の子供たちがいて、子供会というのがあった。子供会というのは、中学生以下の子供の集まりで、お盆や年の瀬やお正月や節句など、節目の日に集まって年長者たちから長坂の伝統を教わるというのが主な活動だった。ボーイスカウトと長坂の伝統継承が混じったような会だった。子供たちの面倒を見るのは主に大人だけれど、大人に混じって子供たちの世話をする高校生もいた。

歎玄さんは物心ついた頃から、行事のたびにお母さんと顔を合わせた。お母さんは、度胸があつて、みんなに平等に接して、伸び伸びとしていた。おまけに派手な顔立ちの美人だったから、子供たちに大人気だった。

「みんな憧れていたと思います。自由で奔放で、とても魅力的でした。美南子さんは高嶺の花で、僕など相手にされるはずはなくて、だから僕と美南子さんの間にはなにもありませんでした。ただ、僕が一方的に憧れていた。それだけです」

お母さんが魅力的だったなんてまったく信じられなかったけれど、歎玄さんが嘘を吐いている感じもない。昔を思い出しているのか、ただでさえ童顔なのにさらに幼くなったような顔をしている。少年に戻ったような歎玄さんを見ていたら、意地悪な気持ちが湧いてきた。

「で、数十年越しにその恋が成就したって思ってるんだよね？」

冷たく言い放ったつもりなのに、歎玄さんは淡々としていた。

「それはどうでしょうか。正直なところわかりません」

少年の顔に大人の影を滲ませる歎玄さんに、なぜか腹が立った。

「お母さんの相手は、歎玄さんだけじゃないんだよ。他の男の人としてもしてるんだよ」

吐き捨てるように言うと、歎玄さんの瞳からふっと力が抜けた。それから穏やかな笑みを浮かべるとまっすぐに言った。

「はい。知っています。僕はそれでも好きなのです。美南子さんが好きなのです」

「どうして？ お母さん、ものすごく性格悪いしきついし、男ぐせ悪いし。いいところ、全然ないじゃん？」

我慢できずに言うと、歎玄さんは大きくひとつ息を吐いた。それから、まるで一步一步、暗がり確かめながら歩くように、ゆっくりと話した。

「はい。知っています。紗南子ちゃんがそう思うのは、わかります。けれど、それでも、僕は、美南子さんが好きなのです。どうしようもなく、好きなのです。僕ひとりの力で足りない

いのであれば、他の男の人の力を借ります。他力本願です。美南子さんが幸せになるのであれば、僕は、美南子さんから身を引きます。滅私です。僕は、美南子さんの幸せのためならば、自分を消すことを厭わない。そのくらい、美南子さんが好きなのです」

「それ、ちよつと引く。ちよつと、じゃなくて、だいぶ引く。お母さんもきつと引いてると思う」

「そうなんですか？」

「そうだよ、普通は。けど、どうして？ どうしてそこまで人を好きになれるの？」

歆玄さんは、一瞬視線を宙に投げたけれど、再び私の目を見て言った。

「わかりません。どうしてこんなにも美南子さんが好きなのか、僕にはわかりません。ただひとつわかっていることがあるとしたら、それは、人を好きになることに、あるいは人を好きでいることに理由はないということです」

歆玄さんの表情も口調も、とても穏やかだった。

「では、そろそろ帰りますね」

そう言うと、軽く頭を下げて、夕日の方へと歩いて行った。太陽は、山へ沈もうとしていた。

ものすごく陳腐。

そう思った。

恋を知らない私でも知っているよ、そんなこと。

そう思った。

馬鹿みたいだ。

そう思った。

でも。

と、思う。

言っていることは陳腐なのに、歆玄さんの言葉には重みがあった。温かみがあった。私の足元へ伸びる歆玄さんの細長い影が、ゆらゆらと遠ざかっていく。ぶらぶらと腕を振って、お坊さんのくせに気だるそうに歩く歆玄さんが、夕日の向こうに消えていく。お母さんはずるい。なにがどうずるいのか、わからない。けれど、とてもずるい。

秋の台風のせいで長雨が続いていた。長坂と街をつなぐ路線は、運行可能の降雨量を超え



ると連休となる。そういう日は欠席を余儀なくされた。私は家で過ごさねばならなかった。天気や気圧のせいだけでなく、私は憂鬱になった。天気が悪いとお母さんも自然と家にいることになるからだ。お母さんは決まって人を呼んだ。男の人を、呼んだ。

男の人たちは私の部屋を知っていて、お母さんに会う前に部屋の襖を開けて冗談でも話すような調子で話しかける。

「紗南ちゃんとも、ダメかい？」とか、「たまには一緒に寝るか？」とか、そういった類のことだ。冗談ならなにを言っても許されるとでも思っているようなその態度が嫌だった。イヤホンをして聞こえないふりをしたけれど、男の人たちの節操のない大きな声は音楽を突き破って鼓膜に届いた。男の人たちがお母さんのもとへ行くと、私は家を出た。横殴りの冷たい雨に打たれながら、長坂を歩いた。私の居場所は、どこにもない。唯一の居場所だったモミオは、もう長坂にいなかった。正確に言えば、モミオはもうこの世にいなかった。モミオは私が高校一年の秋に死んだ。

あん摩してもらいにモミオの家を訪れたシゲさんが、トイレで倒れているモミオを見つけた。ゆるい便が流されなまま残っていて、床には吐瀉物が広がっていた。モミオはすでに意識がなくて、シゲさんが呼んだ救急車はサイレンを鳴らさなままモミオを運んだ。警察による検証が入り、トイレの便や吐瀉物が調べられた。台所の調理台にタッパーが見つかった。タッパーには、きのこのおろし和えが入っていた。

毒キノコによる中毒死。

モミオの死因は、そう断定された。

モミオの遠い親戚が催した葬儀には、大勢の人たちが参列した。生庵寺の本堂がいっぱいになるほどだった。お父さんの十三回忌で帰省していたお兄ちゃんたちも参列した。最近の写真がなかったのか、祭壇に飾られた遺影に映るモミオはひどく若かった。盲学校を卒業したときに撮られた写真だと、誰かの声が教えた。

その夜、お兄ちゃんたちは居間でビールを飲んでいた。

「紗南子も一緒にどうだ？」

「モミオに献杯を捧げよう」

そんな風に誘われたけれど、ひとりで過ごしたい気分だった。

「私はいいや。お風呂に入って今日は休むよ」

そう断ってお風呂へ行った。

お風呂から上がるとお兄ちゃんたちは居間にはいなかった。お母さんも休んだようで、誰

もない居間は明かりだけが煌々と光っていた。照明のスイッチを切って二階へ上がった。ひろし兄ちゃんの部屋の前をとおりすがると、襖の向こうからふたりの声が聞こえてきた。酔っているのか、声が大きい。

「まさか死ぬなんてなあ」

ひろし兄ちゃんの声に、足を止めた。

「呆気なかったな」

かずみ兄ちゃんの低い声がした。

「毒キノコが混ざっていたなんて」

ひろし兄ちゃんの声が続いた。

「オレたちにわかるはずがないじゃないか」

「けど、オレたちが……」

「それは言うな。事故だったんだよ、あれは」

かずみ兄ちゃんの憤ったような声が聞こえる。

「本当に事故なのか？ オレたちがあの時……」

ひろし兄ちゃんの言葉を遮って、かずみ兄ちゃんと言う。

「いや。これでよかったんだよ。モミオの死は残念だけど、人はいつか死ぬんだ」

少しの沈黙のちに、ひろし兄ちゃんの声がする。

「わかった。このことは、オレたちだけの秘密だ。紗南子には言わない。絶対に」

「そうだ。それがいい」

からだがかわばり冷えていくのを感じた。金縛りにあったように動けなくて、からだの芯が震えた。

「事故？ このこと？ 秘密？」

お兄ちゃんたちの言葉が頭のなかをぐるぐると巡った。脳のなかの言葉は攪拌されて溶け合って、別の言葉となって脳内を回り出した。

お兄ちゃんたちはモミオの死に関わってるの？

脳内に浮かんだぼんやりとした言葉は、次第に刺々しい輪郭を形作っていった。

お兄ちゃんたちがモミオを死なせたんだ。でも、なんのために？

そう思っていると、まるで答えるように声が聞こえた。

「紗南子は解放されたんだよ」

「モミオには申し訳ないけど」

え？ 私のため？ モミオが死んだのは、私のせいなの？

「大輔と結芽がいてよかったよ」

「離れているとなにかと不便だ」

大輔と結芽？ あのふたりがどうしたの？ お兄ちゃんたちはなにを言ってるの？

襖を開けてお兄ちゃんたちに聞きたかった。けれど、私が襖を開けることはなかった。おぼつかない足で部屋へと続く廊下を歩いていると、パズルのピースがカチリカチリとはまっていた。

お兄ちゃんたちはモミオを殺した。それは、私がモミオの被害に遭っていると勘違いしたせいだ。ふたりの勘違いは、きっと大輔と結芽が関係している。大輔と結芽は、私とモミオについての誤った情報を伝えたのだ。

『あのふたりは付き合ってるんだよ』

お兄ちゃんたちは、私をモミオから救うためにモミオを殺した。

同じ理由で、お兄ちゃんたちは悠々爺も殺した。私が悠々爺の被害に遭ったことをモミオから聞いたお兄ちゃんたちが、目の見えないモミオに変わって悠々爺を殺した。

からだは冷たく痺れているのに、頭はスツキリと冴えていた。頭は激しく回転して考えたくないことを考え続けた。頭が回り続ける一方で、心は砂でも詰められたように重くて無数の針で刺されたように痛かった。思い切り泣いて砂も針もすべて洗い流したかった。けれど涙は出なかった。

『痛むところを圧せば良いとは限らないんだ』

モミオの声がする。

『意外なところにそこを癒すツボが隠れているんだ』

モミオに聞きたかった。

心が痛いときは、どこを圧せばいいのかな？ 私のこの心の痛みは、どうすれば癒えるのかな？

モミオは黙ったまま、なにも答えてくれない。モミオととても話したいのにモミオがいなことが悲しかった。ずっと信じていたお兄ちゃんたちがモミオを殺したかもしれないことが胸を締め付けた。心の痛みをなくしたかった。私は自分のからだを圧した。モミオが教えてくれたツボを、自分で圧せる場所すべてのツボを圧した。

足の裏、手のひら、腰、脚、腕、背中、胸、顔、耳、頭。

すべての場所を圧した。けれど、どんなに圧しても悲しみが鎮まることはなかった。圧すほどにモミオとの思い出が蘇った。心の痛みを癒すツボはきつと、自分では圧せない場所にある。そこを圧してくれる人は、もういない。

高校三年の春になり、進路調査票を渡された。

「進学」に丸をつけてお母さんに渡したら、「女なんだから働いて、早くお嫁にいけないのよ。無駄に賢くなったりでもしたら結婚なんてできなくなるのよ」と一蹴された。それでも進学したいと粘る私に、女の私には学資保険をかけていないとお母さんは言った。

「お金がないのよ。仕方ないじゃないのさ」

「ひどいよ。お母さん、それはひどすぎるよ」

そう言うと、お母さんは切れたように怒鳴った。

「女なんだから勉強なんかしないでいいんだよ！ 頭のいい女は小難しいって男に好かれなんだよ！」

「お母さんの頭は古いよ。今ときそんな考え、おかしいよ」

「だったら自分でなんとかするんだね」

「お兄ちゃんたちのお金はどこから出てたの？ ちゃんとしたお金なの？ 綺麗なお金なの？ 胸を張れるお金なの？」

気づくと私は泣いていた。確かに悔しい思いはあったけれど、泣くほどに悲しいという感情はこれっぽっちもないのだから自分でもどうして泣いているのかわからなかった。

「お前、それが甘いつていうんだよ。ちょっと賢くなると、すぐそういう頭でっかちな方に考えが向くんだよ。この世の中にね、綺麗なお金なんてないんだよ。よく覚えておきな。綺麗なものなんて、この世には何ひとつないんだよ！」

そんなこと、わかっていた。世の中に綺麗なものがないことなんて、とっくにわかっていた。悠々爺、お母さん、お兄ちゃん、長坂の男の人たち。世の中には穢れたものが溢れている。けれど私は信じたかった。世の中には綺麗なものがあると信じたかった。汚いものを相殺するくらいに綺麗なものが溢れている。そう信じたかった。嘘でもいいから綺麗なものを頭のなかにとどめておかないと、私自身が穢れに塗れていきそうだった。

「綺麗なもの、あるよ。私はそう信じてる」

泣きながら吐いて出た言葉に、お母さんは一瞬言葉を詰まらせたけれど、

「そんな行ききたきゃ行けばいいよ。けどね、お金は自分で用意するんだよ。私は知らないよ」

捨て台詞を吐いて台所に去っていった。

部屋に戻ってベッドに寄りかかってしばらく泣いた。やっぱりどうして泣いているのかわからなかった。大学へ行けないかもしれない不安はあったし、頭でつかちと言われた悔しさもあった。お母さんと分かりあいたいのに分かり合えないもどかしさがあった、男の人たちとの関係を聞き直るお母さんへの憤りもあった。けれど、それらのどの感情も、私の頬を伝って唇に落ちてくる涙の味にふさわしくないような気がした。そうした負の感情が凝縮された涙だったら、もっと苦くて毒々しい味がするはずなのだった。私の涙は、ただしょっぱいだけで、ひたすら薄かった。これっぽっちの涙しか流せない自分がひどく情けなかった。

十二月。高校で三者面談があった。そこでもお母さんは頑なだった。担任が呆れるくらいに自分を曲げなかった。

「うちにそんなお金はありません。大学に行きたきゃ、自分で稼ぐなり奨学金を使うなりしてください」

その一点張りだった。

「紗南子さんはとても優秀なので、進学したほうが未来が開けると思うのです」

お母さんと同じ年齢くらいの担任の女性教師は、そんな風に援護してくれた。けれど、私はもうなにを言う気も起こらなかった。ただ、お母さんの見の狭さが恥ずかしかった。

面談の翌日、休み時間に晴海がやってきて聞いた。

「面談、どうだった？ 私、受験は嫌だって言ってるのに母親が進学させるって息巻いて、もうタイヘン」

「うちは、逆。進学したいのにお金がないって。行きたかったら自分でなんとかしなさいって。無理に決まってるのにな」

「サナコってお兄ちゃんいたよね？」

「うん。ふたりいるけど」

「頼んでみたら？」

「え？」

「可愛い妹のためなら、援助してくれるでしょ」

お兄ちゃんたちとは、あの日から音信を絶っていた。お兄ちゃんたちは電話を寄越したり手紙を送ってきたけれど、私は電話に出なかったし返事も書かなかった。ふたりが怖かった。余計なことを尋ねてしまいそうな自分が怖かった。知らなくて良いことを知ってしまう

ことが怖かった。

「我ながら名案だと思っただけ。ちょっと？ サナコ？ 聞いている？」

お兄ちゃんたちには頼りたくはなかった。けれど、お母さんとふたりで暮らすには、私は摩り切れていた。このままだときつと私は後悔する。そんな風に思っていた。

かずみ兄ちゃんは東京の大学を出たあと、そのまま東京に残って大手出版社に就職していた。ひろし兄ちゃんは、横浜の大学を卒業して製薬会社でMRをしていた。少し前に届いた手紙に書かれていた。その夜、私はかずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんに宛てて手紙を書いた。生まれて初めて書いた、お金の無心の手紙だった。

モンク

高校を卒業した私は、長坂を出た。かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんの援助で、長坂から電車で二時間ほどのところにある地方都市にアパートを借りた。そこで、学費の足しにするためにアルバイトをしながら受験勉強をする。そんな計画を立てた。

「学費くらい、オレらが出してやるよ」

「バイトの合間に受験勉強って、受験はそんなに甘くないぞ」

かずみ兄ちゃんとひろし兄ちゃんはそう言ってくれた。お兄ちゃんたちの申し出はありがたかったけれど、お兄ちゃんたちにすべてを任せつきりにするのは気が引けた。

生活が落ち着きを見せてきた四月の終わりの昼下がり、ガイドブックを持って街に繰り出した。ガイドブックによると、街には音楽にちなんだ名前の喫茶店やバーが多くあるようだった。無伴奏、グールド、田園、テイクファイブ、サッチモ、運命、ゴールドベルク（別のページに、「スナック紅蓮<sup>ぐれん</sup>」というのもあったけれど、これはきつとグレン・グールドとは無関係だ）。クラシックやジャズを流し、マスター自身が接客の合間に楽器（トランペットやトロンボーン、ピアノやウッドベースなど）を演奏するお店もあった。そうしたお店の多くはこぢんまりとしていて、大通りから脇へ入った小さな路地にひっそりと佇んでいた。ガイドブックには載っていない「喫茶モンク」を見つけたのは、たまたまだった。街を見下ろせるという高台にある公園に向かって緩やかなカーブを歩いていると、唐突に建物が現れた。カーブを抜けた先にあったのは二階建ての小さな煉瓦建てで、煉瓦を覆う苔やシダ

の様子からそれなりに年季が入っているように見えた。あたりにはその建物以外に家はなくて、頭上に広がる青い空を独り占めしていた。一階は「高橋オーディオ」という看板が掲げられていたものの、シャッターは閉まっていた。建物の脇に二階へと続く細くて急な階段が伸びていて、その脇の壁に手書きの張り紙が愛想なく貼られていた。

#### アルバイト募集

#### 経験不問

たった二行だけの潔さが、目を引いた。

私は導かれるように階段を登り、木とガラスでできた古めかしい扉を開けた。

「いらっしやいませ」

迎えてくれたのは七十代ほどの男性で、長めの白い髪をオールバックにしていた。木の家具で統一された店内はこぢんまりとしていて、オレンジ色の間接照明のせいかわかなくて暖かい雰囲気でした。隣の人と肩がぶつかりそうなくらい小さな四人掛けのテーブルがひとつとつと、窓際に置かれた二人掛けのテーブルがひとつ、四脚の椅子が並べられたカウンター。それがすべてだった。四人掛けのテーブルの脇には、レコードの収められた棚があって、棚の脇の台に古めかしいオーディオセットが乗っていた。棚の両脇には大きなスピーカーが置かれていて、ピアノトリオが流れていた。

「こんにちは。張り紙を見たんです」

そう言うと、

「そうですね。ありがとうございます」

白髪の男性は柔らかな笑みを浮かべた。

「お若いようですが、おいくつですか？」

「今年十九になります。未成年だと働けませんか？」

「そんなことはありませんよ。簡単にお仕事の説明をしますね。どうぞお掛け下さい。小笠原と申します」

小笠原さんはカウンターの椅子を勧め、私が座ったのを確認するとアルバイトの条件について話し出した。

「勤務時間は夕方五時から十時で、時給は八五〇円です。火曜が定休日で、週六日の勤務です。仕事は、コーヒーを淹れてお出しして、お会計をして片付けをします。戸締りもお願い

します。コーヒー以外のメニューはレアチーズケーキだけです。ここまでで、なにかご質問はありますか？」

「コーヒーの淹れ方は教えてもらえますか？」

「もちろんです。私が教えます。慣れてきたら、ひとりで任せることになりますけれど、よろしいですか？」

お店の雰囲気がよかった。小さく流れるジャズが心地よかった。このお店で働きたいと思った。

「働かせてもらうこと、できますか？」

「そうしていただけるのとこちらとしても助かります。さて、いつからにしましょうか？」

「来週からでもいいですか？」

尋ねると、小笠原さんは微笑みながら頷いて、

「では、来週の月曜日からお願ひします。お時間が許すようならコーヒーでも飲んで行ってください。よろしければケーキも。私が作っています」

棚から年季の入った缶を取り出した。

昼間はアパートや図書館で勉強をして、夕方からアルバイトに出る生活が始まった。

始めの一週間は、昼間に出勤して小笠原さんからレジの扱い方からコーヒーの淹れ方、レアチーズケーキの出し方や備品のある場所などを教えてもらった。小笠原さんは無口で穏やかで、静かに淡々とお店のことを教えてくれた。用意していったメモ帳にメモを取り、家に帰ると別のメモ帳に整理し直してマニュアルを作った。

アルバイトは私ひとりだけだった。小笠原さんが朝の九時から五時までカウンターに立ち、私がその後を引き継いで夜の十時にお店を閉めた。モンクという店名の通り、BGMはセロニアス・モンクを流した。昼間はどうかなのかわからないけれど、夜のモンクが混むことはほとんどなかった。店内はひとりかふたりお客さんがいるか、まったくの無人になるかのどちらかだった。お客さんの多くはひとりでやってきて静かに本を読んだ。あるいは、目を閉じて音楽に耳を傾ける人がいて、窓から見える街の灯りを眺める人がいた。ノートパソコンを開いて書き物をする人もいた。

仕事に慣れてくると、窓から空を眺める余裕ができた。さらさらとした手触りを思わせる絹のような空があり、ざらついた砂やすりのような粒子の粗い空があった。太陽が山を透かして稜線が幾重にも重なり合う日があつて、重々しい雲が山をすっきり隠してしまう日が



あった。どの空もそれぞれに美しかったけれど、なかでも夕焼けはいくら眺めても見飽きなかった。薄紫色に染まった空はいったん色を失い靄いだらうな白になる。そのあと、徐々に色を取り戻すと、その日の終わりをなごり惜しむかのようになまぐるしく色を変えていく。薄い赤紫だった山際は燃えるような茜色へと色を濃くしていき、天頂では濃紺が主張を始める。茜色と濃紺の間を埋める数々の色彩は、自己主張を限りなく控えめに、協調を最優先に茜と紺、ふたつの空をつないでいく。やがて闇が訪れる。西の方角に目をやると、いつ現れたのか、金星が浮かんでいる。

あたりがすっかり暗くなると、街の灯りが遠くに現れ、空には星々がきらめき始める。いったん現れた橙や黄色の街の灯りは、閉店まで輝きの量が変わらないように見えた。帰宅する時間も就寝する時間もみんなそれぞれに違うはずなのに、変化しない街の灯りが不思議だった。一方で、空は日によって、あるいは時間によって刻々と変化した。星々は雲の流れによって隠れ現れ、水星と金星、火星と土星と木星が西の空に集結する日があった。日暮れどきに窓の向こうに現れる月は、時間とともに天頂へと進んでいき、そのうち窓から消えていく。ときおり、星空のなかを飛行機がその光を点滅させながら泳ぐように飛んでいった。

お店には、会社帰りのサラリーマンだろうかスーツ姿の人や、予備校講師や芸術家を思わせるラフで独創的な格好をした人が訪れた。そうした人たちのほとんどは男性のひとり客だった。たまに女性の二人連れが来ておしゃべりをして帰っていくこともあったけれど、滅多になかった。お客さんの大半が、コーヒーと一緒にレアチーズケーキを注文した。コーヒーは一杯三百五十円でケーキは四百円。ケーキセットにすると七百円だった。

小笠原さんの作るレアチーズケーキは深煎りのコーヒーとよく合うと評判だった。一度、小笠原さんに教わったレシピをお店のキッチンで試したことがあったけれど、小笠原さんの味を出すことはできなかった。

「そう簡単に作られては困ってしまいますよ」

小笠原さんはうっすらと笑みを浮かべて訥々と言った。

夜をひとりで任されるようになって間もない、ある夜のことだった。閉店まであと一時間ほど。お客さんがいなくなった店内でレコードの棚を拭いていると、スーツを着た男性が入ってきた。男性は細身で長身で、顔が小さくて手足が長かった。短く切られた髪は前髪を上げ丸い額が覗いている。清潔感があって人目をひく華やかさがあった。男性はカウンターの席に文庫本を置くと、ケーキセットを注文してトイレへと入っていった。手には大きな紙袋

を提げていた。

豆を挽いてコーヒーをドリップして、レアチーズケーキを冷えたお皿の上に載せて、温めておいたカップにコーヒーを注ぐ。男性はまだ戻らなかった。迷ったけれど、カウンターの席にケーキとコーヒーを置いてカウンターの奥へ下がった。

カウンターからは死角になっているトイレのドアが開いた音がして、足音がこちらに近づいてきた。その音に違和感を覚えた。まるでハイヒールでも履いているような、かつかつという鋭い音だった。それは男の人の足音ではなかった。

壁の陰から現れた男性は、男性ではなかった。男性なのだけれど、女性だった。女性の服を着てお化粧をして、ウィッグをかぶりベージュのワンピースを着ていた。

思わず「え？」と声が出た。

お客さんは、頭を掻きながら言った。

「驚いたよね？ ごめんね。けど、これが俺なんよ」

男の人は、濱本と名乗った。

「小笠原さんからはなんにも聞いたらんよね。そういうとこ、あの人らしいよね」

そういうと、濱本さんは簡単な自己紹介のようなものをした。濱本さんは、広島に妻と子を残して単身赴任中だった。大手の〇〇関連会社でデータサイエンティストの仕事をしている。婦人雑誌の読者モデルや地元の広告のモデルの仕事をしている奥さんとの間に三歳の娘がいる（「デキ婚なんよ」と濱本さんは言った）。その女の子は天使のように可愛くて、濱本さんの言い方をすれば、「濱本家は見た目的には完全に勝ち組」だった。三十二歳にして広島の外に家を建てようと計画するくらい経済的な余裕もあった。身長一七六センチのバランスのとれたスタイルと人好きしそうな顔立ちで、女性社員たちの心を掴んでいた（「自慢でもなんでもなく、俺、モテるんよね」）。女性たちから誘いを受けることは少なくともなかったけれど、濱本さんがそうした女性を相手にしたことは一度もなかった（「女のひと、怖いんよ。口説いてくる女のひと怖いし、うちの奥さんも」）。

濱本さんは、モンクから高速道路を二〇分くらい走ったところの街にひとりで暮らしていた。気が向くと、職場と自宅との間にあるこの街に寄った。車には女性用の服と靴とお化粧道具を積んでいて、モンクに来るときはそれを持ってきた。

「紗南子ちゃん、なんにも聞かんよね？ 俺のこの格好、気にならんのか？」

何度目かに来店したとき、濱本さんが聞いた。店内には濱本さんともうひとり、社員風のおじさんがいるだけで、そのおじさんも間もなく帰った。その日の濱本さんは、濃いブル

ーのサマーニットに黒いタイトスカートを合わせていた。

「ああ。気にしたこと、ないかもです。濱本さんの場合、どちらの濱本さんも綺麗ななあつて思うんです。あと、センスいいなって。私もお金に余裕があったら、濱本さんみたいにたくさん洋服買っておしゃれを楽しみたいなあつて思ったりします」

「紗南子ちゃん、変わってるね。けど、紗南子ちゃんから言われると嬉しいわ。ありがとね」

濱本さんは、そう言うときケーキを一口食べて、コーヒーを飲んだ。

「おかわりもらえる？」

「フレンチでいいですか？」

「うん」

豆を取り出してミルで挽いてフィルターに移す。濱本さんはその間、窓から見える夜景に目をやっていた。もしかしたら、窓に映る自分自身を見ていたのかもしれない。

コーヒーにお湯を垂らしていると、濱本さんの声が出た。

「俺、ゲイとかバイじゃないんよ。ただ、こういう格好するのが好きだけなんよ。高校二年のときの文化祭で女装コンテストっていうのがあって、それにクラス代表で出るようになったんよ。俺、背はあるけど細くて顔が小さいから優勝狙えるよって、クラスの女子が張り切ってしまった。けっこうチカラ入れて頑張ってくれたんよ。『濱本くんは素材がいいから、お化粧は控えめでいいし、カラダの線が綺麗だから胸とか盛らない方が絶対映えるはずよ』。そんな風に言っつて、いろんなお化粧を試したり、衣装もそういうのが得意な子が俺を採寸して作ってくれたんよ。最初は乗り気じゃなかったんだけど(だって、女装とか恥ずかしいよね?)、女子たちがあれこれと俺をかまってくうちに、俺自身がはまってしまったんよ。『これが俺? やば。綺麗よね?』って。俺、もともと自分に自信がなくて、それを見せまいと気を遣うとポロが出て、我ながら挙動不審だなあつてことが何度もあつて、だからみんな俺のこと嫌ってるんじゃないかって思っていたんよ。女装コンテストに出ることになったのも、いじめの一環なんじゃないかって疑ってたんよ。けど、女子たちはまるつきりそんな風じゃなくて、むしろものすごく楽しそうで、俺、これやって本当によかったなあつて思ったんよ」

「優勝したんですか？」

「そう。優勝。ダントツだったんよ。クラスは男子も女子も大盛り上がりで、俺、高二にして初めて友達っていいなって思ったんよ。ここで話が終わったらしい話なんだけど、終わらんよ」

淹れたてのフレンチをカウンターに置いて空になったカップを下げた。濱本さんは、新しいコーヒーを一口すすると、笑うように言った。

「女の子の紗南子ちゃんに言うことじゃないって思うけど、女子って怖いよね」

「なにがあったんですか？」

「俺、女装にはまってしまったんよ。俺には姉ちゃんがいたんだけど、内緒で服を借りて女装するようになったんよ。うちの家族、みんなデカいんよ。姉ちゃんの背、一七〇超えてて、俺でも着れる服とかあって、それを黙って借りたんよ。カツラも自分で買って、化粧は母親ののを借りて。最初のうちは、家族の留守中にひとり家でやつとったんよ。女の人の格好すると自信のない俺がどっかに去ってって、文化祭のときの高揚感みたいなのが蘇って気持ちよくなつたんよ。ああ俺は俺でいいんだって。あのときの俺、最強だったわ。春休みのことだった。春のあったかさに釣られたんか、外に出たくなつたんよね。誰にも会わんようなところで女の格好して歩いてみたいなって。そう思ったらいってもたつてもいられなくなつて、服とか持って家を出てたんよ。電車に乗って一時間離れた街に行つて、カラオケボックスで着替えて街に出て。恥ずかしい気持ちもあったけど、それも最初のうちだけで、どんどん気持ちが悪くなって行つたんよ。見える景色が違うっていうか、本当気持ちよかつたけど、見つかつてしまったんよ。クラスの女子に。向こうは二人で歩いて、一瞬目があつた気がしたけど、気のせいだろうってそっぽ向いて歩いていったんよ。そしたらクラスの女子、俺の名前を呼んで追ってきてしまつて。俺、ヒール履いとつたから、走つて逃げるのもできなくて。っていうか逃げるのもおかしな話と思つて、女子たちを待つとつたんよ。女子たちは俺の前までやって来て、肩で息をしながら『濱本、なにしとん？』って笑つたんよ。俺を指差して、『その格好、なに？』って笑つたんよ。翌日学校へ行くと、みんな知つとつた。俺、むっちゃ塞いだ。けど、女の人の格好するんはやめられんかつた。女の人の格好をしたときの高揚感なものすごくて。そのあと家でごっそり女の人の格好を続けたんよ」

「なんであれ、人を笑うのって、おかしいと思います。濱本さん、気にすることは無いと思います。その人たちの世界が狭いだけです。濱本さんはスーツでも素敵だし、女の人の格好をしても素敵です。無理に自信を持つ必要はないと思うけど、必要以上に自信をなくすこともないと思います。こんな小娘に言われても救われなと思うけど」

「いや、嬉しいわ。ありがとね」

「いえ。こちらこそ、話してくれてありがとうございます。そろそろ、お店閉めてきますね。ゆっくり飲んでいてください」

扉の看板を「close」に変えて、階段下の入り口に出してあるネオン看板の明かりを落とす。電源を抜いてから、階段の脇の邪魔にならない場所へ看板を仕舞った。空を見上げると、白くて小さな月が東の方角で静かな光を放っていた。

濱本さんは、週に一、二度モンクを訪れた。女の人の服に着替えてお化粧をして、コーヒーを飲みケーキを食べた。

私が受験生であると知ると、

「俺、英語と数学だったら教えられるかも。今度、参考書とか問題集、持っといでよ。どうせ、暇よね？」

とマスクラを塗った瞳を瞬いた。

確かに、夜のモンクを訪れるお客さんはあまりいなくて、九時を過ぎると濱本さんの貸切のような状態だった。バッグには英単語帳や古文の単語帳が入れてあって、暇があると椅子に座ってパラパラとめくったりすることもあった。濱本さんの提案を受けてからは問題集もバッグに入れて、空いた時間に解いた。濱本さんが来ると、わからない箇所をまとめて質問した。濱本さんの教え方は「痒いところに手が届く」という表現がぴったりな、とても丁寧でわかりやすいものだった。

「俺、学生の頃、小さな塾で塾講師とったんよ。中学生と高校生の英語と数学を担当してて。塾講師って授業をするだけじゃないんよね。生徒の話し相手になったり、授業が終わるとすぐに帰ってしまう他の先生の代わりに生徒の質問に答えたり。やることが地味に多くて、だけどやりがいがあった好きだったんよ」

そう話す濱本さんは、どうして私がそこでつまづいているのか察知して、そういう風に考えてしまう私の思考の道筋を図に書いて説明した。出題者の意図についても教えてくれて、確実に点数を取る方法を指南した。

濱本さんは『英語と数学なら』と言ったけれど、質問をすれば古文と漢文を除くほとんどの教科を教えてくれた。カウンターに並んで座る私たちは、遠目から見たら仲の良い姉妹のように見えたかもしれない。濱本さんのおかげで、伸び悩んでいた模試で少しずつ点数を稼げるようになっていった。希望の大学に入るには二年かかると思っていたけれど、C判定ばかりだった模試の結果は秋の始まる頃にはB判定へと変わった。

小笠原さんとは、夕方の引き継ぎのときに顔を合わせた。

コーヒー豆やケーキの残量や備品の補充など、業務連絡を終えた小笠原さんはほんのわずかだけ雑談をしていた。雑談と言っても、「辻さん、勉強の方は順調ですか?」とか、「暑い日が続いてますが、ちゃんと水分は摂れていますか?」とか、そういう当たり障りのない話だ。小笠原さんが私のプライベートに踏み込んでくることはなくて、だからというわけでもないけれど、私も小笠原さんのプライベートに足を踏み入れなかった。

モンクでバイトを始めてから、これといって大きな出来事はなかったけれど、一度だけ小笠原さんに報告しなければならぬ出来事が起きた。

そのお客さんは、中年女性の二人連れで、ぱっと目を引くような煌びやかな服を着て、派手なお化粧を施していた。ひとりには背が低く、もうひとりには背が高かった。ふたりとも太っていた。ふたりは、お酒に酔っているようだった。九時を回った頃に訪れたそのお客さんは、「チーズケーキとコーヒーでしょ」、「あらそう。じゃあ、私もそうするわ」つまみの壊れたスピーカーのような大きな声で話しながら、お店の奥の四人掛けのテーブルに座った。

カウンターには女の人の格好をした濱本さんがいたけれど、ふたりが気に留める様子はなく、話に夢中になっている。おしぼりとお水を持っていき注文を尋ねると、

「さっき言ったじゃないのよ」

「聞いてなかったわけ?」

こちらを見ずに怒鳴るように言った。

「申し訳ありませんでした。ケーキセットをおふたつでよろしいでしょうか? コーヒーは、ブレンドとフレンチとアメリカンから選べますが、いかがなさいますか?」

静かに尋ねると、

「ブレンドに決まってるじゃない」

小さな太った方が言った。

「かしこまりました。少々お待ちください」

カウンターの奥に下がると、じっと本に目を落としていた濱本さんが顔を上げて、視線で「大丈夫?」と聞いてきた。首を二、三度小さく縦に振って大丈夫だと伝えると、濱本さんは再び本に視線を落とした。

ふたりの女性客は、閉店の十時に近づいても帰る様子がなかった。濱本さんは着替えるためにトイレに入っていた。私はふたりのもとへ行き、申し訳ないけれどそろそろ閉店だと伝え、お店の扉の看板を「close」に変えようと扉の外へ出た。店内の女性たちの大きな声は途切れる気配がない。これはまだ帰らないだろうなあ。ならばついでに階段下のネオン看板も

下げてしまおうと、階段を降りた。スイッチを切ってコンセントを抜いていつもの場所に収めて階段を上っていると、女性たちが扉を開けて出てきた。

「あっ。お会計」

声をかけると、

「レジのところに置いといたわよ」

大きな太った方が言った。

「少々お待ちくださいませ」

そう言っつて、急いでレジを見てきたけれど、トレイにお金はなかった。

「申し訳ありません。お代が見当たらないのですが」

そう伝えると、階段を下り始めていた小さな太った方が足を止めて振り向くと、

「私たちはちゃんと払ったわよ」

と言った。

「あそこにいたデカイ女が盗んでいったんじゃないの？ そそくさと帰って行ったみたいだし」

小さな方の前にいた大きな方が振り向いて言った。

「きつとそうよ。私たちを疑うより前にあのデカイ女を疑いなさいよ。私たちの払ったお金を持つてとつと逃げたのよ。お店を空にするあんたも悪いのよ」

大きな方を援護するように小さな方が言うと、二人はこちらに背を向けて階段を下り始めた。

ふたりは代金を払わずに帰ろうとしている。しかも、濱本さんに濡れ衣を着せて。

許し難かった。

「それはありえませんが」

私はきっぱりと言った。

その反応が想定外だったのか、ふたりの女性は再び足を止めて振り向くと眉をしかめた。

「なに？ お客に喧嘩売ろうとしてるわけ？」

奥の大きな方が凄んだ。

「こんなしょぼい店、潰すの簡単なんだけど」

手前の小さな方が脅した。

「もう一度言います。彼女が盗むということはありえませんが」

女性たちの脇をすり抜けるようにして階段を降りていき、女性たちの行く手を阻むように真ん中に立って繰り返した。

女性たちは二人並んで立つと、

「そこ、どきなさいよ」

「そうよ。邪魔なのよ」

大きな声と大きなからだで私に圧をかけてきた。

「やめていただけませんか」

右手で手すりをしっかりと握ってふたりを阻んでいると、濱本さんが現れた。お化粧は落とされ、スーツに着替えている。

「どうしたん？」

濱本さんの声に、ビクツとからだを震わせて振り向いたふたりは、濱本さんの優しそうな顔立ちに気を取り直したのか、威嚇するように言った。

「ちょっと、誰よ、あなた？」

「どこから湧いてきたのよ？」

濱本さんはふたりの問いかけを無視して、

「紗南子ちゃん、なにかあったん？ 大丈夫？」

心配そうに私を見た。

「大丈夫です」

濱本さんにそう言うってから、私は女性たちに視線を戻してはつきりと言った。

「もう一度言います。あのお客さんはお金を盗むような人ではありません」

私の言葉に濱本さんはすべてを察したようだった。

「払ってないん？」

濱本さんに尋ねられた女性たちは一瞬ひるんだものの、

「私たちがお会計済ませて帰ろうとしたのに、この子が済ませてないって絡んできたのよ」と堂々とやってのけ、

「そうよ。こっちは早く帰りたいっていうのに。大きな女が盗んでいったって言ってるのに」

小さい方が、やはり堂々とあとに続いた。

「ですから、それはありえないことです。私は彼女をよく知っていますが、お金を盗むような人ではありません」



この人がその女性なのだから、と濱本さんを指差せば話は早かった。けれど、濱本さんを好奇の視線にさらしたくなかった。高校時代に女子たちから受けた嘲笑をここで再び繰り返すのは辛いだろうと思ったし、目の前のこの女性たちは高校時代の女子たちよりも酷い言葉を浴びせそうなのも心配だった。

「ちよつと、小娘のくせに偉そ……」

大きな方が反撃に出ようとしたその瞬間、

「その大きな女って、俺よ？」

濱本さんが言った。

濱本さんは、持っていた紙袋からさっきまで着ていた服を取り出すと、

「これ、俺がさっきまで着てたやつよ。もう一度言おつか。その大きな女は俺で、俺は盗んでない。さ、お支払いしよっか？」

階段を降りてふたりの前まで行くと、手のひらを差し出した。

女性客たちはしばらく言葉を失っていたけれど、

「なんなのよ、この店」

「二度と来ないわよ、こんな店」

ぶつくさと言いながら、濱本さんにお金を渡して帰った。濱本さんを傷つけるようななにかを言うことはなかった。

「ありがとうございます。けど、ごめんなさい、濱本さん」

「なにが？」

「女の人は自分だって話すの、嫌な気持ちになったでしょう？」

「ああ。それね。俺も不思議なんよ。いつもの俺だったらきつと、見て見ぬ振りをして帰ったと思う。けど、紗南子ちゃんがいると自然に話せたんよ。紗南子ちゃんを守りたいとか思ってたわけじゃなくて。……自分でもわからないのだけど、大丈夫だって思えたんよ」

「本当に助かりました。ありがとうございます」

「こっちこそ、ありがとうございます。俺のこと信じてくれたし、なによりかばってくれたの、嬉しかったよ。また来るよ。気をつけて帰ってね」

濱本さんは、そう言って帰って行った。

小笠原さんに報告すると、

「それは大変でしたね。濱本さんがいてくれて助かりました。機会があったら、私からもお礼を伝えておきますね」

唇をきゅっと上げて大きくひとつ頷いた。

濱本さんや小笠原さんの存在に励まされるように、勉強に集中した。短い秋が終わり、本格的な冬が来た。いくつか受けた予備校の全国模試で A 判定が続いた。

きつと大丈夫。

自信を深めて受験に臨んだ。

一月のセンター試験でバランスよく高得点を重ね、志望校の二次試験の総合問題（英語や小論文が混ざった試験だ）も手応えがあった。三月。合格発表の日は、ひとりですぐ大学へ向かった。歩いて大学に向かっていくと、肩にポトリと何かが当たった。大きな雨粒かと思ったけれど、空は澄んだように青かった。右肩を見ると、黒いコートに白と黒の模様が付いていた。鳥の糞だった。ああ合格したんだ、と思った。根拠はなかった。ただ、肩の鳥の糞をじっと眺めていると、合格以外の未来が思い浮かばなかった。

大学のピロティに立てかけられた掲示板に自分の番号を見つけ、携帯電話で写真に収めた。脇では、アメフトのユニフォームを着た大柄な大学生たちがひよろりとした男の子を胴上げしていた。母親と手を合わせて跳ねている女の子がいた。肩を落として無言のまま去っていく男の子がいた。みんな、それぞれの春を迎えていた。

大学生活はとても静かだった。それは、国立大学だから地味で落ち着いた学生が多いというよりも、私が周囲に馴染めなくて友達ができなかったことが大きかった。

連休が明けて五月の終わり頃になると、地味で控えめだった女子学生たちも着飾ったりお化粧をするようになり、学生生活を満喫し始めたように見えた。空き時間に学食のテーブルに座って本を読んでいると、女子学生たちのキラキラとした声が聞こえてきた。彼女たちは恋人や好きな人を作り、恋愛を楽しんでいた。そんな様子を眺めていると、これまで一度も人を好きになったことのない自分にはなにか欠陥があるような気がした。嬉しそうに彼氏との初めてのデートやキスの話をする女子たちはまぶしかった。もしかしたら私が一生経験することのない世界をあの子たちは見ているのかもしれない。そう思うと、少しだけ羨ましいような気持ちがあった。それでも、私にはモンクという居場所があった。小笠原さんがいて、濱本さんがいた。恋はできないかもしれないけれど、それで十分だった。

恋人同士のブン太とケメ子が、喫茶店に入ってパフェをひとつとコーヒーをふたつ注文する。お店の名物の巨大なチョコレートパフェである。薄暗い喫茶店の高窓から、控えめな光が差し込んでいる。

やがてパフェとコーヒーが運ばれてくる。長いスプーンが二つ添えられている。

『食べようか』

ブン太が言い、

『ええ、食べましょう』

ケメ子が微笑む。

ふたりはひとつのチョコレートパフェを食べていく。

『甘くて美味しいわ』

ケメ子が瞳を輝かせて言う。

『本当だ。とても甘くてまるで僕らの関係のようだ』

ブン太が言う。

『ええ。そうね。私たちの関係そのものだよ』

ケメ子が頷く。

ブン太はコーヒーを口に運ぶ。

『甘いパフェを食べたせいか、ひどく苦く感じるよ』

ケメ子もコーヒーをすすする。

『本当ね。とても苦いコーヒーだよ』

ブン太は、おもむろにポケットからショートホープを取り出しマッチを擦って火をつける。次の瞬間、煙草をくわえ首をかしげ火を迎えたブン太の長い髪がじゅわっと燃える。

『あうわ！』

ブン太から変な声が出る。

『またなの？』

ケメ子の冷ややかな声がブン太の胸に突き刺さる。

「たとえばだな、このようなシーンを思い浮かべてほしいのである」

黒板の前に立つ先生はそう言うのと、ほんの少し黙って学生に想像する時間を与えた。

「いいか。ここで諸君にひとつ質問をするぞ。ブン太とケメ子の感じている『甘さ』や『苦さ』は同じであると言えるであろうか？ もし同じであると言えるとしたら、それは何故そう言えるのか？ もし同じと言えないのだとしたら、それは何故なのか？」

大学一年の後期。私は哲学概論の講義を受講していた。前期の先生とは別の先生が担当していた。先生の名前は藤澤葉太郎よしたろうといい、心の哲学が専門だった。五十代前半だったけれど、

スーツの上からでも贅肉がないとわかる体つきのせい、ピンと伸びた背筋のせい、とても若々しく見えた。葉太郎は学生の面倒見が良いことで有名だった。基本的に、男女を問わずどの学生にも態度を変えずに接した。本人は、「女子学生と話している方が楽しいに決まっているではないか」と笑っていたけれど、昼休みや空き時間には喫煙者の男子学生が葉太郎の研究室へ集まりみんなで煙草を吸っていた。わかりやすく面白いと評判の授業には学生が殺到して、一回の講義で何度も教室を沸かせることもあった。葉太郎本人は、「俺は大人が苦手だ」と言っていたものの、同僚や事務方からの人望も厚かったようだ。葉太郎の研究室に同僚の教官たちが相談に訪れる姿を何度も見かけた。葉太郎は頭の回転が早くて研究者としても優秀で、教育者としても頼りになって事務仕事もできた。なのにそれを鼻にかけることはなくて、いつも飄々としていた。葉太郎は決して口先だけで人を褒めるということはしなかったし、むしろ正直な感想を漏らすことが多い。葉太郎といると、その風通しの良さに清々しい気持ちになったし、自分にもいいところがあるのだと肯定感を感じることもできた。授業を終えた葉太郎の周りには、いつも誰かしら学生が集まり、ドアを開け放った研究室を訪れる学生も多々いた。

「ふたりが頼んだコーヒーは同じものですか？」

最前列の男子学生が座ったまま尋ねる。

「同じブレンドコーヒーだ」

葉太郎が答えると、別の男子学生が間髪入れずに言う。

「だったら、同じなんじゃないですか？ 普通に考えると」

葉太郎はニヤリと笑って、さっき質問した男子学生に聞く。

「お前は どう思う？」

最前列の男子学生は、慎重に答える。

「同じとは限らないと思います」

「何故そう思う？」

「うまく説明できるかな……。たとえば、色覚異常と似たことが味覚で起こる可能性があると思うんです。色覚異常の人は、赤と緑が同じ色に見えると聞きます。そうして見える色を色覚異常の人が何と呼んでいるのか知らないのだけれど、仮に、どちらも『赤』と呼んでいるとします。藤澤先生の話の場合、ブン太かケメ子のどちらかが、甘さと苦さを同じ味として感じている可能性が考えられます。甘いのか苦いのか、どちらかはわからないけれど、とにかく、どちらも同じ味なのです。ここでは、ケメ子がそういう味覚の持ち主と仮定します。ケメ子は、私たちが『甘い』と呼ぶ味も『苦い』と呼ぶ味も、どちらも『甘い』と呼ぶと仮定します。すると、二人とも『甘い』と表現しつつ、二人の間で味が異なる可能性が浮上します。同様に、コーヒーも……。あ、ダメだ。ケメ子はコーヒーも『甘い』と表現してしまふ……。あの、……。なんでもないです。すみません」

男子学生は、とても恥ずかしそうに下を向いた。

男子学生をじっと見つめて話を聞いていた葉太郎は、にっこりと笑うと、

「ありがとう。面白い意見だったぞ」  
大きく頷いた。

「では、説明するぞ。いま発言してくれた学生は、とてもいい点をつけていた。ここでクオリアという概念を紹介しよう。クオリアとは――」

葉太郎によると、クオリアとは、ある人がなにかを感じたり知覚したときにその人の意識に表れてくる質的特徴のことだ。たとえば、一枚の絵画を見るとそこに描かれる色彩や形がその人の意識に現れて、大理石に触れるときはツルツルとした感覚が意識に現れる。アイスクリームを食べるときは冷たさと甘さという感覚が現れる。色彩や形、ツルツルとした感覚、冷たさや甘いという感覚。その人の主観に現れるそうした独特の感じのことを「クオリア」と呼ぶのだと葉太郎は説明した。

「ここで生じるのが、〈私〉のクオリアが他者のクオリアと同じであるとして言えるのかという問題、すなわち、『クオリア問題』である。ケメ子とブン太の例で諸君に問いかけたのがクオリア問題に他ならない。この問いを考えるにあたって有効となるのが、『逆転クオリア』という発想である」

葉太郎はそう言うのと教室をぐるりと見渡して、逆転クオリアについての説明を始めた。

逆転クオリアとは、生まれつきクオリアが逆転しているという想定で、たとえば、私たちが「甘い」と呼ぶ味を「苦い」と感じてそれを「甘い」と表現する状態、かつ、私たちが「苦い」と呼ぶ味を「甘い」と感じそれを「苦い」と表現する状態を指す。つまり、普通の人と

逆のクオリアを持っているという想定だ。

「ここで、たとえばケメ子が逆転クオリアを持っていると想定する。そうすると、ブン太とケメ子の『甘い』や『苦い』は同じでなくなる。かつ、ブン太が『甘いね』と言ったときケメ子は苦さを感じつつ『甘いね』と頷き、ブン太が『苦いね』と言ったときケメ子は甘さを感じつつ『苦いね』と言う、という状況が起こる。いいか。このとき、ブン太もケメ子も同じ言葉を発しているが、意識に現れる味のクオリアは正反対なのである」

葉太郎はそこまで説明すると、

「今日の授業はこの辺で終わるが、ここまでの議論でなにか質問はあるか？」  
と問いかけた。

先ほど持論を展開して失敗に終わった男子学生の左隣に座っていた男子学生が手を挙げた。

「クオリア問題と逆転クオリアについては理解できました。けれど、ひとつわからないことがあるんです。ケメ子のクオリアが逆転してるということをブン太はどうやって知ることができるとでしょうか？」

「ありがとうございます。相手のクオリアが逆転しているかどうかを知る術はないのである。もしそれを知ることができたなら、そもそも、それはクオリア、すなわち、一人称的にのみアクセスできる私秘的な感じ、という定義に反するからだ。クオリアに興味があるのなら、関連して『他我問題』という哲学の議論もあるぞ」

「はい。ありがとうございます」

質問をした男子学生は丁寧な頭を下げた。

「他にあるか？」

葉太郎が聞くと、教室の後方に座っていた男子学生が手を挙げた。

「おう。なんだ？」

葉太郎が聞くと、男子学生はあっけらかんと聞いた。

「ブン太とケメ子の話って、もしかして藤澤先生の体験談ですか？」

「お前、鋭いな。彼女ではなかったが、まあ、経験談だ。お前たちは知らないだろうが、神田川をはじめとしたフォークソングが全盛だった当時、若者はこぞって髪を肩まで伸ばしていたのだ。俺も流行に乗って伸ばしていたわけだ。で、吸っていたタバコはショートホープ。短い希望。いい名前だよな。短いタバコをくわえてマッチで火をつけるとどうなるか？ 燃えるのである。正確には炎上はしなかったが、私の髪は焦げたのだ」

「で、女の子は口説けたんですか？」

「振られるに決まってるだろう。俺の口から言わせるなよ」

葉太郎がそう言うと、教室は笑いに包まれた。

「さて、今日の授業はここまでだ。続きは来週」

授業終了の声に、服の擦れる音やノートをしまう音、バッグを開ける音など、話し声に混じって様々な音のざわめきが教室を一気に覆った。

その日の夕方、私は初めて葉太郎の研究室を訪れた。

「今日の授業なんですけれど、あの男の子がした質問がどうしても気になってしまって。ケメ子のクオリアが逆転しているかどうかを知る術がないとしたら、私たちは互いの心を知ることができない、人とわかりあえるというのは幻想に過ぎない、ってことになってしまいますよね。そう思ったら、なんだか虚しい気持ちになっちゃいました。あ、質問というより感想ですね」

「ああ、あれな。お前も気になるか。あのあと、あの男子学生もやってきたのだよ。別の角度から自分のアタマで考えてみるといいぞ。自分のアタマで考えるのが哲学なのだ。こんなこと言うと怒られるかもしれないが、正しい答えを見つけ出すことはさほど重要ではなくて、その過程の議論に重点を置くのが哲学なのである。答えを焦らず、まずは自分で考えてみるといいぞ。コーヒー飲むか？」

葉太郎はそう言うと、コーヒーメーカーに残ったコーヒーをカップに入れて持ってきた。黒色の応接セットのあちらとこちらでコーヒーを飲みながら、葉太郎の話聞いた。葉太郎の趣味は音楽だった。高校時代に組んでいたバンドではベースを担当していたけれど、ピアノも弾ける。ロックだけではなくジャズも好きで、特にモーズ・アリソンには思い入れがあるのだと言った。

「『バック・カントリー・スイート』、あれは名盤だ。機会があったら聞いてみるといいぞ」

「機会があったらぜひ聞いてみます。先生は、モンクっていう喫茶店は知ってますか？」

「おお、モンクか。あそこはいい店だよな。しばらく行っていないが」  
懐かしそうに目を細めた。

「私、アルバイトしてるんです。よかったらコーヒーを飲みに来てください。夕方の五時から閉店までお店にいます。モーズ・アリソンは流せないけれど、先生のリクエストするモンクを流します」

そう言うと、葉太郎は、

「そのうち顔を出してみるな」

そう言って、煙草に火をつけた。

その日をきっかけに、私はしばしば葉太郎の研究室を訪れるようになった。勉強に関する質問がなくても、コーヒーを飲みに行ったり（葉太郎は、コーヒーメーカー淹れたコーヒーが残っていると学生に振る舞った）、葉太郎の話聞きに行くだけのこともあった。大学の先生たちのなかには、アポイントを取らずに研究室を訪れる学生を門前払いしたり、アポイントを取ったとしても質問以外の用事で研究室に来られることを嫌がる人もいて、そういう先生の方が多数派だった。そんななか、葉太郎はドアを開け放ち、いつでも学生を歓迎した。開け放たれたドアの向こうには葉太郎の事務机があって、葉太郎はたいい机の前の椅子に深く座って本を読むかパソコンのキーボードを叩いていた。廊下を通りすぎる学生たちは、葉太郎の横顔に、「こんにちは」とか「あとで寄っていいですか？」と声をかけた。声をかけられた葉太郎は顔を上げると、「いいぞ。待ってるぞ」と返した。

他者の心を知ることが不可能なのか。私は葉太郎に言われた通り自分の頭で考えた。人がわかりあうことはできないのか。お母さんやお兄ちゃんたち、モミオや晴海。身近な人の顔を思い浮かべて考えた。けれど、考えれば考えるほど人の心を知ることができないように思うのだった。相手の心は見えないし、相手の反応から推し測ったとしてもその推測が正しいか確かめる術がなかった。いくら考えても、人と人とがわかりあうことはできない、そんな悲観的な結論しか導き出されなかった。

葉太郎の研究室を訪れるようになってから、今まで学食や図書館で過ごしていた空き時間や昼休みを哲学資料室で過ごすようになった。哲学資料室は葉太郎の研究室の斜向かいにあって、歴代の卒業生たちはまるでこの部屋に自分の痕跡を残すかのようににかしらの品を置いて卒業していった。太宰治全集。自作の漫画が綴られたファイル。くたくたになったリクライニングソファ。布製の三人がけのソファ。電子レンジ。コーヒーマシン。小さな冷蔵庫。けっこう立派なCDコンポ。アコースティックギター。額に入った油彩画。そうした卒業生の置き土産の他に、備品の長机が二脚と折りたたまれたパイプ椅子が十脚ほどあったけれど、資料室にはまだ余裕があって広々としていた。

空き時間になると主に男子学生たちがこの部屋に集まった。哲学や音楽の話をする学生



がいて、窓際で煙草を吸う学生がいた。コーヒーを淹れて競馬新聞を広げる学生がいて、ソファに横たわり眠りに落ちる学生がいた。持参したCDを流す学生もいたし、ギターを鳴らす学生もいた。お昼になると、生協広場で売られているお弁当を買ってきて、みんなそれぞれの場所にパイプ椅子を広げて食べた。週に二度、火曜日と木曜日に読書会が開かれた。哲学部の学生だけでなく、理学部や医学部など、他学部の学生も参加していた。分析哲学や科学哲学を扱った読書会の議論は白熱していて、けれど、聞こえてくる議論は私にとってまるで異国の言語のようだった。葉太郎もときおり訪れては読書会の議論に混じったり、ひとしきりギターを弾いて戻っていった。

キャンパスのイチョウの黄色が鮮やかに色づいた週末の土曜日、夕方六時のことだった。お客さんは『ウォーリーを探せ』のウォーリーのようなひよろりとした男の人がひとりきりだった。ウォーリーのように丸い眼鏡をかけて、細身のジーンズを履いてボーダーのシャツを着ていた（赤と白ではなくて青と黒のボーダーだった）。ウォーリーは長い脚をぐるりと絡ませるように脚を組んでノートパソコンを叩いていた。来店したのは、小笠原さんのいる時間帯だったから、かれこれ二時間近くはいることになる。パソコンのキーボードを叩いては休み、コーヒーを飲んで物思いにふけり、再びパソコンに戻る。というのを繰り返している。私はカウンターに立って食器を拭きながら、ときおりウォーリーを眺めた。

ドアが開く音がした。

「いらっしやいませ」

振り向くと、葉太郎が立っていた。手ぶらで、コットンのシャツとチノパンにカジュアルな深緑色のジャケットを羽織っていた。

「来てくれたんですか？」

「おう。お前、本当にここでバイトしてたんだな」

「嘘ついても仕方ないじゃないですか」

「哲学などやっている、なににごとも懐疑的になるのである。というのは冗談で、ケーキセットをフレンチで頼む」

「かしこまりました」

約束通り、葉太郎のリクエストするモンクを流すことにした。どのアルバムにするか聞くと、「ソロ・モンク」と答えた。

「王道ですね」

「そう。王道から攻めるのだ」

葉太郎はにっこりと笑った。

レコードを入れ替える間のほんのわずかな時間、店内は無音となったけれど、ウォーリーは気にする様子もなく自分の世界に没入していた。レコードのざらざらという音に続いてモシクの軽快なピアノが店内に流れ出した。

「やっぱりモシクも良いな」

葉太郎は満足そうに言う、ポケットから煙草を出して火をつけた。煙草はショートホープで、マッチではなくジッポだった。

葉太郎が呼び水となったのか、そのあと立て続けにお客さんがやってきて、モシクとしては珍しくほとんどの席が埋まった。お客さんは途切れることなく訪れて、葉太郎はカウンターの端っこで持ってきた文庫本を広げていたけれど、私が忙しそうにしていると「また来るな」と声をかけて帰っていった。

その後も、葉太郎は週末の夕方になるとモシクに顔を出した。濱本さんと会ったらふたりはどんな会話をするんだろうと想像するのは楽しかったけれど、濱本さんは土日に訪れることはなかったし、葉太郎が平日の夜に訪れることもなく、ふたりが顔を合わせることはなかった。

窓の向こうに見える山の稜線がくっきりと際立ち、空が高い。冬の始まりだ。空気が澄むこれからの季節は、山並みや夜空の星が一年の間で最も綺麗に見える季節でもある。

葉太郎は口元にかざした両手に息をかけながらお店に入ってきた。

「お前、ここは長いのか？」

コーヒーとケーキをカウンターに置いてみると、葉太郎が聞いた。

「この秋で二年半です」

お盆を脇に挟んで葉太郎の脇に立ったまま答えると、

「ってことは、受験の時期もここで働いていたのか？」

葉太郎は驚いたように私を見た。

「はい。一浪したのだけど、ここでお世話になりながら勉強していました」

「お前、苦学生なのか？」

「苦学生じゃないですけど、うち、変わっているんです。いろいろと」

私は話せる範囲で長坂の話をした。やみ人や牢やぶりの話を葉太郎は興味深そうに聞いた。

「東京出身の俺には、想像も及ばない世界だな。それにしても、面白い幼少期を過ごしたな」

「面白いだけだったらよかったですけど、けっこう周りで死んじゃう人がいて、自殺の人はいなかったけど、ほとんどが事故で突然の別れだったから、死ぬってなんだろうなあとかそういうことはぼんやりと考えていました。哲学に興味を持ったのも、人の死がきっかけのようなものなんです」

葉太郎と話していると、長坂での出来事と距離を置くことができた。お母さんのことや悠々爺やモミオの話はしなかったけれど、それでも葉太郎が人懐こい声で相槌を打ってくれるだけで、話を聞いてくれるだけで、心が軽くなっていくようだった。

週末になると心がふわふわと浮き上がった。それはおそらく葉太郎への恋の始まりだった。

その年のクリスマス。大学は冬休みに入っていたものの、家にいてもすることのない私は哲学資料室にいた。リクライニングソファに寝転がり、イヤホンで音楽を聴きながらポール・オースターを読んでいた。十二時十分に大学のチャイムが鳴ったのを聞いて（休みの日もチャイムが鳴ると初めて知った）、大学前のコンビニへお昼を買いに行こうと廊下に出ると、研究室から出てきた葉太郎と鉢合わせた。

「なんだ。お前、いたのか？」

「はい。メリークリスマスです」

「おう。そうだな。今日はクリスマスだな。お前、昼食食べたか？」

「これから買いに出ようと思っていたところです」

「そしたら、一緒に食べるか？ ご馳走するぞ？」

「いいんですか？」

「おう。街のイタリアンでクリスマスランチだ」

「学生に見られたらまずいんじゃないですか？」

「お前、意外と硬いんだな。そりゃ、学生のアパートに入るのを見られたらまずいだろうが、街を歩いたり食事するくらいはいいことないだろう。それともあれか。俺と食事は嫌か？」

葉太郎が言うとお前にたいしたことじゃないように思えて、ただ食事をするだけなのに恋愛や性に結びつけて考えた自分の自意識がなんだか恥ずかしくなった。

「行こうかな」

「よし。支度してこい」

互いに準備を済ませ、一緒に大学を出た。

冬休みの間、元日を除いて毎日葉太郎と顔を合わせた。葉太郎は奥さんと娘さんが帰省していてひとりきりだったし、私もお母さんとお兄ちゃんのいる長坂へ帰る気にはなれなくてアパートで年を越した。大学へ行くと葉太郎がいて、しばらくそれぞれの時間をそれぞれ部屋で過ごし、お昼過ぎになると一緒に大学を出て街や近場に出かけた。大学から歩いて十五分ほどの神社に初詣へ出かけた、街の本屋へ行った。老舗の喫茶店で名物のパフェを食べて（それぞれの分を頼んで、ブン太とケメ子のように分け合ったりはしなかった）、大学から電車で三十分ほどの湖に越冬中の白鳥たちを見にいった。

葉太郎と一緒に過ごしているうちに、葉太郎への気持ち次第に膨らんでいった。それは、未だかつて感じたことのない、安心感と高揚感の同居した不思議な感覚だった。安心感だけだったらモミオにも抱いたことはあったけれど、それに加え、葉太郎といるとドキドキと胸が高鳴った。その高鳴りは、葉太郎に触れたいという肉体的な欲望と、葉太郎から触れられたいというやはり肉体的な願望へと変化していった。

私は少しずつ、着実に、葉太郎へと恋に落ちていった。

その日、センター試験の試験監督を終えた葉太郎がモンクを訪れた。夜の八時。葉太郎としてはかなり遅い時間だった。前日の夜から降り続いた雪で、街の交通はほとんど麻痺していた。試験時間も繰り下げられたのだと葉太郎が教えてくれた。雪は夕方には止んだけれど、街は車道と歩道の区別がつかないくらい雪に覆われていた。歩道は人がひとり通れるくらい幅しか雪が掻かれていなくて、すれ違うにはどちらかがどっさり積もった新雪に足を踏み入れなければならなかった。歩くのも大変だったけれど、車道はもつと大変そうで、車で移動するよりも歩く方が早いのではないかというくらい道は混んでいた。車間距離を取った車の列が、車のタイヤでできた轍から外れないようにのろろと進んでいた。

「こんな悪天候のなか、よく来てくれましたね」

「お前こそ、この雪のなかバイトを休まないとは殊勝なことだ。客だって来ないだろう」  
葉太郎の言う通り、今日は開店休業状態で、夕方にお店に来たもののお客さんは葉太郎が初めてだった。

「お前。あまり暗くなると大変だから、マスターに電話して今日は早く帰してもらうのは駄目なのか？」

それもそうだと小笠原さんに電話をしてお店の状況を話すと、小笠原さんは気遣いが出来なくて申し訳ないと謝り、お店を閉めて帰宅して良いと言った。

「そしたら、帰るぞ」

「え？」

「送ってくぞ。さあ。支度するのだ」

葉太郎は、私をアパートまで送ってくれた。タクシーを拾おうとしたけれどどの会社も出払っていて捕まらず、結局私たちは歩いて帰った。暗い道だった。街灯はない。私と葉太郎はどちらからともなく手をつないでいた。会話はなくて、足元に集中していた。

葉太郎には奥さんと二人の娘さんがいた。葉太郎は家族について多くを語らなかった。いま、葉太郎はここにいて、ということは奥さんと娘さんたちは葉太郎のいない家にいるということで、それは一体どういうことなのだろう。

「仲、悪いんですか？」

「気づくと聞いていた。」

「ん？ なんの話だ？」

「奥さんと娘さんたちとの仲、良くないんですか？ ほら、今、藤澤先生はここに居るから」  
「娘は二人とも県外の大学に行ってるから仲が良いも悪いもないが、まあ、悪くはなかったぞ。小さな頃は海に行ったり遊園地に連れて行ったりもしたな。妻とは、まあ、それぞれの道を歩んでいるのだ。足元、気をつけろよ。凍り始めて滑るぞ」

葉太郎はそう言って黙った。私も、それ以上は聞かなかった。

その日、葉太郎はアパートへ寄って行った。私は直接好きと伝えていないけれど、葉太郎は私の気持ちにきつと気づいていた。そしておそらく、葉太郎も私に好意を抱いていた。もしかしたら、今夜、セックスをするかもしれないと思った。そのつもりで、葉太郎は来たのかもしれない。そう思った。私の初めての相手は葉太郎なのだと思手信じた。葉太郎に恋をしてから、下着は常に上下揃いのものを身に付けるようになって、むだ毛の処理もこまめにするようになった。私は、準備が整っていた。

コンビニに寄って買った缶ビールを飲んでみると、葉太郎が私を抱き寄せた。

「いよいよ、するんだ。」

そう思うとからだが硬くなっていった。やはり少し怖かった。

葉太郎は私を抱き寄せたまま、なにもしなかった。なにもしないまま、私からからだを離れた。した。

葉太郎はしなかった。正確には、しないのではなく、できなかった。

「俺のは勃たないんだ。すまない」

葉太郎は、申し訳なさそうに言った。

どこかでほっとした自分がいた。葉太郎のことは好きだったけれど、性行為をすることを想像すると胃のあたりに不快感を覚えた。悠々爺の匂いが蘇り、お母さんの声が耳の奥で鳴った。悠々爺のことははるか昔のことだったし、母親の性行為を見てしまった子供など世の中にはたくさんいるはずだ。そうわかっているのに、それらのことに依然として囚われていた。そんな自分が情けなかった。けれど、自分でもどうしたらいいのかわからないくらいにそれらは私のなかに居座り、私の感情を動かし行動を制限した。

「やはり勃たない男には幻滅するよな。ごめん」

葉太郎は、黙っている私が落ち込んでると思ったようだ。とても申し訳なさそうにそう言った。見た目の優しさとは裏腹に、葉太郎はきっと傷ついている。そう思った。

「幻滅、しません。私は藤澤先生とできなくても、藤澤先生が好きです。それに、私、たぶんセックスが好きじゃないと思います。したことないからわからないけど、好きじゃないと思います」

「お前、したことないのか？」

私の告白に少し驚いた様子を見せた葉太郎は、自分自身もなにか決心を固めるように、たくましい両腕を組んでしばらく黙っていた。

飲み干したビールの缶を潰して次の缶を開けた。葉太郎も、組んでいた腕をほどいてビールのプルタブを開けた。

封を開けられたビールに口をつけないまま、葉太郎は口を開いた。

「お前、変態についてどう思う？」

酔っている様子はなく、まっすぐな瞳が私を捉えていた。

「変態って、どんな？」

尋ねると、

「目隠しをして手足を縛ってビデオに映したり、トイレに入っているとところを眺めたり。そんなところだ」

「それって、SMってことですか？」

「そうだ。ソフトなSMだな」

「なんでそんなこと聞くんですか？」

「俺の性癖なのだ」

「え？」

「痛みを与えたいわけじゃないのだ。ただ、恥ずかしがる姿を見ると興奮するのだ」

葉太郎のつぶらな瞳と言葉の響きがアンバランスで、思わず笑った。

「私としたいってことですか？」

「まあ、そういうことだ。お前の恥ずかしがる顔が見たい」

性行為はもちろんだけれど、SMという行為はしたことがなかった。映画で観たこともなかった。SMというのは、私にとって完全なる未知の世界だった。けれど、葉太郎となら大丈夫と思った。葉太郎に受け容れられたい、そういう思いが強かった。葉太郎の必要とする人間になれることが嬉しかった。葉太郎の目をまっすぐに見つめて答えた。

「いいですよ」

葉太郎は、土曜日か日曜日の昼間、部屋を訪れるようになった。私のアパートは大学からバスと徒歩で三十分ほどの住宅街にあった。なんの特徴もないごく普通の住宅街で、学生がわざわざこの場所にアパートを借りることは考えにくかった。仮に学生がいるとしたら、自宅から通う学生だけれど、そうたくさんいるようにも思えなかった。そのせいか、葉太郎は堂々と私の部屋を訪れた。

葉太郎は、手提げの黒い鞆を持ってきた。鞆のなかには、ビニールの紐と目隠しとビデオカメラが入っていた。「SM三点セット」なのだと言葉太郎は嬉しそうに教えた。

「麻の縄の方が雰囲気が出るが、あれは縛るのも解くのも大変なのだ。ゆえに、麻の縄を模したビニールの紐を使うのだ」

同じビニール素材の紐でも、ぴらぴらとした幅広のものは使わなかった。理由を聞くと、麻の縄のように編み込まれていないと雰囲気が出ないからだと言った。

ビニール紐と目隠しとビデオ。そこに、シェービングフォームとカミソリが追加されると「SM 五点セット」になった。なにに使うのか尋ねると、「毛を剃るのだ」と答えた。むだ毛の処理はちゃんとしているから剃るような毛はないかもしれないと伝えると、葉太郎は意味深な笑みを浮かべて、

「大丈夫。あるのだよ」

と言った。

葉太郎の行為へのこだわりは強かった。「脱いで」という要求に素直に応じてスルスルと服を脱がれると萎えてしまうし、縛られるときも縛るのに支障をきたさない範囲で抵抗してほしいと言った。裸になって目隠しされてビデオで撮影されている間は、ずっと恥ずかし

がってほしいと望んだ。

葉太郎の要求を叶えるのは容易だった。というのも、本当に恥ずかしかったのだ。男の人の前で裸になるのは初めてだったし、目隠しをされるとからだに敏感になるのか、紐で縛りあげる葉太郎の手が手首や足に触れるだけぞくりとした。からだのなかに熱が灯り、その熱は血を沸かせじわりじわりと私のからだを熱くしていった。目隠しをして両手首を頭上に縛り上げてベッドに横たえた私のからだを、葉太郎は裏返したり横たわらせたりした。からだの位置を変えるとき以外、葉太郎は私のからだに触れなかった。なのに、私は暗い闇の向こうに葉太郎の気配を感じた。葉太郎は私の中から目を眺めている。唇、耳、髪の毛、胸、太もも、お尻、足先。その想像は私の羞恥をより高めた。あまりの恥ずかしさに、胸を隠すようにからだを伏せると、

「どうした？ そっちを向いたらお尻が丸見えだぞ。カメラにもしっかり映っている」

葉太郎は素朴な声で言う。葉太郎の視線をお尻に感じる。見えなくても、感じる。お尻を隠すように横を向く。すると、葉太郎は言う。

「紗南子の豊かな陰毛が露わになっているよ。しつとりと濡れているが、感じているのか」  
どう動いても、全裸で縛られている私は、私のすべてを隠すことはできなかった。

葉太郎はしばらく私を観察すると、カメラを床かテーブルの上に置く。カタリという硬い音が部屋に響く。葉太郎は、私を仰向けにして両膝を立てせる。そして、両膝に手を当て優しく開いていく。葉太郎の分厚い手で膝に触られた途端、下腹部がぎゅっと収縮し、開かれていく脚の奥から流したことの液体が染み出るようににじんできく。液体は、私の尻へと伝い落ちていく。ほとぼしるからだの熱が下腹部へと集まっていく。熱は下腹部のさらに下の一点へと降りていく。きゅうきゅうと下腹部を締め付けるように移動していく。からだ中の熱がそこに集まった瞬間、脚の奥から液体がほとぼしる。まるで排泄するような勢いで流れ出た熱い液体が、尻の下のシーツをぐっしりと濡らす。

別の日、ベランダに物干し竿を見つけた葉太郎は、カーテンレールと本棚との間に物干し竿を渡して固定して両手を縛った私を吊るした。吊るされると言っても本当に吊るしたら物干しはその重さに耐えられないし、そもそも吊るすには高さが足りなかった。まっすぐに立つとただバンザイをしているようにしか見えないと葉太郎は残念そうに言った。私は少し考えてポーズを作った。膝と肘を折り、からだをくねらせて頭を垂れた。葉太郎はその姿勢が気に入ったようで、たびたび私を竿に縛るようになった。縛った私を様々な角度からビデオで撮った。正直なところ、私はこの物干しプレイに興奮を覚えなかった。けれど、葉太



郎の喜ぶ声に満たされた気持ちになった。葉太郎は、恥じらう私の反応のひとつ一つに、無邪気に喜んだ。

葉太郎の行為を受け入れられた理由のひとつに、葉太郎の匂いがある。葉太郎はどんなに汗をかいても（夏の暑い日でも）、匂いがしなかった。汗臭くなかったし、年齢により生じる匂いもしなかった。それは性についても同じだった。悠々爺のあの匂いが、葉太郎からはまったくしなかった。葉太郎のペニスが勃起しないという生理的事実もおそらく安心感を与えたのだけれど、匂いの要素も大きかったと思う。私は、葉太郎と肉体的につながることなくSMという作られた行為にのめり込んでいった。

日曜日の昼下がりであった。目隠しをされて縛られていると、電話が鳴った。葉太郎は、回していたビデオを止めたようだった。小さな電子音が鳴った。

「ちょっと待ってな。今、紐を解くから」

「大丈夫。かけてくるのは、お母さんかお兄ちゃんだから。後でかけ直せばいいよ」

そう答えている先に、留守番電話に切り替わり、ピーっという発信音に続いてお母さんの声が聞こえてきた。

「いるんでしょ！ 出なさいよ！ ちっとも連絡寄越さないで、なにしてんのよ！」

お母さんは、ひどく興奮しているようだった。私は恥ずかしくてなにも言えず、ただ下を向いていた。目隠しをされていたから葉太郎がどんな顔をしていたかわからない。

留守電の録音時間が限度に達してぶつりと切れると、再び電話が鳴ってお母さんの声が留守電に記録された。お母さんは気持ちの高ぶりが抑えられないように、留守電に向けて演説をぶっていた。全部で四件の留守電に録音を終わるとようやく静けさが訪れた。

葉太郎は私の手を縛っていた紐を解いて、目隠しを外してくれた。

「ごめんなさい。変なところ見せちゃったね」

謝ると、葉太郎は、

「よかったら、話、聞けど」

私を抱き寄せた。

私たちはベッドで横になり、葉太郎の腕に頭をのせて天井を向いた。

悠々爺のこと、お母さんのこと、モミオのこと、お兄ちゃんたちのこと。私は、自分の身に起きた今までのことを葉太郎に話した。自分が弱いから、自分に非があるから、そうしたことになってしまったと思っっていること。もっと強くなりたいこと。強くなって、なんでも

受け容れられる人間になりたいこと。あの頃から自分がまったく成長していないように感じていること。そうしたことを葉太郎に話した。

葉太郎は私の話をじつと聞いてくれた。話を終えると、葉太郎は父親の話をした。代々続く眼科医の父は、葉太郎に対して厳しい人だった。兄には期待をかける一方で、次男である葉太郎のことは存在しない者のように扱った。跡取りの兄にはお金を惜しまず、葉太郎には洋服も参考書も兄のお下がりで済ませた。母親は父親の言いなりだった。葉太郎には妹がいたけれど、妹は祖父母からの愛情を一身に受けて育てられた。葉太郎は居場所がなかった。バンドや演劇に興味を持つ葉太郎を、父親は馬鹿にしたような目で見た。

葉太郎が大学院生の頃に父親は急逝したのだけれど、葉太郎は戻らなかったという。

「あいつは気が違っていったんだ。人間とは思えない奴だった。早く死んでくれてよかったと思っている。俺は、父親を憎んでいたが憎しみをぶつけることは結局しなかった。憎しみをぶつけていたらなにかが変わったなどということは思わないが、それでも、コミュニケーションを絶ったまま死なれるというのはなんとも気分の悪いものだった」

葉太郎は私の頭の下にあった左腕を抜くと、右腕を伸ばして私を抱き寄せた。それから、そっとキスをした。

「お前が初めて研究室を訪れたとき、人と人とは分かり合えるかと俺に聞いたよな。いいか。今からいうことは研究者という立場を離れた、ひとりの人間としての意見だぞ」

葉太郎はそう言うのと、からだを離して私の目をじつと見た。横を向いた葉太郎の顔には影が落ちていて、ぜい肉のない顔の皮は薄いたるみを寄せていた。口元にはほうれい線が現れ、目の下に濃い色の影を滲ませていた。普段は若々しいけれど、間接照明の灯りを受けた葉太郎は、年相応に見えた。

「俺は、他者の心の状態を完全に、誤りなく知ることが大して重要ではないと思っているのだよ。大切なのは、知ろうとする姿勢だと思うのだよ。相手のことを知ろうとするその姿に、意味があるのではないかと思っているのだよ。たとえば、想像すること。仮に、紗南子の体験から紗南子がなにを感じたのか、その感覚を俺は知ることができないとしてもだ、想像することはできるのだ。お前がその体験によってどれほどの傷を負ったのか、どれだけ心が痛んだのか、俺はそれらを想像することを許されているし、可能なのだ。『あなたのためを思って』だの『あなたを助けたいから』だの、自らの想像の結果を人に押し付けるような形で想像力を使うことを俺は好まない。だが、自分のために、自己本位で想像力を使うことはあ

るのだよ。俺はお前をそばに感じたい。想像を通して少しでもお前に近づきたい。お前を救おうなどと大それたことは思わない。ただ、俺はお前の近くにいたいのだ。言葉は不確かなものだが、想像を助けてくれるのはやはり言葉なのだ。だから、お前が話してくれて嬉しかった。お前には辛いことだったかもしれないが、俺は嬉しかったのだよ」

葉太郎は、再び私を抱き寄せると言い聞かせるように言った。

「いいか。すべてをひとりで背負い込もうとするのではないぞ」

葉太郎は、私の知らない葉太郎だった。ひどく真面目で真剣だった。真面目に、真剣に、私を諭すように、心の内を話し続けた。研究者としてではなくひとりの人間としての思いを話し続けた。責任について。悪について。心について。私は裸のまま、葉太郎の体温を感じながら、葉太郎の声を聞いた。葉太郎の声は振動となって、私のからだを伝った。

「話は終わりだ」

葉太郎は明るい調子で言うと、ベッドを抜け出して部屋を出て行った。戻ってきた葉太郎は、お湯を張った桶を持っていた。

「さあ。剃るぞ」

葉太郎は、テレビの前の床に私を座らせ、シェービングクリームの泡を私の股に塗った。ひんやりとした泡に、背中がぶるりと震えた。

フライト

ふたりの関係を周囲の人たちに知られないように、私たちは大学では苗字で呼びあい、葉太郎の研究室を訪れる回数も減らした。葉太郎は休みの日になるとアパートにやってきて、軽くお酒を飲み、話をして、ふたりの行為をして過ごした。

その日は、葉太郎は珍しく事前の連絡なしにやってきた。前日に便秘薬を飲んでいたら、急の来訪に慌てた。葉太郎のいる部屋で便秘を催すのが恥ずかしかったのだ。

予想通り、葉太郎が来てしばらくすると、便意が降りてきた。

「ごめんなさい。ちょっとお手洗い」

そう言って立ち上がると、葉太郎は大きい方かと聞いた。便秘薬を飲んでしまったことを

告げると、葉太郎は、

「見たい」

と言った。

「やだよ。恥ずかしいよ」

そう断つても、葉太郎は、

「恥ずかしいからこそ見たいのだ」

と言いつ張った。

結局、激しい便意に負けて、葉太郎の前でそれをする事になった。視線を感じながらの排便は恥ずかしいものだった。人の視線があれば便意も消えてなくなりそうな気もするのだけれど葉の力は強力で、腸は痛みを感じるくらいに激しく収縮してなかのものをぐんぐんと排出し続けた。出るたびに、ごぼごぼという汚らしい音が鳴った。恥ずかしさに耐えきれなくて、お腹を抱えるように下を向いていた。その姿勢はお尻の様子がよく見えて興奮すると葉太郎は言った。

「おお。出てる。もっと、もっと見せておくれ」

そんな風に興奮する葉太郎の声を頭上に聞いていると、変態というのは寛容なのかもしれないという思いが頭に浮かんだ。一般的な人間だったら気持ち悪がったり嫌いになるようなことなのに、変態はそこに心地よさだったり楽しさを見出して、それを受け容れる。その姿勢がとても寛容だと思った。実際にしたことはないからわからないけれど、たとえば、葉太郎の前でオナラをしてしまったも、そしてそのオナラが耐え難い臭いを発していたとしても、葉太郎は恥じらう私を嫌うことはなかったと思う。

センター試験が終えた翌々週、大学は試験期間に突入した。葉太郎の哲学概論の試験問題は「常識」についての記述問題だった。

ケメ子はこう言った。

「うな重は、こうして右の手前から食べるのよ。常識でしょう？」

ブン太は、首を振って、言い返す。

「いや。僕の家では、うな重は左の端から順に食べていくのが常識だったよ」

葉太郎の作った試験問題を読みながら、なぜかモミオの言葉を思い出した。

台所でお米を研ぐ私の隣で大根の皮をむきながら、モミオは言った。

『僕はやみ人なんていないと思ってるんだ。やみ人と僕たちの間には、なにも違いはない

んだ。同じ人間なんだ。違いがないはずなのに、誰かがやみ人と僕たちを分かつ線を決めて、長坂の人たちはそれに従ってやみ人とそうでない人とを振り分けているだけだと思うんだ。「誰か」と言っただけで、線を引いているのは神様でもひとりの偉い人間でもなくて、社会がそれをしているんだ。もつと言え、社会にいる僕たちひとりひとりが線を引いているんだ。線は時代や地域によって異なるんだ。もしかしたら、時代や地域が違ったら、僕みたいに見える人間がやみ人のように扱われていたかもしれないね。長坂の人たちは、線に対して無自覚なだけなんだよ。線はやみ人だけでなく、男と女、大人と子供、街の人と村の人、など様々なところに引かれている。その全部を意識して生きることがほとんど不可能なことだと思う。だから、長坂の人たちが線に対して無自覚なことは仕方ないのかもしれない。けれど、僕たちはせめて、線の存在を知る必要があると思うんだ』

モミオの語るやみ人は、私がお兄ちゃんたちから聞いたやみ人のイメージを変えた。同じ人間。

その言葉がずっと耳に残っていた。

私は、モミオの言葉を思い浮かべながら、解答用紙を埋めていった。

やみ人も異常も、それ単独では存在しえないと思う。健常者や正常の対としてしか存在しえないもので、社会によって作られるもののひとつにすぎないのではないだろうか。社会の価値観は時代や地域によって異なる。だとしたら、かつての長坂の人たちの常識をいまを生きている私が、私の価値観によって手放しに批判することは、果たしてフェアなことなのか。長坂の人たちは彼らのやり方でやみ人を真剣に守ろうとしていたのかもしれない。長坂の人たちにとっての常識は牢であって祈祷の人だった。かつての長坂の人たちがその常識に基づいた信念のもとで、心からやみ人の快復を願って行動していたことを否定することは難しいと思う。「この社会」を生きている私たちは、内面化された常識から解放されることはあるのだろうか。疑いを持つこと、それは大事なことだと思うけれど、その疑いすら「この社会」を生きている私の頭から生じるものだとしたら、疑いにも限界があるのではないだろうか。「この社会」から独立した正義や悪、常識といったものは、果たして存在するのだろうか。

私は思いつくままに解答用紙に書いた。答えにたどり着く前に終わりのチャイムが鳴り、中途半端なままの提出となった。時間がいくらあっても、きっと私は満足のいく答えにたどり着けなかったと思う。どういうわけか頭がいつも以上に熱くなっていて、葉太郎が何度も繰り返していた、「哲学で大事なことは論証だ。結論を導く過程だ」という言葉をすっかり

忘れていた。

哲学概論の成績は B だった。

「一生懸命書いたんだけどなあ」

そう言うと、

「お前、哲学の試験だったこと、忘れてたろ？」

葉太郎はまるで私の心を見透かしたように言った。

「論理の飛躍がひどかったから哲学の回答としては B だが、熱は伝わってきたぞ。お前、構築主義って知っているか？」

そう言うと、葉太郎は数冊の本を紹介した。

「先人の書いた本にあたってみると、より深い考察ができるはずだ。比哲資料室にどれもあ  
るから、読んでみるといいぞ」

葉太郎は先生の顔をして言った。

春の訪れを感じる暖かな日が続いていた。その日は濱本さんの誕生日だった。トイレから出てきた濱本さんはキャビンアテンダント風の制服を着ていた。こんな風にコスプレのよう  
なことをするのは初めてで、なにかあったのかもしれないと思いながら、あえて普段通りの  
テンションで尋ねた。

「今日のフライトはどちらまで？」

「沖縄よ」

濱本さんは呟くように言った。

「沖縄、いいね。あつたかそう」

用意していたプレゼントの包みを差し出そうとすると、濱本さんがポツリと言った。

「俺、春から沖縄に異動だって」

そう言うと、濱本さんは目をつむった。行き場を失ったプレゼントを、私はそっとカウン  
ターに置いた。濱本さんは目をつむったまま黙っていた。私も同じように黙っていた。店内  
には、私たち以外誰もいなかった。

ふたりの間にぽっかりと空いた沈黙は長くて、いつものような居心地の良い沈黙ではな  
かった。沈黙の破り方を間違えると、なにかが壊れてしまいそうな繊細な沈黙だった。私は  
濱本さんの言葉を待った。

コーヒーとケーキを濱本さんの前に出し、食器を磨き、本を読んだ。なるべくレコードの

音以外の音を立てないようにして、濱本さんが話し出すのを待った。

「あのね」

濱本さんの声がした。さつきまで窓の外に見えていた月が雲に隠れたのか、空は暗くなっていた。濱本さんのくるりとカーブを描く長い睫毛の奥の目が、少し潤んで見えた。

「むかし知り合いに、フランスに留学したくてお金を貯めてるっていう女の子がいたんだけど、それ、嘘だったんよ。男の人からお金をもらうための、パパを作るための、嘘だったんよ。『わたし、ホントにフランス行ってきたよ。観光だけだね』って言ってたんよ。家が貧乏で弟の学費作らないとならんのもよって女の子もいたんよ。けど、それも嘘だったんよ。全部、ブランド品とか車に変わってしまったんよ。ちなみに、その子は一人っ子だったんよね」

天井の薄暗い間接照明を見つめた濱本さんの瞳に光が宿って、泣いているように見えた。濱本さんは、天井を見つめたまま話を続けた。

「俺、女の人、信じてないんよ。信じられんよ。高校の頃のこと関係あるんかもしれないけど、小さな頃からそうなんよ。奥さんのことも信じてないからね。俺のいないとこでなにしてるかわからんし。娘はまだ小さいからギリギリ信じられてるけど、それでも、嘘つくんよ。あんなあどけない顔して、嘘つくんよ。お友達んちからリカちゃん人形持ってきてしまっつて、それって大人がやったら盗みだね。だから、注意したんよ。人のもの黙って取ったらいけんよ、って。そしたら、娘は目に大きな涙ためて言うんよ。『マリがとったんじゃないよ。リカちゃんがついてきてん。マリと遊びたいからって、リカちゃんが勝手についてきたんよ』って。きつと、俺、娘のこともそのうち信じらなくなってしまうんだなあって思ったら、虚しくなったんよ。俺、女の人信じられんけど、それは誰にも言わんのよ。『お前のこと信じてない』って女の人に言わんのよ。伝えるのもあほらしいくらい、信じる事ができんのよ」

私も黙って天井を見つめた。天井の間接照明の丸いへこみに、綿ぼこりがくっついていた。

「けどね、紗南子ちゃんは別なんよ。理由とかよくわからんけど、紗南子ちゃんは会ったときから、この子は大丈夫だって思ったんよ。なにが大丈夫なんかはよくわからないのだけど、大丈夫って思ったんよ。俺、人のこと信じられんから、紗南子ちゃんのことを信じているのとはちょっと違うんだけど、紗南子ちゃんを見てると勇気が湧くんよ。紗南子ちゃん、人のこと信じようとするよね？　なるべく疑わないように、信じようとするよね？　まっすぐであろうとするよね？　そういう紗南子ちゃんを見てるとなんかホッとするんよ。」

ああ、こういう人もいるんだ、って。大丈夫なんだ、って思うんよ。俺にはできんことだけど、こんな風に人を信じれるのっていいなって思って、こんな風にまっすぐに人を信じれる人がいるうちは安泰だって思うんよ。紗南子ちゃんのそんなところが、俺は好きよ」

そう言うと、濱本さんは右手を差し出した。カウンター越しに手を差し出すと、濱本さんはその手を握った。濱本さんの手は、男の人の手なのにとっても華奢で頼りなくて、繊細で冷たかった。

そのあと、濱本さんはいつもの濱本さんに戻った。最近観た映画の話や最近知った音楽のをした。会社の女の子にまた告白されたと教えてくれて、もちろん断ったけどな、と笑って言った。

「ねえ。沖縄に異動って伝えるために、わざわざその制服買ったの？」

「そうよ」

「けど、私がもし、別の反応してたら？」

「言われてみればそうよね。すごい賭けだったね」

そう言うと濱本さんは笑って、私もつられて笑った。濱本さんの朗らかな笑い声を聞きながら、こんな風に笑いあうことがなくなるのは寂しいことだと思った。

トイレへ行ってスーツに着替えて戻って来た濱本さんはお会計をすませると、

「プレゼント、ありがとね。元気でね、紗南子ちゃん。また会えたらいいね」

そう言って去っていった。

濱本さんに恋をしていたわけじゃないのに、心が痛かった。すっかり熟れた柿についた傷口から柔らかい中身がじくじくと流れ出るような、そんな痛みだった。葉太郎がいるのに、こんな風を感じる自分は気が多いんじゃないかと思った。けれど、寂しいものはやはり寂しいのだった。

濱本さんが去っていった四日後の夜。七時を回ったあたりだった。小笠原さんがやってきた。連絡事項があるときは夕方の引継ぎのときに済ませるから、こんな遅くにお店に顔を合わせるの珍しいことだった。

小笠原さんはカウンターに腰掛けると、

「お客さん、入ってませんねえ。昼間もこんな感じなんですよ」

淡々と言った。

冷蔵庫のチーズケーキは大量に残っていた。



「コーヒー淹れましょうか？」

私が聞くと、

「お願いします。ケーキも食べましょうか。辻さんもよければ休んでください」

ふたり分のケーキセットを用意して、小笠原さんの隣に腰掛けた。

小笠原さんは私の淹れたフレンチを飲むと、首をゆつくりと大きく縦に振った。ケーキを口に運ぶと、今度は、ゆつくりと首を横に振った。

それから私の方を見て、天気の話でも始まるような軽い感じで話し出した。

「この間、お客様からこのフレンチはフレンチじゃないと言われてしまいました。こんな薄いコーヒーはフレンチじゃない、とね。私の味覚は狂ってきってしまったのかもしれない。ケーキだって緩くてお出しできなくて処分したり、固まりすぎてしまったり、うまく作れなくなってきたてしまいました。歳には抗えませんか」

小笠原さんは寂しそうに笑った。オレンジの灯りに照らされた銀髪が、琥珀色に染まっていた。

「春にはモンクを閉めようと思います。引退です。辻さんには申し訳ありませんが、桜が咲くまでのあと一ヶ月、モンクをお願いします」

環境がめまぐるしく変化していった。

## もつれ

濱本さんがいなくなり、モンクがなくなり、桜の蕾がほころび出した。私は大学二年になった。

ゴールデンウィーク初日、葉太郎と隣町の高原へ菜の花を見に行ったその夜、夢を見た。夢のなかで、葉太郎は脳梗塞で倒れた。意識は取り戻したものの半身が不随になり、車椅子となった。夢のなかの私はいつも葉太郎のそばにいて、葉太郎の手となり足となった。バリアフリーの家を借りて一緒に暮らした。風呂、トイレ、着替えなど、葉太郎はすべてを私に委ねた。大学のキャンパスを車椅子を押して歩く私と葉太郎は、もう誰の目も気にする必要がなかった。私は、葉太郎と一体となれたのだった。私の心はこれ以上ない幸せで満たされていた。

人生、なにが起こるかかわからない。

よく耳にする言葉だ。確かにその通りかもしれない。私は明日、交通事故で死ぬかもしれないし、野良猫写真家としてデビューするかもしれない。そういう意味で、「人生はなにが起こるかかわからない」というのは正しい。

一方で、「人生、なにが起こらないかわかる」というのも、たぶん正しい。二十年と少しか生きていけないけれど、遭遇しやすい出来事や知り合いになるタイプの人間、自分の性格や能力がだいたいわかってきた。そうしたいいくつかの要素からなる自分を客観的に眺めると、今後生きていてもこれは起こらないだろうなということの想像がつく。

それは自分の限界を自分で決めているだけだよ。自分でそう思った瞬間に、あらゆる可能性が閉ざされてしまうんだよ。

もうひとりの私がそう言う、一方の私はさらに言う。

私が決めているんじゃない、すでに決まっていることなんだよ。

夢で見たように、葉太郎が事故に遭うことは起こりうる。その結果、車椅子生活を余儀なくされる可能性もある。けれどそのとき、私が葉太郎の隣で一生を添い遂げるということは起こらない。私と葉太郎がこの先もずっと付き合い続ける可能性はないのだ。

葉太郎への感情が狂いだしたのは、この頃のことだ。葉太郎への気持ちが強くなるほど葉太郎を独占したい気持ちが増していった。他の女子学生と話しているのを見るだけで嫉妬の感情が沸き起こり、葉太郎と煙草を吸う男子学生すら妬ましく思った。葉太郎がアパートから帰ってしまうのが寂しくて、帰ってほしくないと言った。いつも会っていたくて、平日の夕方にも来てほしいと頼み、来てくれないと落ち込んだ。

「お前、最近おかしいぞ。どうした？」

私の異変に気付いたのか、葉太郎は会うたびに聞いてきた。

葉太郎が好きすぎて苦しい。

そう伝えれば良かったのかもしれない。けれど、重いと思われるのが怖くて言えなかった。葉太郎を独り占めしたい欲求に歯止めが効かなくて、ずっと一緒にいたくて、離れたくなかった。いつも常に葉太郎が恋しくて、絶え間なく葉太郎の声が聞きたくて、とめどなく葉太郎の体温を感じていたかった。ひとりでいることに慣れていたはずなのに、恋に落ちた私はすっかり弱くなったようだった。

こうなる前の春休み、晴海と会った。東京の大学で数学を学ぶ晴海から電話があり、帰省

のついでにサナコの街によるから会おうよ、と声をかけられた。三日後、私たちは駅前の喫茶店にいた。およそ二年振りの再会だった。

「彼氏ができたよ。妻子持ち」

そう話すと、

「え？ まさかの事態なんだけど。サナコが不倫とか、超おどろく」

晴海はスプーンを握ったまま動きを止めた。

「そんなに意外？」

「うん。だって、ちよつと前まで『ガープの世界』を受け付けない女の子だったんだよ、サナコは」

晴海は、思い出したようにスプーンをパフェに伸ばしながら言った。言われるまですっかり忘れていたけれど、その通りだった。

「そう考えると、私も変わったんだね」

「え？ 今さら？ 付き合って半年も経つのに？ サナコ、抜けてる」

「そう？ けど、人って変わるものなんだね」

「当たり前じゃん、サナコ。細胞の話とか、有名じゃん？ 皮膚とか筋肉とかは一ヶ月でまるまる入れ替わっちゃうし、血は四ヶ月もすれば別物になってるし、骨だって二年半で新しいの変わるんだよ？ ちよつと前までの自分と今の自分は別人、ってくらい変わり身が早いって話」

そう言うと、晴海はスプーンに乗ったパフェを口に運んだ。

「そうなの？ そう考えると心って変化の速度が遅いんだね。っていうか、晴海、変わり身の使い方、間違ってるよ」

笑いながら指摘すると、

「いいじゃん、そんな細かいこと。そういうところは全然変わってないんだよな、サナコ」

晴海も笑った。

晴海は葉太郎との馴れ初めを細かく聞いてきて、私はそれに答えた。恋の話が楽しいことを、このとき初めて知った。高校の教室や大学の学食で楽しそうに恋の話をしてた女の子たちの気持ちがわかったような気がした。一方で、晴海に話さないこともあった。葉太郎が勃たないことや、それゆえ私は未だに処女であること、SMと呼ばれる行為を楽しんでいることだ。話してしまうと葉太郎との親密さが損なわれてしまう気がして、どうしても話す気になれなかった。

「で、セックスはどうなの？ 相性とか」

瞳を輝かせる晴海に、

「そこは、まあ、ね」

曖昧に笑うと、

「出た。サナコの秘密主義。まあ、話したくないならいいけどさ。そしたら、私の話も聞いてもらおうかな」

晴海は、最近付き合い出したという、テレビ局の取締役の話 시작했다。晴海もまた、不倫をしていた。しかも六十近いおじさんと。

出会いは、銀座の高級クラブだった。晴海はそこで働いていて、お客さんとして訪れた取締役の目に留まった。晴海目当てに連日のように来店するおじさんを、羽振りの良いお客さん程度にしか見ていなかったものの、話しをするうちにおじさんの博識さとユーモアのセンスに惹かれていった。気づくと、晴海はおじさんを受け入れていた。

「その間、約二週間。勢いって、怖いよね」

簡潔に馴れ初めを話した晴海は、いたずらめいた瞳を向けて聞いた。

「ところで、サナコ。ブランドへの近道、知ってる？」

「ブランド？」

「そう。ヴィトンとはプラダとか」

「なんだろう？ 優しさ？」

「残念！ 正解は、漬物」

「漬物？ おばあちゃんが漬ける、たくあんとか野沢菜とかの、あの漬物？」

「そう。その漬物。私、発見しちゃったんだ。漬物っていうのは手料理の代表ってことで、要するに胃袋をつかむってことが言いたいだけなんだけどね」

「漬物って言われるとインパクトがあるね」

「でしょ？ 不倫相手が私の手料理にハマっちゃったんだけど、きっかけは漬物だったんだ。茄子のぬか漬け。『ハルはセックスもいいけど、この茄子は最高だ』って。それから、私の仕事が休みの日はほとんどうちに食べに来るんだよね。奥さんは自分の羽振りの良いところに惹かれただけで、全然家庭的じゃないんだって。料理とかしなくて。私とこうして食卓を共にしているときの方が落ち着くんだって。変なの。不倫なのに」

「晴海、料理できたっけ？」

「お店のママさんがけっこう料理してるんだよね。で、レシピとか裏技とか教えてもらっ

て、ぬか床もママさんから分けてもらったものだったんだ。ママさんの影響で料理にはまっただけで、向いてみたい。でね、不倫相手のおじさんが奥さんと離婚するとか言い始めたんだよね」

「え？ 晴海、その人と結婚するの？」

「どうだろうね。お金はあるし頭もいいし話も面白いけど、私、まだ若いし」

晴海は、自分にも言えることなただけど、と前置きしてこう続けた。

「不倫もいいけどさ、若い時期って意外とあっという間に過ぎちゃうんだよね、たぶん。一年経つのおそろしく早いもん。息を吸って吐いたら一年終わってた、つくらない年もあったよ。で、なにが言いたいかっていうと、おじさんもおじさんりのよさがあるけど若い男の子もキープして損はないと思うんだよね。不倫ってほとんど先がないようなもんだし、会いたいときに会えるわけじゃなくてストレスたまるし。だったら二人でも三人でも男の子キープして分散させたい方が気持ちラクだと思うんだよね」

話半分で聞いていたけれど、晴海の助言は正しいのかもしれないと、あとになって思った。その日、晴海は「男の子の落とし方」というのを伝授していった。

「とりあえず、男の子と二人で部屋飲み。これで落ちない男の子はいないから。あ。勃つかは別ね。飲ませ過ぎるとできなくなる子もいるから、その辺はまあ、男の子の具合を見てっで感じて。サナコなら楽勝だよ。まあ、私はしないけどね」

「少し距離を置いて冷静になろう」

例年より早い梅雨入りが宣言された日の週末、部屋に来た葉太郎はビデオカメラを鞆にしまいながら言った。

「なんで？」

「お前、俺に執着し始めたんじゃないか？」

執着なのかはわからなかったけれど、葉太郎への感情が以前のような純粋な恋愛感情とは別のものとなっていたのは事実だった。葉太郎に会えない日は気持ちが沈み、会っていても別れる時間ばかり気になって行為に集中できなかった。私の中心には葉太郎がいて、葉太郎が私のネジを巻いていた。葉太郎がネジを巻いてくれないと私の動きは鈍くなくなり、ゼンマイが切れると動きを止めた。恋心と執着の違いがわからずにいたけれど、私の葉太郎への感情は、恋だとしてもよくない方向に進みつつあることに私自身気づいていた。気づいていたけれど、それを修正する方法を私は知らなかった。葉太郎と会っているときの高揚感と

葉太郎に会えないときの落胆は、私の重くなった心を乱暴に揺さぶった。私の心とからだをつなぐ糸は、激しい揺れに耐えるには頼りないほど細すぎて、いまにもぷつりと切れそうだった。この糸が切れたらいったい私はどうなるんだらう。不安だった。葉太郎はきつと、私のためを思って提案してくれたのだと思う。けれど、私はそれを素直に受け取ることができなかった。葉太郎に会っていたかった。葉太郎と離れたくなかった。ひとりでいると葉太郎のことで頭がいっぱいになって苦しかった。葉太郎のことを考え始めるとなにも手につかなかった。こんな私を葉太郎が好きでいてくれるはずがない。そうわかっていた。

『感情は分散させればいいんだよ』

晴海の言葉が何度も頭で鳴った。感情を分散させれば、きつと葉太郎への執着も無くなる。執着が私をおかしくさせているのだから、執着さえなくなれば葉太郎を困らせるようなことはなくなる。そうしたら、また前のように葉太郎と楽しい時間を過ごせる。葉太郎にこれ以上迷惑をかけないために男の子と寝よう。そう決めた。

というのは嘘だ。

本当は、男の子と寝ることで葉太郎の気を引きたかった。私が他の男の子と寝ていると知れば、葉太郎はきつと私のもとへ戻ってくれる。そう思った。葉太郎は私と同じような嫉妬の感情を抱き、私への感情を思い出してくれる。そして再び戻ってくる。そう信じた。

晴海の言った通り、男の子と寝るのは簡単だった。

初めての男の子は、

「サナコさん、処女だったんですね。てつきり……」

と驚いていたけれど、

「そっか。初めてだったんですね。俺が初めてか……」

感慨深そうに呟いた。

性行為は精神的にも肉体的にも苦痛でしかなかった。男の子特有の香りはあの匂いとあの声呼び起こしたし、男の子を受け入れるには私のからだは乾きすぎていた。けれど、私は性行為をやめなかった。

世の中には、好きという感情と性行為とを切り離せる男の子が多かった。好奇心だけで勃起する男の子がたくさんいた。同じ哲学科の男の子たちや、その友達の男の子たち、そのまた友達の男の子。私はたくさん男の子たちからだを委ねた。行為のたびに葉太郎の顔が浮かんた。行為に及べば及ぶほど、葉太郎の存在はますます大きくなっていった。辛さばか

りが募っていった。けれど、私は性行為をやめなかった。男の子たちと寝ること以外に、葉太郎の気を引く方法を思いつかなかった。私は男の子たちとからだを重ね続けた。

『悪いことをしたら、ちゃんと罰を受けることになってるんだよ』

小学生の頃に聞いたモミオの声が頭のなかで鳴っていた。

悪いことなのかな？ 私がしていることは悪いことなのかな？ 葉太郎に戻ってきてほしい。ただそれだけなんだけだな。

葉太郎はまったく気づいてくれなかった。気づいていたけれど、気づかない振りをしていたのかもしれない。いずれにせよ、葉太郎が私に連絡をしてくることはなかった。

葉太郎、なんでなにも言っていないのかな。っていうか、私、なにしてるんだろう？

行為の最中にふと我に返って、すると男の子の下で股を開く自分がひどく滑稽に思えた。気づくと鼻で笑っていた。

「怖いよ。萎える」

息を乱しながら腰を振る男の子に言われ、

「ごめん」

真顔に戻って謝った。

「悪いと思ってるの？ だったら、いいよね？」

男の子はそう言うと、避妊具をつけないまま私のなかで果てた。

男の子たちと寝るようになってひと月ほど経った頃だと思う。

「メンタル強いよね？」

そう言われることが増えた。

男の子たちは、行為を終えて着替えをしながら、あるいは枕元で煙草を吸いながら、「サナコのメンタルは強い」と言った。

その言葉の真意を尋ねることはしなかったけれど、なんとなく想像はついた。私が誰とも寝ていることは、きつと男女を問わず哲学科の多くの学生の知るところとなっていた。なかには私を悪く言う学生もいたようだ。親切な学生が、「辻さん、男子たちとのこと、かなり噂になってるけど大丈夫？ よければ、話聞くよ？」と声をかけてくれた。「サナコ、男の子たちがサナコのことなんて呼んでるか知ってる？ アナコだよ？ 穴子。意味わかるよね？ あんな男たちと寝るの、やめたほうがいいってば」と助言してくれた女子もいた。たとえ耳を塞いでいても、風上にも、噂は自然と入ってきた。自分で種を蒔いているのだ

から、被害者のように振舞うのはおかしいことだった。肩で風をきるまではいかなければ、堂々と前を向いて歩いた。彼女がいる男の子とも寝ていたから、暗闇で刺されるかもしれない、そんなことも思った。刺されたら仕方ないとも思っていた。むしろ刺されてもいいと思っていた。葉太郎と会えない日々が、私を投げやりにしていた。会えないわけではない。会おうと思えば会えた。けれど、会っても気持ちのよい時間を過ごす自信がなかった。愚痴をこぼしたり、やきもちを焼いたり、つまらないことで絡んだりして嫌われるのが怖かった。葉太郎にどう接したらいいのか、すっかりわからなくなっていった。あんなに親密な行為を楽しんでいた頃が嘘のように、私と葉太郎との間にはすっかり溝ができてしまった。その溝は浅かったけれど、飛び越えるには幅が広くなりすぎていた。

「サナコさん、なんか、病んでるんじゃないっすか？ 心に闇抱えてそうっす。医者、行っただろうがいいと思います。裸でする話じゃないっすけど」

ひとりだけそう言ってくれた男の子がいた。理学部の学生だった。

「メンタル系の医者、かかった方がいい気がします」

男の子は心から心配してくれているようだったけれど、その言葉を素直に受け入れることができなかった。

「なんでもメンタルに結びつけて考えるのって、なんだか思考停止みたいでイヤなんだよね。自分で決めてしている行為に、闇なんかあるはずないよ。私は大丈夫。心配してくれてありがとう」

実際、自分のしていることを誰かのせいにしてたり過去の出来事と結びつけて考えたくなかった。一方で、心のなかは虚しさで満ちていた。ずっと強くありたいと思って生きてきた。モミオみたいにゆったり、まっすぐな人間でありたいと思って頑張ってきた。濱本さんが褒めてくれたように人を信じようと頑張ってきた。けれど、私は強くなれなくなっていった。強さを失った心は、ぼっかりと穴が開いてしまったようだった。強さを失った私は、葉太郎を信じられなくなっていった。嫉妬の感情に支配されていた。その感情は、過去にまで遡った。葉太郎と出会ってしまったことを後悔し、葉太郎と引き合わせた運命を呪った。

男の子たちと寝るようになって二ヶ月が経っても、やはり葉太郎は私になにも言ってくれなかった。どうしてなにも言ってくれないのか。私は葉太郎に嫌われてしまったのか。葉太郎に聞くこともできずに、私のなかで葉太郎への思いがどんどんと歪んでいった。

キャンパスの街路樹の緑が、青い空に枝葉を伸ばしている。行き交う学生の声は晴れやか



で、生協前広場の階段に腰掛けてアイスクリームを食べる学生や、広場の端っこでラジカセで音楽を流しながらダンスの振り付けを練習する学生がいる。太陽の白い光を受けた彼女は、みんなまばゆい。

試験期間が終わるまであと二日あったものの、前期の試験やレポート提出を終えた学生たちで溢れる大学は、浮かれきっていた。試験勉強をしようにもぼんやりと受けていた授業のノートは真っ白で、レポートのための読書にも身が入らなかった。結果、試験もレポートもぼろぼろだった。単位をもらえない科目が出るかもしれないなかった。

試験期間を終えてこれから夏休みに入ろうとしていた頃、誰もいない哲学資料室のリクライニングソファで寝転んでいると、ひとりの女子学生が入ってきた。女子学生は、私と目があった、「こんにちは。サナコさん……、ですよね？」と声をかけてきた。前期の始まりとともに哲学科に編入してきた女の子だった。肩甲骨のあたりまで伸びた髪の毛がものすごく綺麗な、お尻と胸の大きな女の子だった。男子学生たちは色めき立ち、女子学生たちは彼氏を取られないようにという牽制なのか、女の子に愛想を振りまき仲良くなるのに必死になっていた。私は葉太郎のことでそれどころではなかった。資料室へは顔を出すものの、資料室の端っこに置かれたリクライニングソファでキャップを深くかぶってイヤホンをして、外部を遮断して空き時間を過ごした。

「サナコさんと前から話したかったです。サナコさんって、カッコイイですよ。群れないし、媚びないし。憧れてるんです」

女子学生はソファの横にあるパイプ椅子に腰をかけると、一方的に話を始めた。

「サナコさんも素敵だけど、藤澤先生もカッコイイな」

女子学生は唐突に葉太郎の名前を出した。裏があるのかと思ったけれど、純粹に憧れているだけのようだった。女子学生は、つい最近、葉太郎と街の喫茶店にパフェを食べに行くと話し出した。

「一緒にバスに乗って街に出ただけで、私、お尻が大きいから、隣に座る藤澤先生とびつたりくつついちゃって、なんか変な気分になっちゃいました」

女子学生の瞳は恋に落ちているようなとろりとした輝きを放っていた。

話はそれだけでは終わらなかった。地元が葉太郎と同じ街であることがわかり地元の話で盛り上がったこと、高校時代からバンドでベースを担当していたから葉太郎がベースを弾くのを知って親近感がわいたこと、年上の男性に惹かれること、今まで付き合った男性はみんなかなり歳の離れた男性だったこと。女子学生は、浮かれるような調子で話して聞かせ

た。女子学生の声を聞きながら、頭が熱くなっていくのを感じた。からだの内側から細かな震えが沸き起こり、抑えることができなかった。それは怒りとは違う感情で、嫉妬とも別の感情だった。なにかと言えば、それはきつと絶望だった。

葉太郎は誘われれば気軽に学生と喫茶店や映画に行っていたから、この女子学生が特別というわけではないことはわかっていた。けれど、葉太郎が大きなお尻を好むことや、ふたりが多くの共通点を持つこと、そしてなにより、私と距離を置いている時期に他の女の子と楽しんでいたことがとてつもないダメージを与えた。

きつとこのとき、私の心とからだをつなぐ糸は切れたのだと思う。心とからだはふつりと切り離され、バラバラになった。心を失ったからだが、暴走を始めた。

夏休みに入ると、私は葉太郎の生活を覗き始めた。朝早く哲学資料室へ行き、扉を開け放って葉太郎が出勤するのを確認し、葉太郎の研究室を訪れる人をチェックした。夕方になると外に出て、ベンチに寝転んでイヤホンで音楽を聴きながら四階にある研究室の窓を眺めた。窓の明かりが消えてしばらくしたら、葉太郎の自宅付近へと歩いて向かった。自宅は、大学便覧の後ろに書かれた住所で知っていた。家まではいろんなルートがあったけれど、自転車通勤している葉太郎に遭遇することがないよう、自転車では通りそうもない細い道を選んで歩いた。葉太郎は、大学から徒歩で三十分ほどの住宅街の一角に住んでいた。葉太郎の家の隣には小さな神社があって、境内の桜の木やモミジは借景となり、葉太郎に色とりどりの季節を見せる様子が想像できた。葉太郎の家は、くすんだ水色の壁とコンクリートの打ちっ放しとを上手く使った、三階建てのこぢんまりとした箱型の建物だった。三階のベランダからは、屋上に小さな螺旋階段が伸びていた。葉太郎は帰宅するとまずお風呂に入る（長のお風呂だ。私はこの間に葉太郎の自宅付近へと到着する）。お風呂から上がるとTシャツとハーフパンツに着替える。髪の毛は乾かささない。濡れた髪のまま、ビールの缶（あるいは缶酎ハイ）を一本と本を一冊持って螺旋階段を上って行く。葉太郎は屋上でビール（缶酎ハイ）を飲みながら小一時間ほど読書をする。私のいる神社からは屋上の様子は見えなかったけれど、きつとそのようなことが行なわれている。一時間ほどすると、葉太郎は空き缶と本を持って階段を降りて部屋に入っていく。おそらく、葉太郎の書斎だ。書斎の明かりはしばらく点いているけれど、八時を過ぎた頃に消える。この時間帯は三階と一階の明かりは消え、二階の南に面した窓だけが暖色系の明かりを放っている。きつと、リビングが二階にあつてそこで奥さんと夕飯を摂っている。

日々の葉太郎の行動とその時間を、小さな手帳にメモをした。葉太郎の出勤時間や退勤時間、研究室を出た時間、戻った時間、屋上に上っていった時間、書斎の明かりの消えた時間、夕飯の時間、就寝の時間。ノートに並んだ数字から、新たな葉太郎を知っていった。葉太郎はトイレが近いことや（四十分一度はトイレへ行った）、昼前に大便をすること、週に一度、会議があること（平均すると一時間の会議だ）などだ。疑いを抱いていた編入生の女子とはなにもないこともわかった。大学でふたりきりになることはなかったし、一緒に出かける姿を目撃することもなかった。

葉太郎の行動を観察しているだけでは私たちの関係が切れてしまうと、ときどきメールを送った。近況を伝えるメールは書いていると長くなり、パソコンで開いたとしてもスクロールが必要な量となった。それでも、葉太郎に近況を伝えなければならぬという義務めいたものを感じ、長いまま送信した。メールは二日に一度ほどのペースで送った。ときおり、お酒に酔ったまま、葉太郎と一緒になれない絶望から死を匂わせるメールを送って翌朝後悔したけれど、じきに、これも私の本心なのだと開き直った。葉太郎から返信がないのは寂しかったけれど、私以外の誰かと会っているわけではないことがわかっていたから、気にしないようにした。

葉太郎の自宅付近を歩いたり神社でひと休みするのは散歩の一環だと思っていたし、メールは付き合っているのだから普通の行為だと思っていた。まさか自分のしていることがつきまといと呼ばれるものなどは、つゆにも思わなかった。

盆の入りの前日のことだった。昼すぎから飲みだしたお酒にすっかりやられて葉太郎の家に行くのが億劫になり、哲学資料室からメールを送った。

『これから飛び降りるところ。資料室の窓べりに座っているよ。夜景が綺麗』

実際に、私は哲学資料室の窓を開け放って腰掛けて、外に投げた足をぶらぶらさせていた。ぶらぶらさせながら、左手に握る携帯をチェックして、葉太郎からの返信はまだかなあ、などと思っていた。

メール、来ないなあ。まさか、葉太郎が来たりして。それはないか。

そんな風に思っていたから、自転車立ち漕ぎした葉太郎が見えたときは驚きともに嬉しさがこみ上げた。

「おい。葉太郎！　ここだよ！」

手を振ると、葉太郎は顔を上げて、

「飛ぶなよ！」

と叫んだ。

葉太郎は息を切らして哲学資料室に入ってくると、まっすぐに私のもとへ走り寄り、背中を抱えて三人がけのソファに倒れこんだ。

「馬鹿なことをするなよ。お願いだから、馬鹿なことはしないでおくれよ」

背後から私を抱く葉太郎は、泣いているようだった。

「泣いてるの？　なんで泣いてるの？」

不思議に思って聞くと、葉太郎は鼻を吸りながら言った。

「お前、ちよつと間違っていたら死んでいたんだぞ？　ちよつとバランスを崩したら、俺の手が誤ってお前の背中を突いてしまっていたら、お前はこの世にいなかったんだぞ？　俺はお前に死んでほしくないんだよ。なあ、紗南子、どうしちゃったんだよ？」

「そしたら、また前みたいに仲良くしようよ。前みたいに戻りたいだけなんだよ」

ろれつの回らない口で言うと、葉太郎は呻くように言った。

「それはもうできない。もう、あの頃には戻れないんだよ」

私の両手を固く握る葉太郎の手は、細かく震えていた。

「どうして？　なんでダメなの？」

「お前がしていることは知ってるんだよ。俺の行動を監視していることも、家の近くで張ってることも。俺にとってお前は恐怖でしかなくなってしまったんだよ。お前をここまで追い込んでしまった一因が俺にあるとしたら謝るよ。本当にごめん。けれど、もう、俺を放っておいてくれないか。お願いだよ」

葉太郎の涙が私の首筋に流れてシャツを濡らしていく。

「朝が来るのが怖いんだよ。朝の光がカーテンから差し込むのを見ると憂鬱な気持ちになるんだよ」

葉太郎の腕を解いて向かい合い、頬を伝う涙をぬぐった。葉太郎は私の手を振り払うと、静かに言った。

「別れてくれ。お願いだ。心がおかしくなりそうなんだ」

そう言った葉太郎の指は、こめかみを指していた。

葉太郎をそこまで追い込んだにもかかわらず、私の行動は収まらなかった。自分でもどうしてそんなことをしたのかわからない。

葉太郎に振られた翌日、昼前に目覚めてから夕方までのほとんどをアパートでお酒を飲

んで過ごした。日が暮れて夜になると、大学へ行った。大学はひっそりと静まり返り、研究棟のあたりはほとんど消えていた。階段の踊り場も節電のためか、小さなライトが灯っているだけだった。暗い廊下を歩き階段を上り葉太郎の研究室へ向かった。葉太郎の研究室のドアは鍵がかけられていた。前からイメージしていた通りに、ドアノブを足がかりにして鍵のない高窓から葉太郎の研究室に侵入した。ほとんど酩酊しているわりにはからだはきちんとして動いた。侵入した後の記憶はほとんどない。葉太郎の自宅に電話をかけたらしいことは、携帯電話の履歴でわかった。葉太郎は電話線を外していたのだと後になって知った。私が携帯電話越しに聞いていた呼び出し音は、葉太郎に届いていなかったのだ。履歴によると、その夜私は十三回、葉太郎の自宅にかけていた。十三回で諦めた私は、哲学科の別の教官に電話をかけている。五分ほど話していることが通話履歴に残っている。

どうやって帰ったのか覚えていない。煌々と光る葉太郎の研究室で窓から飛び降りようとしたことや、それを止めようとした哲学科の教官と揉みあったような記憶が薄ぼんやりとある。羽交い締めにされて、詰問されたような記憶もある。けれどそれが実際にあったことなのか、確かな記憶として残っていないかった。

翌日、目覚めたのは昼過ぎだった。どうやって帰ったのか、自宅のアパートにいた。服は前日着ていた白いTシャツとジーパンのままだった。手首に覚えのない青黒い痣ができていて、部屋の空気がお酒の匂いで淀んでいた。頭はまだ酔っているようで、ぼんやりとしていた。台所に行つて水を飲んでみると、部屋のどこかから携帯電話の着信音が響いた。どんなに探しても携帯電話は見当たらなかった。着信音は止むことなくずっと鳴り続けた。しつこいくらいに鳴っていた。

携帯電話はなぜか洗濯物で溢れた洗濯機のなかに紛れ込んでいた。

「もしもし」

応答すると、相手は「中村です」と名乗った。哲学科で最年長の教授で、みんながボスと呼ぶ教官だった。ボスは酒焼けしたようなししゃがれ声で言った。

「夕方四時、資料室に集合です。哲学ではなく比哲の方です」

「はい」

そう答えるのが精一杯だった。

比較哲学資料室には、葉太郎を除く哲学科のすべての教官が待っていた。総勢五人。みんな、ポロシャツにジーパンとかアロハシャツにチノパンといったラフな格好をしていたけれど、ものすごい圧を放っていた。

ドアの前で怯んで、思わず歩みが止まった。けれど、してしまったことの責任は取らなければならぬことはわかっていたし、覚えていないというのは理由にならないことも知っていた。

先生たちの向かいの椅子に座ると、

「まず、辻さんの言い分をお聞きしましょうか」

ボスが言った。

葉太郎との関係は伏せて、私が片想いをしていたこと、その想いが強すぎてつきまといをしてしまったことを話した。

教官たちの視線は、すべてを見透かしているようで怖かった。嘘がばれるのではないかとひやひやした。学生と付き合っていることが発覚したら、葉太郎も処分を受けるのだろうか。そう思うと、話す声が震えそうになった。

つきまといをしていた頃は、葉太郎の愛情は冷めていたのだから嘘は言っていない。話さないことは嘘を吐くこととは違う。

そう自分に言い聞かせて、その視線に耐えた。

私が話し終えると、ボスは言った。

「わかりました。端的に言います。辻さん。あなたは停学です。停学の期間は半年間。停学中は、大学にはもちろん、藤澤先生にも近づかないことを約束してください。約束が守られないようであれば、退学です」

絶望が目の前を覆った。完全に葉太郎との未来が断たれたという絶望だった。半年というのは途方もないくらい長い時間だった。

## もくろみ

休学を言い渡されたのだから、実家から連絡が来てもよさそうなものなのに、お母さんが電話をかけてくることはなかったし、お兄ちゃんたちからの連絡もなかった。その静けさがないんだか不気味だった。お母さんなど、怒って退学を言い渡してもおかしくない気がするし、お兄ちゃんたちは心配して部屋を訪れるくらいしそうな気がしたのに、みんななんの反応も起こさなかった。とはいえ、大学生活が始まってから家族からの連絡をことごとく無視していたせいも、このところ家族からの連絡が途絶えていたのも事実だった。

家にもっている間、私はよく寝た。ほとんどを寝て過ごしていた。夢を見た。夢には葉太郎がいて、私の手足を縛り目隠しをしてカメラを回した。

『こんなに恥ずかしい格好をしてるのだぞ。紗南子、もっと恥ずかしがっていいのだぞ』  
葉太郎の高く通る声がある。

不意に目が覚めて、見慣れた部屋が目映る。遮光カーテンに光を阻まれた、薄暗い部屋だ。行為のために本棚とカーテンレールとに渡した物干し竿が、部屋をふたつに分かつように線を引いている。私がこの竿に吊られることは、もうない。テレビの前の空間に刺り落とした陰毛の黒が散らばることもない。トイレを覗かれることもカメラを回されることもない。葉太郎がこの部屋を訪れることは、二度とない。

夜になって闇が深みを増すとコンビニへ行き、つまみとお酒を買って帰る。帰宅すると、パソコンを起動させ、ディスプレイのぼんやりとした明かりの下でお酒を飲む。お風呂にしばらく入っていないせいだからだからすえた臭いがする。自分が自分でなくなったようだ。どうしてこんなことになってしまったんだろう。私がちゃんとしていれば、自制できていれば、今だって葉太郎が隣にいたのかもしれないのに。お酒がまわって記憶をなくし、気づくと眠りに落ちていく。

濱本さんからの手紙が届いたのは、そんな頃だった。手紙が届いた経緯は、少しややこしい。濱本さんは、私宛の手紙をモンクへ送った。モンクはお店を閉じていたから、その手紙は小笠原さんの自宅に転送された。『同封した封筒は、紗南子ちゃんに渡してください』と書かれた自分宛の手紙（濱本さんは小笠原さんにも手紙を書いた）を読んだ小笠原さんが、その封筒を私のアパートに転送してくれた。私はその手紙に気づいたのは、夜、コンビニから戻って郵便受けを覗いたときだった。一通の封筒が、広告チラシに紛れるようにして入っていた。

小笠原さんから届いた封筒には、濱本さんからの手紙と一緒に便箋二枚分の手紙が同封されていた。小笠原さんの書いた文字を見るのは、アルバイト募集の張り紙以来のことだった。物腰の柔らかい流れるような書体で、小笠原さんと関わっていたのはほんの二年ほどのことなのに、旧知の友から届いた知らせのようにひどく懐かしい気持ちになった。

小笠原さんは、山のなかの湖の畔にある自宅で茶トラの猫と暮らしていた。たまに食材を買いに街に下りるけれど、その他は、自宅で過ごした。ジャズを聴いて、本を読んだ。食事は夕食だけしっかり作り、あとはトーストやスパゲッティなど簡単なもので済ませた。たま

にケーキも焼いた。猫は、陽だまりで丸くなり、気が向くと本を読んでいる小笠原さんの膝に乗って前足を動かし小笠原さんの腿を踏むように揉んだ。小笠原さんが、ジャズのレコードに合わせてピアノを演奏していると、猫はピアノの脇に置かれたスツールの上で毛づくろいをしながら、思い出したようににゃーと鳴いた。

小笠原さんは、初めて私にプライベートを明かしてくれて、その生活は私の抱いていた小笠原さんのイメージを少しも崩さないものだった。小笠原さんは、手紙の最後をこう締めくくっていた。

『あの春の日、もしかしたら、辻さんはアルバイトの面接に拍子抜けしたかもしれません。働いてくれる人であれば誰でもよかったのではないかと感じたかもしれません。けれど、それは違います。うまく言えませんが、辻さんには人を惹きつけるなにかがあります。魅力。そう言っても差し支えないものだと思います。私も辻さんの魅力に惹かれた者のひとりだったというわけです。重要なのは、辻さんにとって、その魅力が良い方向だけに向かうわけではないということです。辻さんの纏う魅力は、ときに悪いものを惹きつけてしまうこともあるかもしれませんが、もしかしたら、すでにそういう経験をなさっているかもしれません。そしておそらく、そうした悪いものは、辻さんの思いとは関係なくやってきます。どうか、そうした悪いものによって辻さんの心が損なわれませぬよう、切に願っています。』

読み終えた手紙をテーブルに置いて席を立つ。モンクの閉店時に小笠原さんから譲り受けた道具でコーヒーを淹れて、再び小笠原さんからの手紙を読み返す。小笠原さんには自分のことをほとんどなにも話していないのに、小笠原さんはまるで私の過去や現在を知っているように言葉を連ねている。あるとき、小笠原さんともっと話をしていたら。そんな甘い気持ちに心が浮かんだけれど、話さなかったからこそ、小笠原さんとは良好な関係のまま別れられたのかもしれないと思った。空になったマグカップにコーヒーを注ぐと、席を立った。

小笠原さんの手紙を読んですぐに濱本さんの手紙を読む気持ちにはどうしてもなれなかった。結局、濱本さんの手紙の封を開いたのは、日付が変わってからだった。

濱本さんの字は、几帳面で丁寧だった。パソコンのフォントにありそうな整然とした書体は、濱本さんの整った顔立ちや贅肉のないからだを思い起こさせた。

『紗南子ちゃんが言っていたみたいに沖繩はあったかいけど、天気が気まぐれすぎてついていくのが大変よ。特に、雨。俺、会社まで歩いて通勤してるんだけど、朝、歩いていると降るんよ。その量が半端なくて、傘さしてもびしょりぐっしょりなんよ。で、濡れてしまっ



たズボンとか上着とか部屋に干すんだけど、カビるんよ。湿度が高いから乾かなくて、乾かないまま干しとくと、カビるんよ。エアコンのドライ機能使ってもダメなんよ。これには参ったよ。でもね、いいこともあるんよ。ここ、猫が多いんよね。野良猫だと思うんだけど、道のあちこちに猫がいて、しかも警戒心のない猫が多くて撫でさせてくれるんよ。俺、仲良くなった猫がいて、餌もあげてるんよ。写真、入れといたから見てみてよ。猫見ると、なぜか紗南子ちゃんを思い出すんよ。猫って、まっすぐよね？ 気まぐれだとかわがままだとか言われてるけど、裏を返せば自分に正直ってことよね？ それってまっすぐなことと思うんよ。猫は、まっすぐなんよ。あんな柔いからだだけ、心はピシッとまっすぐなんよ。紗南子ちゃんみたいよね。なんて、どうでもいいことつらつらと書いてしまったね。こうして手紙書いたのは、伝えたいことがあったからなんよ。俺、紗南子ちゃんに支えてもらってたんだなって、こっち来て気づいたんよ。こっち来てから、けっこう頻繁に紗南子ちゃんのこと思い出して、ああ、助けられてたんだなって思って、ものすごく感謝してるんよ。モンクへ行けば紗南子ちゃんが居てくれて、俺、嬉しかったんよ。そんなこと思い出してたら、俺も一歩踏み出そうかなって気持ちになったんよ。まず疑う、っていうのではなくて、まず信じる、って態度をとってみようと思ったんよ。なんかしみじみしてしまったね。ごめんね。また、モンクに行きたいよ。俺、こっち来てから外で変身してないんよ。もっぱら家んなかでだけしているんよ。また、紗南子ちゃんの前で変身して、紗南子ちゃんの淹れたコーヒー飲みながら話したいね。そしたら、元気でね。』

濱本さんのなかに存在する私と現実の私の違いに切なくなった。濱本さんの時間はあの頃のまま止まっている。一方、私の時間は目まぐるしい速さで進んでしまった。濱本さんは、未だにモンクがあると思っていて、私がまっすぐだと信じている。濱本さんののかな手紙を読み返していると、だんだんと腹立たしくなってきた。変わってしまったのは濱本さんではなく私で、私が変わってしまったせいだ話がかみ合わなくなっただけだ。だから濱本さんにはなく悪くない。それなのに、私は牧歌的なその手紙に、濱本さんの撮った猫たちの写真に、腹が立った。腹立たしさを覚えながら、私は肝心なことに気づいた。私は確かにまっすぐだった。背筋を伸ばし、人を信じた。どんなに悪い人でも、そうやってしまうのにはなにか理由があるのだと考えた。悪い人だからといってすぐに排除することのないように心が

けた。私をグループから外したクラスメイトも、モミオを殺めたかもしれないお兄ちゃんたちも、ヒステリックなお母さんも、悠々爺も、そうなるに至ったのにはきつとなにか理由があったのだと自らに言い聞かせていた。私は、そうした人たちにもいいところはあ、根はいい人なのだと思ってしまう。そのつもりだった。けれど、私は肝心なものを蔑ろにしていた。それは、自分自身だった。私は周りの人を信じたけれど、自分自身を信じていなかった。『人を信じる』、そう思っている自分自身を疑わしく思っていた。そんな私の『信じる』は、とても弱くて頼りないものだった。葉太郎に出会って、それが明るみに出た。きつと、そういうことなのだ。

小笠原さんと濱本さんの手紙は、なんらかの形で私に力を与えてくれたのだと思う。手紙が届いてしばらくすると、生活のリズムが整いだした。夜、十二時近くになると眠くなって、朝、七時になると目が覚めた。日中は、家にいると気持ちが落ち着かなくなるから、外を歩いた。大学とは反対の、南の方向へひたすら歩いた。川沿いの散歩コースを、のんびりと歩いた。すれ違うのは、ベビーカーを押した若いお母さんや、よちよちと歩く子供を連れなお母さん、ウォーキングをしている高齢者が多かった。ときおり、私と同じ年齢くらいの若者や制服姿のカップルとすれ違うこともあった。ゆつくりと流れゆく景色を眺めていると、不思議な気持ちになった。なにかに急かされるようにつきまといをしていたあの頃の時間と、流れがびたりと止まってしまったようなつい数日前までの時間とが、同じ「時間」と呼ばれることが妙に思えた。ふたつの時間は、まったく別の時間だった。人間という小さな存在とは独立して流れ続ける時間が、私というちっぽけな存在によってその速度を変えることが不可思議だった。

休学してから二ヶ月、散歩を始めて一ヶ月ほどが経った頃、アルバイトを始めた。派遣会社に登録して、紹介された仕事に出るとい形でのアルバイトだ。スーパーの店頭でのケーキ売り、書類の封入、ワイシャツのタグ交換、印刷所での製本作業。その日によって県内各地の街を訪れて、長くても一週間ほど、短いとその日限りの仕事をした。

派遣の仕事をしていると、普段は接点のないタイプの人たちと出会うことがあった。たとえば、倉庫での書類封入の仕事には、歯が口に収まらなくて顔全体がぐにやりと歪んだ女性と左足を引きずって歩く女性と片言の日本語を話す日本人がいた。彼女たちは、独り身だったり結婚していたり未婚だったり様々だったけれど、お金に困っているということで共通していた。ダブルワークの合間の時間に、派遣のアルバイトを入れていた。チョコレートの

香りが漂うお菓子工場の倉庫の一面で、テーブルに置かれた書類の山の前に立ち、回ってきた封筒に担当する書類を入れて次の人に送る。彼女たちは、慣れた手つきで書類を封筒に入れながら、滑らかに口を動かす。

「今月は、もう少し仕事見つけないと、まずいのよ」

「いくら必要なの？ あたしなんて、稼いでも稼いでも旦那が全部使っちゃうから、やってらんないわ」

「そうなの？」

「そうよ。こないだわかったんだけど、あたしが旦那に掛けていた生命保険、私に黙って勝手に解約してたのよ。うん百万ってお金を、旦那は手にして、それをあたしに黙ってたのよ」

「ワタシ、殺スカ？ オ前ノダンナ」

「ちよっと、物騒なこと言わないでよ。別ればいいじゃないのよ？」

「子供がねえ。小さいから、まだ」

「いくつ？」

「中学一年と小学五年と三年」

「オ前、ダンナ嫌い。ダガ、ヤルコトヤツテルノダナ」

「昔はいい人だったのよ」

「うちはもう成人してるから、旦那は捨てちゃったけど、それだときついわねえ」

「ニンゲン、年トルト変ワラナイヨ。金ハ大事ヨ。子供、小サクテモ、別レルガ正解ヨ」

彼女たちの会話を黙って聞きながら、自分がいかに恵まれているのか痛感した。お母さんは頼れなくても、お兄ちゃんたちが援助してくれる。私がお金に困ることは、たぶんしばらくない。女の人たちの会話を聞いていると、そうした恵まれた境遇にすることが少し後ろめたくなった。彼女たちは必死で働いているのに、私は暇つぶし程度の感覚で働いていることに、罪悪感のようなものを覚えた。今まで意識したことはなかったけれど、暖かくて広い間取りの部屋に住み、大きなテレビがあって、洋服にも困らない。食費や光熱費の支払いの心配をしたことがない。それは当たり前のことではないのだと、女の人たちの会話を聞いて気づいた。お兄ちゃんたちには感謝しているつもりで、だからモンクでアルバイトをしたのだけれど、どこかで、困ったときはお兄ちゃんたちがいるし、と高を括っていたのだと思う。そうしたあれこれが、急に恥ずかしくなって、寒さで丸くなった背中がさらに縮こまった。

年の瀬のことだった。隣の駅前で居酒屋のチラシを配るアルバイトをしていた。同じような色合いの服に身をまとうつむき気味に行き交う人たちはポケットから手を出さず、

一向にチラシは捌けずにいた。そんなだったので、チラシを受け取ってくれると嬉しくて自然と顔が上がり、「ありがとうございます！」と声が出た。

同じおじさんが何度もチラシを受け取っている。そう気付いたのは、街に立ち始めてから三時間ほどが経った頃だった。終わりまであと一時間。チラシは、まだ大量に残っている。

「よろしければご来店下さい！」

声をかけてチラシを差し出す私の手からチラシを受け取る人がいて、顔を上げると、そのおじさんだった。

「ありがとうございます！」

挨拶をすると、おじさんは立ち止まった。丸い眼鏡をかけた顔は、剥きたてのゆで卵みたくいにつるりとしていた。髪の毛は柔らかかそうで量は少なめだった。仕立ての良いスーツを着ていて、足元を見ると、靴も綺麗に磨かれていた。手から提げている鞆も、革がくたつとしているけれどしっかりと手入れがされているようだった。

おじさんは人の邪魔にならないように、私の方にささっと近づくと、おもむろに聞いた。

「仕事、何時に終わるの？」

口説かれているという意識はなくて、単なる質問だと思った。

「九時半です。あと一時間くらい」

「仕事終わったら、ご飯食べに行かない？ もちろん僕の奢りで」

おじさんは慣れたように、さらりと言った。これまで何度もこんな風に女の人に声をかけてきたのだろう、という考えがすぐには浮かばないくらい自然だった。家に帰ってもどうせ寝るだけだし、明日はアルバイトの予定もない。なにより、年の瀬の駅前の人の多さが私を開放的な気持ちにした。

「行きます、ご飯。けど、なにもしません？ エッチなこと」

「しないよ。ただ、ご飯を食べて話をするだけ。そして、僕たちは別れる」

「なら良かった」

「一時間後、ここに来るね。じゃあ、後ほど」

そういっておじさんは去っていった。

おじさんは、清野さんせいのという名だった。清野さんは話上手だった。海外の雑貨の輸入の仕事をしていると言って、訪れた外国の街の話を、まるで今そこを旅しているような調子で話して聞かせてくれた。ドイツ、デンマーク、イギリス、トルコ。ビルの地下にある、照明が

ひどく暗いお店でピザやリゾットや肉料理を食べながら、私は何カ国もの国を旅した気分になった。時間はあつという間に過ぎていった。

清野さんは、お店を出ると、地上へと登る階段の途中で私の手首をクイツと引つ張り抱き寄せてキスをした。唇を合わせるだけのキスだった。

「なにもしないって約束したじゃないですか」

怒ったように言ったのだけれど、清野さんにはそう聞こえなかったようだ。

「おや、かわいいね。キスなんて、なにもないに等しいじゃない？」

清野さんはそう言って、再び私を抱き寄せると、

「僕と付き合わない？」

耳元で囁いた。

清野さんの話を聞きながら、葉太郎のことを考えていた。葉太郎の幸せについて考えていた。私はきつとまだ葉太郎が好きだった。執着と言われるかもしれないけれど、その感情がなんにせよ、葉太郎は私のなかで未だ強い光を放っていた。離れているから冷静でいられるけれど、復学したらまた同じことを繰り返してしまわないか不安だった。それをしてしまつたら、葉太郎はきつと苦しむことになる。葉太郎が好きだから、葉太郎には平穏を取り戻してほしかった。心からそう願った。そして、葉太郎が幸せになるためには、私は葉太郎に関わってはいけないのだった。

「いいですよ」

私は清野さんの広い背中に置いた手に力を込めた。

葉太郎と離れるために。

葉太郎への気持ちを消すために。

そんな綺麗事のような気持ちだが、このとき、心の底から湧いた。過去の男を忘れるために新しい男を作るというのはあまりに短絡的なのかもしれない。けれど、それ以外に葉太郎の平穏を実現させる方法が思いつかなかった。清野さんと付き合えば、きつと私は葉太郎への感情を抑えることができるはずだ。葉太郎のいない生活を送ることができるはずだ。葉太郎が平穏な日々を送るためには、私は葉太郎と関わってはいけないのだ。そう思った。こんな動機で付き合うのは清野さんに申し訳ない気もしたけれど、清野さんだって既婚者なのだ。

「そしたら、これ。僕の連絡先、渡しておくね。今日は、約束通り、このままお別れしよう」

清野さんはそう言うと言葉を登り、駅とは逆の方向へと去っていった。

## はずみ

まるまる半年間、葉太郎と距離を置いていたせいも、清野さんとからだを重ねていたせいか、葉太郎に対する気持ちは和らいだ。大学三年の春に復学した私は、シラバスを読み、履修登録をして、授業に出た。葉太郎の授業も登録したけれど、少人数のゼミは避けて大教室の講義だけにした。夏休みの一件を知っている学生はいないようだった。

「サナコさん、今夜、飲みませんか？」

「飲み会するけど、よかつたら来ませんか？」

そんな誘いを受けたけれど、私は断って勉強に集中した。学生の溜まり場となっている哲学資料室へはあまり行かなくなった。代わりに、専門書が壁を覆う比較哲学資料室へこもった。比較哲学資料室は校舎の一番奥にあって、学生も先生もほとんど訪れなかった。ときどき、ゼミの予習用に本を借りていく学生が来たけれど、本を見つけるとすぐに部屋を出て行った。比較哲学資料室は、私専用の勉強部屋となった。

清野さんとはときどき会った。清野さんから携帯電話に連絡が入ると、大学の近くにある中学校の正門前で拾ってもらい、ホテルへ行った。清野さんは、行為を終えると私にお金を渡した。お金を渡すことで、私たちの間に恋愛感情はないという意思表示をしているようだった。私は黙ってお金を受け取った。清野さんはよく喋ったけれど、私は自分のことを話さなかった。清野さんに対して恋愛感情はなかったし、これからもそういう感情を持つことはないだろうと思っていた。それでも私が清野さんと会い続けたのは、葉太郎の幸せを願っていたからだ。清野さんと付き合うことで自分の感情が再び葉太郎へ暴走することを防げると思っていた。葉太郎のことは区切りがついたようでいて、心の奥ではまだ火種が燃っていた。ちらちらと舌を揺らすようなその小さな炎を意識しないように、どんなに気をつけていても、どうしても感じてしまうのだった。葉太郎の幸せを願うだなんて勘違いもいいところだし、葉太郎の幸せが私にかかっていると考えるなんて自意識過剰も甚だしいことはわかっていた。けれど、そう思うことで少しでも葉太郎と繋がっていたかった。

食欲がないのは相変わらずだった。朝、コーヒーを飲んで、ときおりお茶やコーヒーで水分を摂っていれば、夜までなにも口にしなければ、夜までなくてもお腹は空かなかった。お酒を飲むこともやめた。運動といえるものは家と大学との往復だけだったせいも、引きこもっているときのように急激に痩せることはなかった。

顔つきが次第に変わっていった。本を読んでいるせいなのか、人付き合いを絶ったせいなのか、理由はわからない。ただ、鏡に映る私の顔は日に日に精悍になっていった。大きく変わったのは目つきだった。澄んでいて、鋭くて、奥深く、思慮深かった。自分のこんな瞳を、未だかつて見たことがなかった。自分のことなのに、綺麗だと思った。以前の私なら、こんなに綺麗になったのだから葉太郎を取り戻せるはずだと、葉太郎のもとを訪れただろう。けれど、私はもう、そうしなかった。

私は、人間として葉太郎に赦され、認められたい、そう願っているのだ。そんな風に自分に言い聞かせていた。私の葉太郎への思いは昇華を遂げたのだ。そう思い込もうとしていた。これは恋愛感情ではないのだ。そう思い込むことで、葉太郎との距離を保ち続けた。

葉太郎に赦し、認められることだけを願いながら、ストイックなアスリートのように節制をして、熱心な研究者のように勉強に励んだ。生理が止まったのも、食事をしっかり摂っていないから栄養が足りていないのだろうくらいにしか思わなかった。

季節は冬になっていた。

その年は珍しく雪の日が続いたけれど、同じくらい晴れの日も多かった。日なたの道に積もった雪は太陽の熱で溶けたけれど、日陰の雪は溶けきらず、朝晩の冷え込みと繰り返される積雪で路面を分厚く凍らせた。降雪と晴天、晴天と降雪。そんな日が長く続いた。こういう天候は稀なことだったのかもしれない。ニュースでは連日、天気の話が流れた。気象予報士が天気図を棒で指しながら、感じの良い笑顔で解説をした。

半年間休学したせいで、来年も三年生を繰り返すことになっていた。それでも卒論のテーマは決まっていた。恥について。卒論執筆はまだ先のことだったけれど、卒論執筆の計画を立て、図書館に行き本を調べ、参考文献のリストを作成した。時間が空くと比較哲学資料室で本を読み、要点をまとめた。比較哲学資料室の窓の向こうの街路樹が白く凍っていた。

二月が終える頃になると、「もうじき春がやって来る」という浮き足立った気配が漂いだした。それは、閑散とした大学を歩く教授や院生たちから漏れ出るときめきだったかもしれないし、数日続いた小春日和だったかもしれない。あるいは、資料室の窓際の日だまりから立ち上る、埃っぽい匂いだったかもしれない。いずれにしても、春の訪れの気配はどこからともなくやってきて、ひっそりと静まり返った大学を徐々に包んでいった。そのうち大量の新生生たちがやってきて、私も新たな年を迎える。吐く息は白くとも、私の心はすっかり春

めいて、緩んだように延びていた。

葉太郎がこの世を去ったのは、そんな頃のことだった。病死だった。けれど、前触れの無い、突然の死だった。驚きのあまり誰もが言葉を失うような、唐突な死だった。

夜、お酒を飲み終えそろそろ眠ろうとリビングの椅子を引いて立ち上がった次の瞬間、糸をぷつりと切られた操り人形のように、制御を失ったからだが崩れ落ちた。葉太郎は床に伏せたまま動かなかった。妻の問いかけにも応答はなかった。倒れた葉太郎の口元からは、大量の血が流れ出ていた。鮮やかな血だまりのなかでぼっかりと口を開けた葉太郎の顔は、ほとんど色を失っていた。妻は救急車を呼んだ。パニックを起こして自宅住所を失念することもなかったし、状況説明に言葉が詰まることもなかった。妻は、葉太郎を救うために最善を尽くした。救急車で搬送された数時間後、葉太郎は病院で息を引き取った。別れの言葉はなかった。誰に対しても、なかった。葉太郎は、倒れてから死ぬまで意識を失ったままだった。人懐こくおしゃべりが好きだった葉太郎の最期は、とても静かなものだった。

葉太郎が死んだ日の翌日、大学の喫煙所で、葉太郎の同僚の教官が意気揚々と話していた。喫煙所を訪れる人や通りがかる人を捕まえては、「藤澤先生、残念ですね。ところで、知ってますか？」と声をかけていた。悪趣味だ。そう思うのに、私もその教官を無視することができなかった。教官の話聞きながら、一瞬、お兄ちゃんたちの顔がよぎった。お兄ちゃんたちが葉太郎の死に関わっているのではないかと思った。けれどすぐに、そんなはずはないと思い直した。葉太郎が死んだその日、街路樹を覆う雪の白は完全に融け、緑と茶色の混じったようなくすんだ枝葉を見せた。

葉太郎が死ぬ前日、私は大学にいた。三階から四階に至る階段の踊り場のベンチに座っていると、四階の廊下から葉太郎の笑い声が聞こえた。葉太郎は、誰かと楽しい話をしているようだった。そのとき、私は清野さんと携帯電話で話していた。清野さんは電話の向こうで煙草を吸っているようだった。会話の途中に、ふーっと煙を吐くような音が聞こえた。道を歩いているのだと言った。清野さんはきつと、いつもの携帯用の灰皿に灰を落としていた。その姿が容易に想像できた。私は、分厚い靴下とベタンコのブーツで足元を覆い、ウエストがゴムのズボンを履いて、首のあるセーターにコートを羽織り、ウールの大判のストールをお腹にかけていた。背中側の壁の上に開いた明かり取りの窓から白い光が伸び、つま先を照らしていた。

私は、子を宿していた。生理が二ヶ月止まったところで市販の検査薬で調べると陽性の反



応が出た。ひとりで産婦人科へ行った。大学からアパートに帰る途中にあるからという理由で入ったその産婦人科は、古い小説に出てきそうな古めかしい洋館で、診てくれた医者も歳のいった女医さんだった。窓の色合いの具合なのか、部屋全体がセピア色をしていた。カーテンも壁も、壁に飾られた花の絵も診察代も、セピア色に染まっていた。そのなかで、女医さんの着ていた白衣とエコーの機械だけがキリッと白かった。女医さんは、ペラペラとした十センチ四方ほどの紙に写る白黒の写真を私に見せると、「これね。わかりにくいけれど、このお豆のようなものが、命ですよ」と言った。「赤ちゃん」でもなく「ベビちゃん」でもなく、「命」と呼んだ。そんな風にして、私は妊娠を告げられた。

私は、大学生の身分で母になろうとしていた。

頭上から響いてくる葉太郎の笑い声に、衝動がひとつ、舞い降りた。

『葉太郎に話したら、なんていうかな』

すぐにでも通話をやめて葉太郎のもとへ行きたい気持ちになった。葉太郎と無性に話したかった。

出産予定日は葉太郎の誕生日と同じだった。私はそれを運命と感じていた。墮胎が怖かったこともあるけれど、その運命めいた巡り合わせに、私は産むことを決心していた。清野さんとは別れてひとりで育てていこうと決めていた。葉太郎には産んでから報告して驚かせよう、それまでは沈黙を貫こうと決めていた。妊娠を知ってからその瞬間まで、葉太郎に妊娠を打ち明けようと思ったことは一度もなかった。だから、あのととき葉太郎に話しかけようとちらとでも思ったことは、おそらく虫の知らせなのだった。

私は席を立たなかった。受話器越しに、得意そうな様子で仕事の話をする清野さんとの通話を続けた。

「このあと、どう？」

清野さんの低い声に、意地悪な気持ちになった。

「妊娠してるんだ。清野さんの子」

「え？ もう一度行ってくれるかな？ 聞こえなかったんだ」

清野さんは、動揺しているようだった。

私は再び言った。

「清野さんの子ができたよ。妊娠したんだ、私」

「コンドームつけていたの？」

「そう。コンドームつけていたけれど妊娠したの」

清野さんはふうっと大きく息を吐くと、

「で、いくら必要なのかな？ 中絶代」

冷静な声で聞いた。

「いらないよ。私、産むから。清野さんとはもう会わないから安心して。さよなら」

そう言って電話を切った。

冷たい廊下を、葉太郎の声が爛漫に響いていた。

葉太郎の葬儀は、とても質素なものだった。人はたくさん集まった。春休み中ということもあり学生はほとんどが帰省していたけれど、みんな葉太郎と最後の別れをするためにやってきた。卒業生たちもやってきたし、東京や大阪、全国の学者仲間たちも集まった。もちろん、大学の先生たちや事務方の人たちも訪れた。広いとは言えない本堂に、黒やグレーの服を着た大勢の人が立っていた。人の多さからいったら、それは盛大な葬儀だった。

それにも関わらず、葬儀は質素だった。葬儀に使われたお寺に祭壇は用意されていなくて、供物も供花もなかった。がらんとしたお寺の本堂に、葉太郎の奥さんとふたりの娘さんが喪服を着て立っていた。三人とも静かな顔をしていて、涙は流していなかった。そこに涙がないことに、三人の悲しみの深さを感じた。悲しみが強すぎると、きつと涙は出ない。奥さんは葉太郎の遺影を抱いていて、その両隣に娘さんたちが寄り添っていた。娘さんたちはふたりとも葉太郎とはあまり似ていなかった。奥さんは華やかさはないけれど美しい人だった。奥さんに抱かれた葉太郎は笑っていた。みんなを幸せにする、あの陽だまりのような笑顔だった。

同僚や学生や友人たちが列をなし、棺に花を手向けていく。列の最後尾に立って順番を待ちながら、もしかしたらこのなかに葉太郎の歴代の恋人もいるのではないかと思った。一人ひとり顔を見たけれど、もちろんわかるはずもなかった。人づてに葉太郎の死を知った歴代の恋人たちは、きつと日本の各地でそれぞれに葉太郎の冥福を祈っているのだと想像した。つきまといをして葉太郎を苦しめた自分は、ひどく幼く情けない人間だと思った。

花に埋もれるように横たわる棺のなかの葉太郎は、とても小さく見えた。葉太郎の魂は大きかったのだ。そう思った。白い菊の花のなかに眠る葉太郎は、ぽっかりと口を開いていた。自分が動かないことに驚いているように見えた。あるいは、まだ話し足りないようだった。きつと、話し残したことがたくさんあるのだ。奥さんや娘さんたちに語る父親としての言葉なのかもしれないし、学生たちに語る言葉なのかもしれない。学術的な重要な発見なのかも

しれない。私に語る言葉があったら嬉しく思う。

『俺が死んだなどと信じている不届き者がいるというのは、なんと悲しいことか。俺がこんなに早く死ぬわけがないだろう』

葉太郎がむくりと起き上がってそんな声を発することはもちろんなかった。けれど、そんな悪い冗談のようなサプライズが起きることを、きっと誰もが心の底から望んでいた。

葉太郎の口の闇は暗く、深かった。葉太郎の首元に菊を手向けると、菊はくたりと頭をもたげ、白色の花が葉太郎の口を塞いだ。まるで蓋をするように。

花を手向けるとき、葉太郎の首にそつと触れた。葉太郎の温度はゼロだった。私の望みを断ち切る、絶対的な冷たさだった。突然いなくなってしまったことの驚きを一番伝えたい相手がもうそこにはいないという事実が、押し寄せる波のように何度も胸に迫ってきた。けれど、私は悲しくなかった。空白のような虚しさはあったけれど、悲しさはなかった。感情が追いつかなかった。葉太郎が死んでから、私は泣いていなかった。

お経の声の向こうで、葉太郎との思い出がぐるぐると回っている。葉太郎が私の服を剥いでいく。全裸になった私に目隠しを充てて、両の手首を縛って物干しに吊るす。声をかけながらビデオを回す。

ビデオ……。

葉太郎の撮影したビデオテープのことが頭に浮かんだ。

あのビデオを奥さんが見つけたら……。

それは、とても残酷なことのように思えた。奥さんが見つけるよりも先に、どうにかしてビデオテープを回収しなければ、そう思った。けれど、いくら考えても、その方法は浮かばなかった。

葉太郎は奥さんの胸のなかで笑っている。

笑っている場合じゃないよ、葉太郎。

そう話しかけても、葉太郎はなにも答えない。

ふと、お父さんの葬儀の日のことを思った。あの日、お母さんはどんなだったのだろう。普段見ることのないくらい溢れた黒い人たちに圧倒されたのか、歎玄さんの読経の印象が強かったのか、お母さんの様子を思い出すことができない。ただ、お母さんが泣いていた記憶はない。

そうだ。お父さんが死んだ夜、私はお母さんと一緒に寝たのだった。お父さんの眠る部屋に布団を敷いて、お母さんとふたりで眠ったのだった。お母さんは、私を胸に抱きながら

「寂しいね、紗南子」とつぶやき、私の背中を撫で続けたのだった。お母さんが変わったのは、お父さんが死んでからのことだった。

お母さんは、寂しかったのかもしれない。

そんな風に思った。

たくさんの男の人とからだを重ねたり私に当たったりするのは、寂しさの行き場がなかったせいなのかもしれない。

そう思った。

お母さんはきつと、自分のなかに広がる寂しさを、お父さんにしか埋められない寂しさを、どうにかしたかったのだ。寂しければなにをしても良いということにはならない。ましてや、人を巻き込んだり傷つけたりするのは、絶対にしてはいけないことだ。けれど、寂しさの発露の仕方をこれだと決めつけることはしたくなかった。正しいとか正しくないとか、そういう判断を下したくなかった。お母さんを赦すか否かということとは別の話として、寂しさによって人生を狂わせてしまう人の苦しみを、私は心に留めておきたいと思った。

葉太郎がみんなとお別れをしようとしている。葉太郎の遺影は、やはりどこか冗談のようだった。周りにいるたくさんの人が鬱陶しいと思った。ひとりになりたいと思った。ひとりになったら、しばらく誰とも会いたくない。そう思った。早く、葬儀を終えて静かな場所に戻りたかった。

葉太郎がいなくなってから、私のなかの感覚が調子を狂わせたようだった。ひとりで部屋にいと、今にも家のチャイムが鳴って道具一式の入った鞆を提げた葉太郎が現れるような気がする。チャイムは鳴らないまま、夜を迎える。薄く開いたままのクローゼットの奥に広がる闇が葬儀のときに見た葉太郎の口の闇に似ている。闇のなかから葉太郎の声が聞こえてくるんじゃないかと耳を澄ますけれど、闇は沈黙を貫く。しばらく声を待つけれど、声は聞こえてこない。

『誰にでも話したくない日はあるよね。今日はおやすみ』

そつとクローゼットを閉めて、自分も布団に入る。

葉太郎が死んで二週間が経とうとしていた。土曜日その日は、朝目覚めたときから下腹部のあたりに不穏な違和感を覚えていた。洗面所で顔を洗っていると、下着に温かな液体が広がるのを感じた。その液体は、ジャマのなかで内腿を伝いふくらはぎへと落ちていった。

恐る恐る下を見ると、ベージュのパンツが赤く染まっていた。

「流産です。子宮の中のものが、すべて外に流れてしまった状態です」

女医さんから説明を受けているとき、下腹部の痛みも出血もすでに治まっていた。

お腹から子が消えた。

私のなかから子がなくなって初めて、葉太郎の死を実感した。葉太郎は死んだのだと、深く思った。葉太郎とはもう会えないのだと理解した。

葉太郎と同じ誕生日に生まれる予定だった子供の性別はわからなかったけれど、私はその子が男の子だと信じて疑わなかった。占星術などまったく信じていないのに、誕生日が一緒ならきつと葉太郎に似た性格になるだろうと、ワクワクしていた。葉太郎とは一緒になれないけれど、生まれてくる子を葉太郎の分身と思い、分身と過ごす日々を楽しみにしていた。お腹のなかの子とともに私のなかの葉太郎が死んだ。

葉太郎を殺したのは私だ。

そう思った。

私のつきまといが葉太郎にストレスを与えたんだ。私がつきまとわなければ葉太郎はまだ生きていたんだ。私が葉太郎と出会わなければ葉太郎はまだ死ぬことはなかったんだ。そう思うと、途轍もない後悔とどうしようもない自責の念が押し寄せた。からだのなかでぞわぞわとしたなにかが蠢いて、じっとしていられなかった。

『ごめんなさい、葉太郎。私のせいだ』

部屋を歩き回りながらつぶやく。涙が溢れてくる。止まらない。

『お前、また自分を責めているのか？』

葉太郎の声がする。

『お前のせいではない』

私は立ち止まる。

『私のせいだよ。私のしたことは、悪だよ』

天井を見上げて言う。

『自分ですべてを背負い込もうとするな。お前のしたことは悪ではない。お前の行動は、俺とお前との関係から沸き起こったはずみだ。俺の死はお前とは独立して起きた事柄だ。何度でも言う。自分を責めるな』

葉太郎の声が聞こえる。

あの日、葉太郎は言った。

『まったくの悪人などいないという言葉を聞くが、それをそうだと認めたとしてもだな、悪は存在するのだよ。悪人であることと悪を犯すことは区別して考えなければならぬのだよ。悠々某やお前の母親がお前に対してしたことは、悪なのだ。彼らがどんな人間であるのかは関係ないのだ。たとえ善人でも、悪を犯したら償わなければならないのだ。たとえ善人が犯したたった一度の悪だとしても、それが悪であれば、悪を為した者は償わなければならないのだ。赦しの道があるというのならば、それは償いの先にあるべきなのだ。お前が責任を感じることなどない。まったくないのだよ。人の汚い部分を見てきて、それでもなお人を信じようとするお前のその姿勢は尊敬する。だが、すべてにおいて自己責任で生きていこうとする姿勢は、やはり違うと思うのだよ。人を頼れよ。頼る強さを持つてくれよ。厳しいことを言ってしまうばだな、人を信じようとするくせに人を頼れないというのは、大いなる矛盾だぞ。極論となるが、すべてを自己責任で解決できるとしたら、人はなんのためにいるのだ？ 人に頼らずに生きられる人間などいるか？ 俺はそんな人間などいないと思うぞ。それともお前、悟りでも開きたいのか？ そんなつまらないことに人生を捧げるなよ。お前はお前の人生をのびのびと生きろよ』

あの日、お母さんのことや悠々爺のこと、お兄ちゃんたちのことやモミオのことを話した私に、葉太郎はそう言った。珍しく真面目に、懸命に。黙ったままでいると、葉太郎は調子を変えて言った。

『人生は、はずみなのだよ。理路整然と自分の思う通りに進むはずがないのだよ。はずみで人と出会い、はずみで楽しいことが起こるのだよ。はずみで恥ずかしい思いもするだろうし、はずみで悲しい結末になることもあるだろう。いずれにせよ、はずみというのは自分ではコントロールできないもので、コントロールできないものであるからして、人生は面白いのだよ』

『けど、やっぱり恥ずかしいよ。コントロールできない自分はなにをやるかわからなくて、それはすごく怖いし、恥ずかしいよ』

葉太郎は、可笑しそうに笑った。

『お前、恥を馬鹿にするものじゃないぞ。人に恥部なくして人は人たりえないのだ。恥部こそ人を人たらしめる最高のスパイスなのだぞ。いいか、人生とは恥の連続なのだよ。恥のない人生など目隠しと縄とビデオカメラのないプレイみたいなものではないか。味気な

いにもほどがある。間違えるなよ。「恥をかいてこそ人間は成長をするのだ」という話ではないぞ。恥をかいた人間の、その恥じらいこそ美しいのだよ。恥じらう顔はなんとぞくぞくするものか。さあ、お前の恥じらう顔を見せておくれ」

あの日、葉太郎はそう言うとお風呂場からお湯の入った桶を持ってきて、シェービングクリームを塗った。

葉太郎に剃られたあの夜から、私は陰毛を剃り続けている。気まぐれに寝た男の子たちは裸の私を見ると決まって驚いたし、無毛の私の股間について勃たずに帰った男の子もいた。もしかしたら、噂になっていたかもしれない。けれど、私は剃り続けた。私は私なりの形で、葉太郎への貞操を守ろうとしていた。

ビデオのことは、葬儀を終えたその日に哲学科のボスに直接話した。乏しい表情で私の話を聞いていたボスは、私が話し終えると目を見て言った。

「大切なことを、しかも言いにくいことを教えてくれてありがとうございます。遺品の整理はこれからでしょう。私が必要とします。キミも疲れてるだろうからちょっと休んだほうがいい。ひどい顔をしている」

そう言ったボスの顔は、げっそりとやつれていた。

みんな葉太郎の死をそれぞれの仕方ではしんでいて、その悲しみから抜けきれずにいた。

ぼっち

三月の終わりに流産したあと、どうしようもなく気が塞いだ。誰にも会いたくないのにひとりであるのが辛かった。ふと、晴海の顔が浮かんだ。気づくと私は携帯電話を手にしてボタンを押していた。電話の向こうの晴海は、久しぶりの電話にもかかわらなかつた。変わらないテンションだった。晴海の変わらない様子が、私の気持ちを少しだけ楽にした。葉太郎が死んだことを電話で晴海に伝えると、晴海は「え？」と驚いたけれど、

「よかったら会わない？ ちょうど私もサナコに話したいことがあったんだ。連休、泊めてよ？」

いつもの押しの強さで、ゴールデンウィークに泊まりに来ることになった。

連休初日、晴海を迎えに駅へ行くと、

「こんないい天気なんだから、家にいるのはもったいないよ。歩くよ、サナコ」

挨拶もなくそう言った。晴海はヒールの高い靴を履いていて、短いスカートから長い足が伸びていた。

晴海は最初から歩くつもりで来たのか、アパートに着くとさっとジーンズに履き替えて、バッグからスニーカーを取り出した。

「さあ、行くよ？」

ふたりでスニーカーを履いて部屋を出た。

晴海は、とにかくよくしゃべった。葉太郎のことを尋ねることはしなくて、自らの近況や過去を話した。まだ、葉太郎のことを話せるまでの心の整理がついていなかった。もしかしたら、晴海はそれを察してくれたのかもしれない。あるいは、晴海はただ、自分のことで精一杯だったのかもしれない。晴海は、そのどちらでもないようなあっけらかんとした態度で、自分のなかに溜まっていたものをすべて出し切るような勢いでしゃべり続けた。私は聞いた。ただ、耳を傾けた。

「高校のとき、サナコに声をかけるまでずっとひとりでしたでしょ、あたし。あれ、実は寂しかったんだよね。平気な顔してたけど、ホントはむちゃくちゃ寂しかったの。学校だけじゃなくて、家でもひとりだし。そりゃ母親と父親はいるよ？　けど、気持ちかひとりっていうか。青臭いこと言っちゃうと、あたしをわかってくれる人はいないんだなって思ってた。母親は優しいし料理が上手だし寛容だし正義感が強いし、欠点がないんじゃないかってくらい完璧な人だけど、息がつかまるんだよね。弁護士のお父さんもクライアント思いで曲がったことが許せない、けど物腰の柔らかな人で、父親と母親が揃うと、なんだか自分が汚れてるような気分になっちゃうんだよね。父親も母親も特定の宗教の信者ってわけじゃないけど、ふたり自体が宗教って感じなんだよね。あたし、間違ってる、宗教施設に紛れ込んだんじゃないかって、そんな風に思ったこともあったよ。いったん、無理、って思ったら全部がそういう風に見えるっちゃうのかな。お母さんの趣味がフラワーアレンジメントってことも、お父さんの趣味が音楽鑑賞だったり（もちろんロックとかパンクじゃなくて、クラシックだよ）、そういうのも受け付けなくなっちゃって。綺麗すぎる水のなかでは魚が生きていけない、っていうような諺かなんかがあったと思うけど、うち、まさにそれ。綺麗すぎるんだよね。中学生のとき、死にたくて仕方なかったんだ。家はあだし、学校にも居場所がなくて。みんなはキラキラ輝いてるのにあたしは息をするのも苦しくて。自分の周りの空気だけなんてこんなに薄いんだらうって思ったよ。自殺する勇氣はなかったけど、カッターで太ももとか



胸に傷つけてたんだ。手首だと、母親とか父親に見つかったとき、面倒だから。リスカするのにも気を遣ってるんだ、って思ったら可笑しくて、笑いながらカッターを這わせてたんだ」

アパートを囲む住宅街を抜けると、田んぼのなかの一本道がしばらく続く。大雪の夜、モスクに現れた葉太郎と歩いた道だ。街灯のないこの道を、葉太郎と手をつないで歩いた。凍り始めた道に足を滑らせる私を助けようとして、葉太郎の方がバランスを崩した。「あうわ！」葉太郎がおかしな声を上げ、「あうわ！」私が真似をした。しんしんと降る雪がふたりの声を吸い込んだ。

「塾にも入れられていたんだけど、そこで初めての彼氏と知り合ったんだ。他校の男の子。学年が一個上で、塾に来てるくせに不良っぽい子だったな。あたしも人のこと言えないんだけどね。休み時間になるとこっそり屋上に行っていたんだけど、そこに男の子もいて。最初は、そんなに話すこともなくて、ただ、屋上のあっちとこっちにいただけだったんだけど、だんだん、距離が縮んでいって、ある日、男の子から話をしてくれたんだ。学校のこととか友達の話とか。他愛のない話。男の子が高校合格したよって報告に来てくれたときに、ついみたいに『付き合おうか』って告白されて付き合うことになったんだ。その男の子、見た目は不良っぽくて、実際、斜めからモノを見るのが癖になってるみたいで、いつもブツブツ文句みたいなツッコミ入ってるんだけど、そのツッコミが的を射てるからおかしくて、一緒にいると飽きなくて、すごく楽しかったな。男の子は照れてたのか、好きだって一度も言ってくれたことはなくて、だけど、ああ、この人は浮気とかしないだろうなっていう安らぎみたいなのを感じたんだ。気付いたらもう息が苦しくなることがなくなっていて、ああ、あたしにも居場所ができたんだって初めて思ったんだ。高校一年のゴールデンウィークに初めてセックスしたのもその人だったんだ。一年半付き合ってたけどね」

田んぼの道を抜けて細くて短い橋を渡ると、街で一番格式の高いホテルが見えてくる。ホテルの前には小さな公園がある。公園は小高く盛られた土の上にあって、十五段ほどの階段を登ると、綺麗に整備された芝生が広がっている。石畳の小道が二筋通っていて、犬の散歩をする人がいて、ベビーカーを押す夫婦がいる。公園をぐるりと囲むように設置されたベンチには、頭上に広がる青空を望むように寝転ぶ人、肩を寄せあうカップル、芝生で遊ぶ子供を眺める親がいる。公園の脇にはイタリアンのお店がある。クリスマスのあの日、葉太郎と訪れたお店だ。小柄なちょびヒゲのマスターと大柄で柔和な顔つきの店員さんがふたりで営んでいる。小さなお店だ。ミモザサラダとほうれん草とトマトのオープンオムレツ、子羊

のカツレツとオーブン焼きのスパゲッティを注文した葉太郎は、「一杯だけ飲むか？」と赤ワインをデキャンタで追加した。一杯だけ、と飲み始めた私たちだっただけけれど、料理の美味しさも相まって、デキャンタはすぐに空になった。「もう一杯だけ飲むか？」「もう一杯だけ」。そんな風にして、次々に注文したお酒とおつまみとで、テーブルは埋め尽くされた。私たちは、ばんばんに張ったお腹を撫でながら、たくさんの料理とお酒を平らげた。

「あたし、誰とでも寝るって言われてたじゃん？（そのくらいの噂、耳に入ってくるよ。）けどね、誰とでもっていうわけじゃなかったんだ。寂しくて、だけどその寂しさをぶつける場所がなくて、そんな自分に苛立って、ナンパしてきた男の子と寝た時期もあったけど（最初の彼氏と別れた直後あたりだよ）、それってますます孤独感が増えていくことなんだって気づいてやめたんだ。そのあとは、告白するか告白されるかして付き合うようになってから、つてちゃんと決めたの。セックスのときはコンドームもするし。コンドーム嫌がる男の子とはしないようにしているし。このこと人に話すの、サナコが初めてなんだ。クラスの子とかどうでもいいし、どうでもいい人たちからはどう思われてもいいし。わざわざ説明する気もないし義理もないし。説明してもどうせわかってくれないし。けど、サナコにはちゃんと話しておきたかったんだ」

左斜め前に見えてきたバスターミナルの隣には、街で一番大きな本屋の入ったビルがある。葉太郎と何度もこの本屋を訪れた。地下の哲学書コーナーを一緒に巡ったり、音楽書のコーナーで葉太郎がジャズについて熱く語るのを聞いた。ホワイトデーのお返しに、葉太郎は、サマセット・モームの『月と六ペンス』と稲垣足穂の『一千一秒物語』を買ってくれた。

「男の人、つていうか彼氏……かな、彼氏と一緒にいると落ち着くんだよね。だから、途切れさせるのが怖くて、ああ、もうこの人とはだめかな、つて感じると、次の人を探しちゃうんだよね。だから、彼氏が途切れないうつていうのは、本当のこと。なのに、つて話なんだけど、あたし、彼氏がいても無性にひとりになりたくなるときがあるんだ。学校ではずっとひとりだけど、あれは、ひとりなんだけどひとりじゃないつて感じなんだよね。ひとりであることを余儀なくされているひとり、と、ひとりであることを望んでひとりでいること、つてどちらも『ひとりでいる』状態なんだけど、心のなかはかなり違うんだよね。余儀なくされる方は、あたしでもかなり辛いし堪えるし消耗するんだよ。そういう『ひとり』じゃなくて、自分自身と向き合えるひとりの時間つていうのが必要なんだ。でも、そういう『自分のためのひとり』の時間をしっかりと過ごすためには、『ひとりじゃない時間』、つていうか『誰かと一緒に時間』つていうのが欠かせないつて気づいたんだ。回りくどい感じになっちゃった

けど、人間は、『ひとりである時間』も『誰かという時間』も、両方が必要なんだよって話。あれ？ もしかして、あたしの言ってることって超当たり前のことだったりする？」

大学へ向かう坂道は緩く長く続く。葉太郎とバスでくだったこの道を、一緒に歩くことはついになかった。坂の脇には、内科や精神科、歯医者や皮膚科など、クリニックが点々と建っている。昔から、「医院通り」と呼ばれるこの道は、朝と夕方、小学生から大学生まで、歩いたり自転車を走らせる学生で溢れかえる。別名「学生通り」、またの名を「チャイニーズストリート」。

「あたし、プロポーズされたんだ」

晴海は言った。テレビ局の彼氏は奥さんと離婚して晴海と一緒にしようとしていた。

「結婚するの？」

「しないよ」

「理由、聞いてもいい？」

「奥さんがぼっちになっちゃうじゃん」

晴海はそう言った。

「心の通わない人といってもぼっちなのかもしれないし、ぼっちを感じてるからこそ外に外について生活が派手になってるのかもしれない。ホントのところはよく分からないよ。けど、物理的にひとりになるって、かなり堪えると思うんだ。浮気する夫でもお金だけのつながりだとしても、そこに人がいてくれるっていうだけで救われることがあると思うんだ。さっき言ったことと矛盾してるかもだけど。だから、あたしは彼とは結婚しない。別れるよ。不倫はしばらくはいいかな」

晴海はさっぱりとした様子だった。

「しばらくは、って、またするの？」

「お。いいツツコミ」

晴海は、広い側溝を軽快に飛び越えると、くるりところらにからだを向けて言った。

「あたし、もうしないよ、不倫」

「そっか。着いたよ。ここが、私と葉太郎の出会った場所」

葉太郎の研究室は、葉太郎がいなくなつて間もなく赴任してきた若い研究者が使っている。晴海を連れて、誰もいないキャンパスを歩いた。葉太郎の記憶の詰まったキャンパスは、ひっそりと静まり返っていた。

「サナコはどうなの？」

生協前広場のベンチに座って自動販売機で買ったジュースを飲んでみると、晴海が聞いた。横を見ると、晴海は空を仰いでいた。

「うん。私は……、そうだね。そろそろ始動しようかな。こんなにいい天気だし」

見上げると、深緑の向こうに雲ひとつない青空が広がっていた。

## 恥部

「藤澤葉太郎、彼はいい男だった」

「正直な男だった」

「え？ 知ってるの？」

「会ったことがあるんだ」

「紗南子の通う大学で」

「そうなの？」

大学四年になる春。葉太郎がこの世を去って一年が経った春だ。葉太郎のお墓参りに東京へ行った。東京へ出る日程を立ててから、かずみ兄ちゃんに連絡を取った。大学に入ってから一度も帰省していないせいもあって、お兄ちゃんたちとはまったく顔を合わせていなかった。お兄ちゃんたちからの連絡が途絶えた当初は不思議に思ったけれど、お兄ちゃんたちのそうした変化を気にかけるには、私の日常は目まぐるし過ぎた。あの頃の私は、葉太郎のことと自分のことしか頭になくて、周りがまったく見えていなかった。

「紗南子、問題起こしただろう？」

「藤澤氏の研究室に忍び込んだ、あれだよ」

「え？ なんで知ってるの？」

「あのとき、大学から電話があったんだ」

「紗南子、連絡先にかずみ兄ちゃんの住所と電話番号を書いたろ？」

「ああ、ごめんなさい」

「責めているわけじゃないよ」

「むしろ、そうしてくれて良かったんだ」

あの夏、大学からの連絡を受けたお兄ちゃんたちは、週末に大学を訪れて葉太郎やボスたちと話をしたのだった。ボスから状況を説明されて、休学の旨も伝えられた。ボスは、淡々

と事実を説明した。

「しばらく会わないうちに、紗南子もずいぶんと大胆になったなと思ったよ」

「あの髭の偉そうな男、オレらの反応にちよつと引いてたよな。お気の毒に」

お兄ちゃんたちはそう言って笑ったけれど、私に気を遣ってくれているのが伝わってきた。

葉太郎はじつとボスの話を聞いていて、とても神妙な顔つきをしていたのだとひろし兄ちゃんが教えてくれた。神妙な顔つきの葉太郎をうまく想像できなかった。ボスが話し終えると、葉太郎はすつと立ち上がって頭を下げた。

『私にも落ち度がありました。申し訳ありませんでした。』藤澤氏はそう言って謝ったんだ

「髭氏は驚いたように藤澤氏を見あげて聞いたんだ。『落ち度？ 藤澤先生、それはどういうことですか？』って」

「髭氏、かなり慌てていたな」

「そりゃそうさ。紗南子がひとりで暴走した結果だと思っていたのに、藤澤氏が自分にも非があると言い出したんだからね」

「葉太郎は、なんて言ったの？」

「藤澤氏は黙っていたよ」

「沈黙が答えだったんだ」

「お兄ちゃんたちは、どうしたの？」

「どうもこうもないよ。藤澤氏も紗南子も、もういい大人じゃないか」

「嫌がるのを無理にというのなら話は別だけれど、これは大人の恋だ」

お兄ちゃんたちは、葉太郎を責めることはしなかった。頭をさげ続ける葉太郎に、黙って頷いた。

「大人の恋じゃなかったら、嫌がるのを無理にしていたら、お兄ちゃんたちは葉太郎のことを殺していた？」

悠々爺のことが頭にあった。モミオのことも。私は冷静だった。自分でもびっくりするくらい心が凧いでいて、頭はキンと冷えていた。

「紗南子、お前は一体なにを言っているんだ？」

「殺すだなんて、ずいぶん物騒な話じゃないか」

「だって、お兄ちゃんたちは悠々爺を殺したんでしょ？ モミオを殺したんでしょ？ あ

の夜、お兄ちゃんたちが話してるの、聞いちゃったんだ。モミオの葬儀の夜」

「あの夜のはよく覚えてるけれど……」

「紗南子、お前、たぶん思い違いをしてるよ」

結論から言えば、モミオのことも悠々爺のことも私の早とちりだった。

臨海学校から帰ったお兄ちゃんたちは、家にいない私を探して長坂を歩いていて。河原に行くのと、悠々爺と私がいた。私は悠々爺に抱きかかえられていて、悠々爺は下半身を露出していた。お兄ちゃんたちはまだ小学五年と六年だったけれど、事態を察した。よくないことが起きたのだと。けれど、腰のピンと伸びた悠々爺は圧倒的な迫力があつた。お兄ちゃんたちはどうすることもできなかった。お母さんに話すという選択肢はなかった。お兄ちゃんたちも、お父さんが死んでからお母さんが変わったことを感じとっていた。お兄ちゃんたちはモミオに相談した。話を聞いたモミオは、

『罰が当たるよ。僕たちが手を下すまでもなく、天罰が下るよ』  
と言った。

それから、お兄ちゃんたちの頭の上の虚空をぎゅっつつかむように眼ざして、

『僕たちで紗南ちゃんを守るんだ』

そう言った。

悠々爺が死んだとき、お兄ちゃんたちは驚いた。本当に天罰が下るなんて、と驚いた。

「あれは本当に事故だったんだ」

「オレらはなにもしてないんだ」

お兄ちゃんたちは、まっすぐに私を見て言った。

「信じるよ」

私が言うと、お兄ちゃんたちはほっとしたような顔をした。

「悠々爺は事故で死んだけれど、また、再び紗南子にとっての悠々爺が現れないとも限らない。そう思ったんだ」

「オレらは、モミオに合わせる頃合いをずっと伺っていたんだ」

「そしてあの冬、オレらは紗南子とモミオを引き合わせた」

「紹介するまでに間が空いたのは、紗南子が大人の男を怖がるんじゃないかって思ったからなんだ」

お兄ちゃんたちは、真剣な眼差しで言葉を紡ぎ続けた。

「じゃあ、モミオは？ モミオが死んだのも、事故だったの？ まるでお兄ちゃんたちが手

にかけたように聞こえたよ？」

「あれはオレらにも責任があった」

「オレらが防ぐことはできたんだ」

高校へ進学してから遠ざかっているモミオの家に行こうという話になり、お兄ちゃんたちはモミオの家を訪れた。玄関を開けて、モミオを呼んだけれど応答はなかった。玄関のたきには竹で編まれたザルが置かれていて、ザルにはキノコが山のように盛られていた。

『このキノコ、ツキヨタケじゃないよね？』

ひろし兄ちゃんがしいたけに似たキノコを指差した。ツキヨタケというのは、大きさや形状や色がしいたけによく似たキノコで、食べると腹痛や嘔吐、下痢などの症状を引き起こすキノコだった。稀に中毒で死ぬこともあった。

『大丈夫だよ。長坂の人間が間違えるはずがないよ』

かずみ兄ちゃんが言うのと、

『それもそうだ。モミオも気づくよね』

ひろし兄ちゃんは納得し、ふたりはモミオの家をあとにした。

「あのとき、オレらがキノコのザルを回収しているか、モミオに一言声をかけていれば、モミオは死なずに済んだんだ」

「誰がキノコを置いていったかは結局分からなかったけど、ツキヨタケとしいたけを見分けるのは、目が見えないモミオには無理だって気付かなかったオレらも同罪なんだ」

ツキヨタケとしいたけの違いは、暗闇で緑色に発光するヒダだったり、断面の黒いシミだった。ツキヨタケに限らず、毒キノコを見分けるには、目視による確認が不可欠だった。長坂という田舎から、そして盲目のモミオから離れていたお兄ちゃんたちの頭からは、そうしたことがすっかりと抜け落ちていた。

お兄ちゃんたちの説明はきっと本当だった。けれど、私にはまだ気になっていることがあった。

「じゃあ、大輔と結芽からはなにを聞いたの？　なんで私とモミオが離れ離れになって正解だなんて言ったの？」

「モミオと付き合ってると思うよ、って聞いたよ」

「恋人のように毎日のように会っている、ってね」

「オレらはモミオのことが好きだった」

「モミオはとてもいい人だったからね」

「けれど、紗南子がモミオと結ばれるのには反対だったんだ」

「紗南子にはもっと広い世界を知ってほしかったし、目が見えない人のもとで一生を終えてほしくなかったんだ」

「だから、モミオが死んで、ホツとした部分があったんだ」

「どうでもいい人間に対しては寛容になれる。けれど、紗南子の幸せのことを考えた途端、ひどく偏屈になってしまっただ」

「差別的な人間になってしまっただ」

「不用意な発言をして申し訳なく思っているよ」

「本当に悪かった」

「ごめんな、紗南子」

喫茶店をあとにして、お兄ちゃんたちと夕飯を食べてその日のうちに電車でアパートに戻った。電車に揺られながら、もっと早くお兄ちゃんたちと話をしていればよかったと思った。お兄ちゃんたちを再び信じるまでに七年もかかってしまった。その時間は、とても長いように思えた。けれど、一方で、遅すぎるということはないのではないかとも思った。行動を起こすことに、きっと時間は関係ないのだ。

お兄ちゃんたちと会った翌週、長坂の実家へ帰省した。ほぼ五年ぶりの帰省だった。玄関を開けるとお母さんはいなくて、お仏壇の置かれた畳敷きの広間はがらんとしていた。

「ただいま」

とりあえずそう言っただが。田舎の匂いがある。私にはおばあちゃんの記憶がないけれど、これはきつとおばあちゃんの匂いなのだと思う。

居間へ行くと座卓に漬物とお茶菓子と急須と湯飲みが置かれていて、ハエ避けが被せられていた。ついさっきまで誰かがいたような雰囲気だった。ハエ避けをとって、漬物を食べる。お母さんの味だった。

お茶を淹れておせんべいを齧っていると、お母さんが戻ってきた。

「あらやだ。紗南子？ いるの？」

私の靴に気づいたのか、大きな声で私を呼んだ。

「ただいま」

そう言うと、

「ただいまじゃないわよ。こっちが電話しても全然出ないでおいで。心配したじゃないの



よ。和巳と浩がいなかったら、あんたのアパートに押しかけてたわよ」

「心配したの？」

「当たり前じゃないのよ。親なんだから」

久しぶりに会ったお母さんは、口調こそきつかったけれど拍子抜けするほど素直だった。対決を覚悟して帰ったのに、肩透かしを食らったようだった。けれど、言うことは言わなければならぬ。大きく息を吸って吐いた。それから、台所に入っていったお母さんに呼びかけた。

「お母さん。話があるんだ。こっち来て座ってもらえる？」

「話ってなによ？ 夕飯の支度しなくちゃならないんだから、さっさと済ませてよ？」

お母さんは面倒くさそうに言ったけれど、エプロンで手を拭きながら戻ってくると座布団に腰を下ろした。

「で、話ってなによ？」

「大事なことで話すね。お母さん、これから話すことをわかってもらおうとは思っていないから、そのつもりで聞いてね。そもそも人間同士が分かり合うのって不可能だから、わかなくて当然だから、プレッシャーに感じないでね」

「なに小難しいこと言ってるのよ。これだから、女だてらに勉強なんかすると——」

「お母さん、聞いて。あのね、私、お母さんに甘えたい。お母さんに優しくしてほしい。ずっと甘えたくて、だけどお母さんは怖くて、どうしていいかわからなくて、ずっと辛かったんだよ。今からでも遅くないと思う。お母さんに甘えさせてほしい。優しくしてほしい。二十歳すぎてこんなこと言うのは恥ずかしいけど、お願い、お母さん。私のお母さんになってください」

葉太郎は、お母さんが私にしたことを悪だと言った。それについて、お母さんは償わなければならぬと言った。確かに私はお母さんの言動に苦しめられた。けれど、お母さんの言動が悪そのものとは、どうしても思うことができなかつた。苦しめたけれど、お母さんを憎み切ることができなかつた。葉太郎の言うように、仮にお母さんが私にしたことが悪そのものだとお母さんが償わなければならぬならば、お母さんにはお母さんになってほしかった。甘えさせてほしかった。優しい言葉がほしかった。話を聞いてほしくて、他愛のない話で笑い合いたかった。

そうしたことをお母さんに話した。責めるのではなく、心の内から湧き出るそのままを、お母さんに伝えた。

お母さんは口を挟むことなく聞いた。とても珍しいことだった。

「長くなっちゃった。私の話は、これでおしまい。聞いてくれて、ありがとう。電車の時間があるから、そろそろ帰るね」

そう言っつて、立ち上がろうとすると、

「ちょっと、待ちなさいよ」

お母さんがぶっきらぼうに言った。

上げかけた腰を下ろすと、お母さんはそっぽを向いて、さっきよりもさらにぶっきらぼうな、困ったような調子で言った。

「甘えたいって言われたってさ、優しくしてほしいって言っただってさ、あたしだって、どうしたらいいのかわかんないのよ。どうやって甘えさせていいのか、優しくするってどうすればいいのか、わかんないのよ」

「どういうこと？」

「どういうことってそういうことよ。あんた、頭いいんだから察しなさいよ。母親から優しくされたことがなくて、甘えた記憶もない人間が、どうやって娘に優しくできるっていうのよ。どうやって甘えさせてやれるっていうのよ。こっちが聞きたいわよ。優しくさってんなのか」

「けど、おばあちゃん、優しくかったんじゃないか？ お兄ちゃんたちが言っただよ」

「年とって、丸くなったのよ。昔はそれはひどいもんだったわよ、あの人」

お母さんは、指先のささくれをつまんで引きちぎると、畳に向けてぽいと放った。その様子がまるで拗ねている少女のようで、思わず笑った。

「なに笑ってんのよ？ 人がせっかく真剣に話してるっていうのにさ」

「お母さん、可愛いなって思っつて」

「可愛いってなによ。バカにしてるわけ？」

「その喧嘩っ早いところも、きつと魅力なんだろうね」

「なんだよ、その言い方。死んだお父さんにそっくりじゃない。ああ、ヤダヤダ」

そう言っつと、お母さんは腰を上げて台所へと去っつていく。

「あんた、夕飯くらい食べていっつたらどうなのよ。遅くなるんだったら泊まっつていっつてもあたしは迷惑じゃないわよ。あんたの家でもあるんだから」

私を見ずに、お母さんは言う。

「え？ いいの？」

「いいわよ。もうひとり来るけどね」

その夜、私は歎玄さんとお母さんと食卓を囲んだ。五年ぶりに食べたお母さんの田舎料理は懐かしい味がした。

『人間同士がわかりあえることはない』

葉太郎はそう言った。確かに世の中にはわかりあえないことの方が多いのかもしれない。けれど、生きていけば、ほんのわずかにせよ、わかりあえる瞬間というものに遭遇することがあるのだ。笑い合うふたりと煮物をつつきながら、そんなことを思った。

季節外れの冷たい雨が満開に咲き誇っていた桜の花びらをすっかり落とした翌日、小笠原さんから封書が届いた。封筒のなかには「招待状」と書かれた白いカードが一枚入っていた。カードには、日時と手書きの地図が描かれていた。地図はモンクから始まって、山へと道を伸ばしていった。モンクからくねくねと曲がりくねった道を行った先にぼつかりと現れる湖のほとりの一角に、星印が記されていた。

その日、到着すると、山小屋風の建物のなかから男の人の声が重なるように聞こえてきた。チャイムを鳴らした私を出迎えたのは、濱本さんだった。

「お久しぶりです。あれ？ 女の人の格好していませんね」

私が聞くと、男性誌のモデルのような格好をした濱本さんは、にっこりと笑って言った。

「そう。もう鎧はいらなくなったんよ」

「鎧？」

「あれは、俺の鎧だったんよ。俺が人を信じれんのは自分に自信がないからで、女の人の服を着るのは、自信を取り戻すための儀式だったんだったわかったんよね」

「なんだかめまぐるしい心境の変化ですね。なにがあったんですか？」

私と濱本さんが話していると、奥から小笠原さんが現れた。肩に猫を乗せている。

「お久しぶりです、辻さん。立ち話もなんですから、どうぞなかに入ってゆっくりとお話しましょう」

「そうよ。久しぶりにゆっくり話そうよ」

その夜、私たちは小笠原さんの用意してくれた手料理と濱本さんが買ってきたお酒を飲んだり食べたりしながら、離れていた間の話をした。三人揃って話すのは初めてだったけれど、ずっと前からこうであったような、とても親密で心地の良い自然な時間が流れていた。

濱本さんは、奥さんにすべて話した。女の人の服を着てお化粧をして奥さんと向き合つて、女の人が信じられないことや自信がないことを話した。女の人の格好をして現れた濱本さんに、奥さんは驚いたように目を丸くしたけれど、嫌な顔はしなかった。

奥さんの第一声は、「やだ。私より綺麗かも」だった。

『それで陸也の気持ち落ち着くんなら、私は全然かまわんよ。今まで話せなくて、辛かったよね？ これからは話したかったら遠慮しないで話してよ。もちろん、話したくなかったら、無理して話さないよ』

奥さんはそう言った。

「俺、奥さんに偏見を持っていたんよね。綺麗な人は冷たいって、先入観みたいなものを抱いていたんよ。奥さんのまっすぐな目を見て思ったんよ。俺は、この人といったら大丈夫だって。単純かもしれないけれど、そう思ったら、今まで信じることに囚われていた自分が急に馬鹿らしくなって、信じるとか信じないとか、どうでもいいことのように思えてきたんよ。大事なのは、その人がどういう人かあれこれ考えることじゃなくて、目の前にいるその人そのままだと見えるかどうかじゃないかって」

濱本さんは恥ずかしそうに頭を掻いた。

「濱本さんが奥さんに話すきっかけを与えたのは、辻さん、あなただったのですよ」  
膝に乗ってごろごろと喉を鳴らす猫を撫でながら、小笠原さんが言った。

「そうよ。紗南子ちゃんのおかげよ。ありがとね」

「辻さんは、あれからどんな風に過ごしていたのですか？」

「俺、手紙書いたのに、返事くれんかったよね？ よかったら、話、聞かせてよ」

お酒のせいとか、頬を赤くしてこちらをじっと見つめるふたりに、私は聞く。

「……恥部。私の恥部を話してもいいですか？」

「チブ、ですか？」

「チブって、あの恥部？」

あつげにとられるふたりに、私は宣言する。

「これから恥部の話をします。けっこうえぐい話です。しかも長いです。準備はよろしいでしょうか」

「準備、オッケーよ」

「ぜひ聞きましょう」

ふたりは、それぞれのグラスにワインを注ぎ足し、宙に掲げる。私も真似て、グラスを宙

にかざす。

「紗南子ちゃんの恥部の話に」

三つのガラスの赤が揺れ、恥部の話が始まる。

了

【参考文献】

中村元『東方の言葉』（角川文庫）

金杉武司『心の哲学入門』（勁草書房）